津山市埋蔵文化財発掘調査報告第68集

二宮岡東遺跡

2000

津山市教育委員会

二宮岡東遺跡

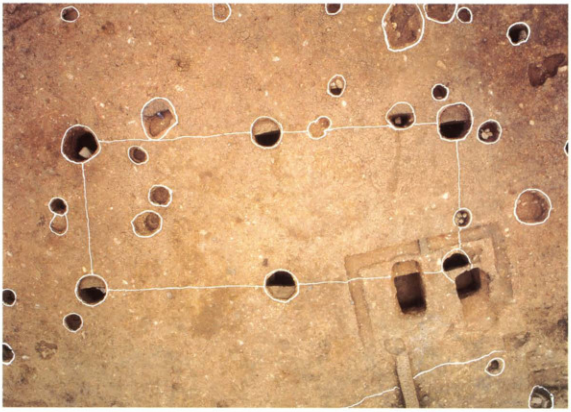
2000

津山市教育委員会

1．二宮岡東遺跡遠景（南から）

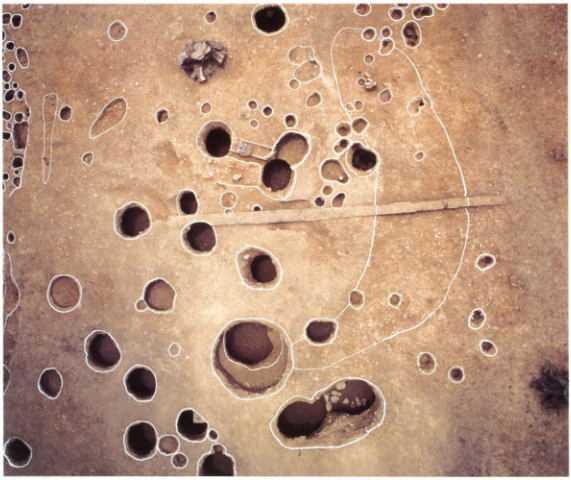
2．二宮岡東遺跡遠景（西から）

1．二宮岡東遺跡全景



2．建物 1

1．竪穴住居 2



2．古墳と貯蔵穴群

序

津山市は中国山地の山懐の盆地に位置します。その歴史をひもときますと、弥生時代の集落遺跡としては沼弥生住居跡群があり、昭和27年に調査され住居や高床式の建物が復元されております。また、古墳では史跡に指定されている美和山古墳群など約７００基が点在します。古代になりますと美作国に国し国府がおかれます。これは和銅6（７１３）年の事であります。江戸時代になりますと、鶴山にお城が築かれ森、松平両氏が城主となり明治維新を迎えます。惜しい事にお城の建物は明治７年に取り壊され、現在では石垣しか残っておりませんが、鶴山公園として市民に親しまれております。

さて、二宮岡東遺跡は墓地造成に伴い調査された遺跡であります。美和山古墳群に近く吉井川を見渡せる丘陵上に位置しております。弥生時代を中心とした集落跡が見つかり、その中でも貯蔵穴が多数検出されております。また、墳丘はほとんど残っていませんでしたが、古墳も１基検出されております。これら調査成果は、今後の調査・研究の一助となるものと期待しております。

なお、末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なるご協力をいただいた、津山市シルバー人材センター並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成12年3月31日

津山市教育委員会
教育長　松尾　康義

例　言

1．本書は国道53号バイパス建設事業関連代替墓地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
1．発掘調査経費はすべて原因者である建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所の負担である。
1．発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター小郷利幸、川村雪絵が担当した。
1．本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ２・３、Ⅳ２・３を小郷、Ⅲ１、Ⅳ１を川村が担当し、編集は川村が行った。
1．本書に用いたレベル高は海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。
1．本書第２図に使用した「周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行５万分の１（津山西部）を複製したものである。
1．本書には挿図に遺構等の略称を用いている。略称は次の通りである。
　ＳＢ：建物跡　ＳＡ：柵列　ＳＨ：住居跡　ＳＴ：段状遺構　ＴＺ：貯蔵穴　ＳＧ：近世墓
　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット（柱穴）　Ｔ：トレンチ
1．整理作業から報告書作成に至るまで、上原香里、三谷順子、仁木智子、上原恵美、岩本美紀、野上恭子、岩本えり子、家元弘子各諸氏の協力を得た。
1．出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600－１）で保管している。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
　1．遺跡の位置……1
　2．周辺の遺跡……3
Ⅱ　調査の経過……5
　1．調査にいたる経過……5
　2．調査の経過……5
　3．調査体制……8
Ⅲ　調査の記録……11
　1．弥生時代……11
　　（1）建物……11
　　（2）柵列……13
　　（3）竪穴住居……17
　　（4）段状遺構……22
　　（5）貯蔵穴……28
　　（6）その他の遺構・遺物……50
　2．古墳時代……65
　　（1）古墳……65
　　（2）その他の遺物……68
　3．古代～近世……70
　　（1）柵列……70
　　（2）段状遺構……70
　　（3）土坑……70
　　（4）墓……73
　　（5）その他の遺構・遺物……76
Ⅳ　まとめ……80
　1．弥生時代……80
　2．古墳時代……92
　3．古代～近世……95

挿図目次

第1図　調査区位置図 …… 1
第2図　周辺の遺跡分布図 …… 2
第3図　トレンチ配置図、トレンチ一覧表及び発掘調査区 …… 6
第4図　トレンチ出土遺物 …… 7
第5図　二宮岡東遺跡発掘調査区平面図 …… 9～10
第6図　建物1平・断面図 …… 11
第7図　建物2・3平・断面図 …… 12
第8図　建物4・5平・断面図 …… 14
第9図　建物6・7平・断面図 …… 15
第10図　建物出土遺物実測図 …… 16
第11図　柵列2・3・4平・断面図 …… 16
第12図　竪穴住居1平・断面図 …… 17
第13図　竪穴住居1出土遺物実測図 …… 18
第14図　竪穴住居2平・断面図 …… 19
第15図　竪穴住居2出土遺物実測図 …… 20
第16図　竪穴住居3・4平・断面図 …… 21
第17図　竪穴住居3・4出土遺物実測図 …… 22
第18図　竪穴住居5平・断面図 …… 23
第19図　竪穴住居5出土遺物実測図 …… 23
第20図　段状遺構1・2平・断面図 …… 24
第21図　段状遺構3・4平面図 …… 26
第22図　段状遺構3・4断面図 …… 27
第23図　段状遺構5～8平・断面図 …… 28
第24図　段状遺構2・3出土遺物実測図 …… 29
第25図　段状遺構3・4・7出土遺物実測図 …… 30
第26図　貯蔵穴1・2平・断面図 …… 31
第27図　貯蔵穴1～5出土遺物実測図 …… 32
第28図　貯蔵穴3～8平・断面図 …… 34
第29図　貯蔵穴8出土遺物実測図 …… 35
第30図　貯蔵穴9～12平・断面図 …… 36
第31図　貯蔵穴7・9・10・11出土遺物実測図 …… 37
第32図　貯蔵穴13～18平・断面図 …… 39
第33図　貯蔵穴13～15出土遺物実測図 …… 40
第34図　貯蔵穴17・18出土遺物実測図 …… 41
第35図　貯蔵穴19～21平・断面図 …… 43
第36図　貯蔵穴22～24平・断面図 …… 44
第37図　貯蔵穴19・20出土遺物実測図 …… 45
第38図　貯蔵穴21～23出土遺物実測図 …… 46
第39図　貯蔵穴24出土遺物実測図 …… 47
第40図　貯蔵穴25～29平・断面図 …… 49
第41図　貯蔵穴25～29出土遺物実測図 …… 50
第42図　貯蔵穴30～35平・断面図 …… 51
第43図　貯蔵穴32～35出土遺物実測図 …… 52
第44図　その他の遺構出土遺物実測図 …… 53
第45図　二宮岡東古墳墳丘測量図 …… 65
第46図　埋葬施設平・立面図 …… 66
第47図　二宮岡東古墳出土遺物実測図 …… 68
第48図　その他の出土遺物実測図 …… 69
第49図　柵列1平・断面図 …… 70
第50図　土坑3・4平・断面図 …… 71
第51図　出土遺物実測図 …… 72
第52図　土坑5平・断面図 …… 73
第53図　近世墓1～6平・断・立面図 …… 74
第54図　近世墓7～9平・断面図 …… 75
第55図　出土遺物実測図 …… 76
第56図　北斜面土層図及び出土遺物 …… 77
第57図　その他の出土遺物実測図 …… 77
第58図　二宮岡東遺跡土器編年図（1） …… 82
第59図　二宮岡東遺跡土器編年図（2） …… 83
第60図　二宮岡東遺跡弥生時代集落変遷図 …… 85～86
第61図　掘立柱建物の規模 …… 89
第62図　記号が描かれた土器 …… 90
第63図　貯蔵穴1出土土器に類似する土器 …… 92
第64図　須恵器の副葬形態 …… 94

表目次

第1表　トレンチ出土遺物一覧表 …… 7
第2表　貯蔵穴一覧表 …… 55
第3表　建物出土遺物一覧表 …… 56
第4表　竪穴住居出土遺物一覧表 …… 56
第5表　段状遺構出土遺物一覧表 …… 57
第6表　貯蔵穴出土遺物一覧表 …… 58
第7表　その他の遺構出土遺物一覧表 …… 64
第8表　古墳時代の遺物一覧表 …… 69
第9表　古代～近世出土遺物一覧表 …… 78
第10表　各土器の種別・出土地対照表 …… 83
第11表　掘立柱建物の規模と方向 …… 88
第12表　津山市内弥生時代中期掘立柱建物一覧表 89

図版目次

巻頭図版1　1.二宮岡東遺跡遠景（南から）
　　2.二宮岡東遺跡遠景（西から）
巻頭図版2　1.二宮岡東遺跡全景
　　2.建物1
巻頭図版3　1.竪穴住居2
　　2.古墳と貯蔵穴群
図版1　1.二宮岡東遺跡遠景（南から）
　　2.同上（東から）
　　3.同上（西から）
図版2　1.二宮岡東遺跡全景
　　2.同上（西側）
　　3.同上（東側）
図版3　1.調査前（東から）
　　2.表土剥ぎ
　　3.表土剥ぎ
図版4　1.建物1
　　2.同上
　　3.同上（柱穴2土層）
図版5　1.建物1（柱穴5土層）
　　2.同上（柱穴1）
　　3.同上（柱穴3）
図版6　1.建物2
　　2.建物3
　　3.建物4・棚列4
図版7　1.建物5
　　2.建物5・6
　　3.建物7
図版8　1.棚列1
　　2.棚列2
　　3.棚列3
図版9　1.竪穴住居1
　　2.同上・調査風景
　　3.竪穴住居1
図版10　1.竪穴住居2
　　2.同上・土層
　　3.同上・入口部分？
図版11　1.竪穴住居2
　　2.竪穴住居3
　　3.同上
図版12　1.竪穴住居4
　　2.同上・土層
　　3.竪穴住居4
図版13　1.竪穴住居5
　　2.同上・土層
　　3.同上・中央穴
図版14　1.竪穴住居5
　　2.段状遺構1・2
　　3.同上
図版15　1.段状遺構3・4
　　2.同上・調査風景
　　3.段状遺構3土層
図版16　1.段状遺構3
　　2.段状遺構4
　　3.段状遺構5・6、貯蔵穴28
図版17　1.段状遺構7
　　2.段状遺構8
　　3.貯蔵穴群
図版18　1.貯蔵穴群
　　2.貯蔵穴1・2調査風景
　　3.貯蔵穴1・2
図版19　1.貯蔵穴1・2土層　2.貯蔵穴1
　　3.貯蔵穴1土器出土状況　4.同上・石検出状況
　　5.同左(貯蔵穴2から望む)　6.貯蔵穴3
　　7.貯蔵穴4上層　8.貯蔵穴4
図版20　1.貯蔵穴5　2.貯蔵穴6・7
　　3.貯蔵穴8　4.同上・土器出土状況
　　5.貯蔵穴9　6.貯蔵穴10土層
　　7.貯蔵穴10　8.貯蔵穴11
図版21　1.貯蔵穴12　2.貯蔵穴13
　　3.貯蔵穴14　4.貯蔵穴15
　　5.貯蔵穴16　6.貯蔵穴17
　　7.貯蔵穴18　8.貯蔵穴19
図版22　1.貯蔵穴20　2.貯蔵穴21調査風景
　　3.貯蔵穴21　4.同上・土器出土状況
　　5.貯蔵穴22　6.貯蔵穴23
　　7.貯蔵穴24上層　8.貯蔵穴24
図版23　1.貯蔵穴24上器出土状況　2.貯蔵穴25
　　3.貯蔵穴26七層　4.貯蔵穴26
　　5.貯蔵穴27　6.貯蔵穴29
　　7.貯蔵穴30土層　8.貯蔵穴30
図版24　1.貯蔵穴31　2.貯蔵穴32土層
　　3.貯蔵穴32　4.貯蔵穴33～35
　　5.貯蔵穴33　6.貯蔵穴34上層
　　7.貯蔵穴34　8.貯蔵穴35

図版25　1.古墳
2.同上・周溝土層
3.埋葬施設上層
図版26　1.埋葬施設
2.遺物出土状況
3.同上
図版27　1.近世墓1土層　2.近世墓1
3.近世墓2土層　4.近世墓2
5.近世墓3　6.近世墓4
7.近世墓5土層　8.近世墓5
図版28　1.近世墓5遺物出土状況　2.近世墓6
3.近世墓7土層　4.近世墓7
5.近世墓8　6.近世墓9土層
7.土坑3上層　8.土坑3
図版29　1.土坑4土層　2.土坑4
3.小学生見学風景　4.同上
5.現地説明会風景　6.同上
7.同左　8.重機搬入風景

図版30　出土遺物（1）
図版31　出土遺物（2）
図版32　出土遺物（3）
図版33　出土遺物（4）
図版34　出土遺物（5）
図版35　出土遺物（6）
図版36　出土遺物（7）
図版37　出土遺物（8）
図版38　出土遺物（9）
図版39　出土遺物（10）
図版40　出土遺物（11）
図版41　出土遺物（12）
図版42　出土遺物（13）
図版43　出土遺物（14）
図版44　出土遺物（15）

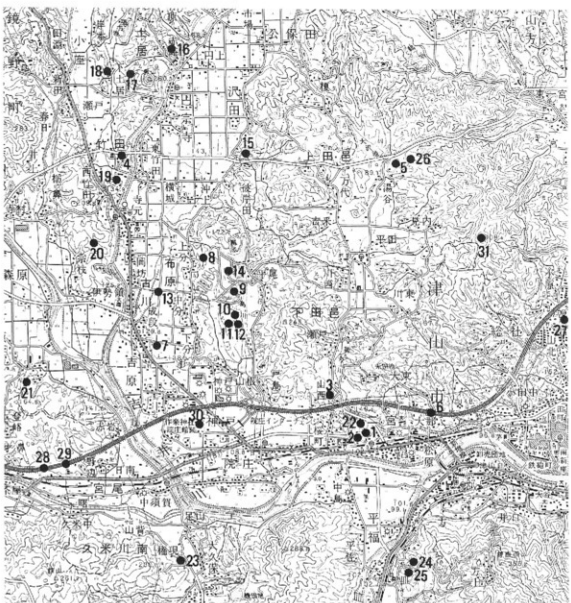
Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

1．遺跡の位置（第１図）

二宮岡東（にのみやおかひがし）遺跡は、岡山県津山市二宮小字岡東２０１２－４番地外に所在する。岡山県の北部、中国山地の山懐の盆地に位置する津山市は、人口約９万人、東西15km、南北19km、面積185.7km²で、市域の約54％は山林や原野が占め、住宅地となっているのは約12％程である。市内を一級河川の吉井川が加茂川、皿川などの支流と合流しながら南流し、瀬戸内海へ流路をとる。市内を横切る形で昭和50年に中国自動車道が開通し、東西に二つのインターチェンジ（津山・院庄）がおかれている。西側の院庄インターチェンジの東約２km、吉井川を見下ろす丘陵上に本遺跡は立地している。遺跡の立地する丘陵は、吉井川と支流紫竹川に挟まれた単独丘陵である。この丘陵の最高所は標高148ｍで、ここから樹枝状に小丘陵が伸びている。そのうち南に伸びた丘陵から谷をはさんで東方向に派生した比較的緩やかな丘陵があり、ここに遺跡は立地する。この丘陵の頂部から斜面部にかけてが遺跡の範囲である。また、本遺跡の南側の斜面には国道179号線が通っており、この建設に先立ち発掘調

第１図　調査区位置図（Ｓ＝１：5,000）

査もなされている（註１）。この調査ではかなりの広範囲で遺構・遺物が検出されている。調査区は小字名により地区割りがなされているが、報告書ではこれらを総称して二宮遺跡としている。本遺跡はその中の国東地区に属するため、今回調査した遺跡名は区別して二宮岡東遺跡としている。また、本遺跡の立地する基盤は第三紀層で、貝などの化石が多数発見され、道路の壁面にそれらの一部を露出させて観察できる。遺跡の立地する標高はおよそ118～126ｍで、南側の眺望がよく吉井川を見下ろすことができ、また北側を望めば本単独丘陵の最高所に位置する美和山古墳群（１号墳）を望むことができる。周辺の平野部との比高差は約18～26ｍである。



第２図　周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

2．周辺の遺跡（第２図）

周辺の遺跡として特に津山市の西側の吉井川、香々美、旭川流域について時代ごとに概観する。

（旧石器・縄文時代）

旧石器時代の遺跡としは西部運動公園建設により調査された大開遺跡（第２図３、註２）で、ナイフ形石器の出土が知られている。この遺跡では縄文時代早期の押型文土器や石鏃などが見つかっているが、明確な遺構は検出されていない。鏡野町の竹田遺跡（同４、註３）では、縄文時代早期の住居跡６軒の他、土器片、石鏃などが多数出土している。

（弥生時代）

本遺跡に隣接する二宮遺跡（同２、註１）は弥生時代中期後半から後期を中心とする集落跡である。道路建設のためかなり広範囲が調査されている。本遺跡に隣接する岡東地区では、住居跡、建物跡、貯蔵穴などが検出されている。また中期では、津山総合流通センター建設により調査された男戸嶋遺跡（同11、註４）、木材市場建設により調査されたアモウラ遺跡（同５、註５）、後期では墳墓群で特殊器台やガラス製管玉の出土した有本遺跡（同９、註６）、銅鐸の出土した荒神峪遺跡（同12、註７）、板状鉄斧の出土した大開遺跡（同３、註２）などがある。

（古墳時代）

本遺跡の北側には、全長80ｍの前方後円墳１基と円墳３基からなる史跡・美和山古墳群（同22、註８）があり、１号墳（前方後円墳）は美作地方では勝央町の植月寺山古墳（註９）に次ぐ規模である。２・３号墳は直径30ｍを越える円墳である。確認調査の結果、いずれの古墳も葺石を伴い外面に線刻を施した埴輪が出土している。前方後方墳（全長40ｍ）と円墳からなる田邑丸山古墳群（同14、註10）は、津山総合流通センター建設に伴い古墳公園として保存されている。１号墳（円墳）の竪穴式石槨から鏡、車輪石形銅器や鉄剣、鉄斧の出土が、２号墳（前方後方墳）からは鏡が複数出土した事が知られていた。確認調査で１号墳は直径36ｍの円墳で、新たに木棺１基が検出され、２号墳は全長40ｍで葺石があり、外面に竹管文を施した二重口縁壺が出土している。その他、前方後円墳は西側の香々美川流域などにまとまって存在する。郷観音山古墳（同21、全長43ｍ、註11）、赤峪古墳（同16、全長45ｍ、註12）、狐塚古墳（同23、全長60ｍ、註13）、竹田妙見山古墳（同19、全長36ｍ、註14）などがある。郷観音山古墳からは３面の鏡と鉄剣、鉄鏃が出土している。また、方墳の古墳群としては、有本古墳群（同９、註15）、東花穴古墳群（同15、註16）、円墳と方墳の古墳群としては竹田古墳群（同４、註17）がある。有本古墳群は木棺が、竹田古墳群は箱式石棺が埋葬施設に主として使用され、これらの中には装飾器台を枕に転用しているものがある。前期の後半から中期にかけての古墳群であろう。中期から後期の古墳としては、市内中心部に全長60ｍの前方後円墳で二重の周溝がめぐる十六夜山古墳（註18）があり、後期の古墳群としては円墳４基からなる大開古墳群（同３、註２）、前方後円墳で横穴式石室をもつ土居天王山古墳（同17、全長27ｍ、註19）、陶棺の出土した二宮大成古墳（同６、註20）などがある。また、集落遺跡としては、鏡野町の布原地区に大開遺跡（同13、註21）があり、前期の集落遺跡である。有元遺跡（同10、註22）は後期前半の集落遺跡で、住居跡、建物跡などが検出され、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。後期後半としてはアモウラ東遺跡（同26、註23）があり、住居跡、段状遺構などが検出され、鉄滓の出土から製鉄関連の遺跡と推測されている。

以上、古墳時代の集落遺跡については、特に前期から中期にかけては、調査例も少なく実態がよくわかっていないのが現状である。

（古代以降）

本遺跡の東３㎞の沖積地を望む段丘上に美作国府（同27、註24）が存在する。確認調査の結果、国庁域や内部の建物構造などが判明した。また、この国府の下層には別の時期の建物群があり、郡衙遺構と考えられている。また、本遺跡の西側には久米郡衙に比定される宮尾遺跡（同29、註25）、隣接して久米廃寺（同28、註26）が存在する。

中世になると院庄館跡（同30、註27）に国の中心が移る。院庄館跡は周囲に土塁が残り、内部の構造については井戸の存在が知られているのみである。現在この内部に作楽神社がある。城跡としては、標高308ｍの山頂に神楽尾城跡（同31、註28）がある。この城は美作屈指の中世山城であり、本丸からの眺めはよい。また、美和山１号墳も山城として使用されている。そのため古墳の周囲などに土塁が残っている。

近世になると、東3.5㎞の鶴山に城が築かれる。津山城は、森忠政が慶長９年（1604）に築城をはじめ、森氏４代、松平氏９代と続き明治維新を迎える。また、この津山城を中心に城下町や街道が整備され、街道は本遺跡の南側を通っている。津山城は平成16年で築城400年をむかえる。

（註１）高畑知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1979
（註２）平岡正宏「大開古墳群他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会1994
（註３）土居徹「竹田遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註４）安川豊史「男戸嶋遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集』津山市教育委員会1999
（註５）1981～1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
（註６）小郷利幸「有木遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会1998
（註７）小郷利幸「荒神峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集』津山市教育委員会1999
（註８）中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会1992
（註９）光永真一「植月寺山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註10）土居徹「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会1975
小郷利幸「田邑丸山古墳群他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集』津山市教育委員会2000
（註11）梅原末治「美作郷村観音山古墳」『日本古文化研究報告９』日本古文化研究所1938
土居徹「郷観音山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
湊哲夫「観音山古墳」『美作の鏡と古墳』津山郷土博物館1990
（註12）近藤義郎「赤峪古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註13）小郷利幸「狐塚古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
（註14）今井堯他「竹田墳墓群」鏡野町教育委員会1984
湊哲夫「竹田妙見山古墳」『美作の鏡と古墳』津山郷土博物館1990
（註15）小郷利幸「有本古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』津山市教育委員会1997
（註16）立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第３号』岡山県遺跡保護調査団1992
（註17）今井堯他「竹田墳墓群」鏡野町教育委員会1984
（註18）尾上元規他「十六夜山古墳他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130』岡山県教育委員会1998
（註19）安川豊史「土居天王山古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
（註20）栗野克巳他「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
（註21）鏡野町教育委員会が1994～1995年、岡山県教育委員会が1995年に調査。
井上弘「国道179号改良工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会1996
（註22）安川豊史「有元遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集』津山市教育委員会1999
（註23）行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会1990
（註24）岡田博他「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
岡田博「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
安川豊史「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告発掘調査第50集』津山市教育委員会1994
平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第２号』津山弥生の里文化財センター1995
安川豊史「美作国府跡－日本生命社宅新築に伴う発掘調査－」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告　第56集』津山市教育委員会1995
平岡正宏「美作国府跡（藤森地点）の調査」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996
安川豊史「美作国府跡（総社33番地-1）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第６号』津山弥生の里文化財センター1999
（註25）橋本惣司他「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
（註26）栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
（註27）河本清『史跡院庄館跡発掘調査報告』津山市教育委員会1974
行田裕美「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第７集』津山市教育委員会1981

Ⅱ　調査の経過

1．調査に至る経過

宮岡東遺跡は、一般国道53号バイパス事業関連代替墓地の造成に伴い調査されたものである。造成地が周知の遺跡（二宮遺跡）に含まれているため、開発事業者である津山市役所土木課と協議し、開発にあたり事前に確認調査をして遺跡の範囲を確定し、その後発掘調査に入る事で合意した。平成10年２月５日付け、津都土第160号で津山市長　中尾嘉伸より「埋蔵文化財調査の実施について」の依頼書が、津山市教育委員会教育長　松尾康義宛に提出された。それを受け、平成10年２月９日～19日まで確認調査を実施した。開発予定地約8,400㎡の内、丘陵頂部から斜面部を中心にトレンチを設定した。南に隣接する斜面部の国道179号線建設に伴う発掘調査でかなりの遺構・遺物が検出され、同一丘陵の高所に本遺成地が位置するため、ある程度遺構が密集することが予測されていた。トレンチは樹木が繁茂する中、それらをよけながら、頂部は尾根線に対し直交する形、斜面部には平行する形で設定した。トレンチは幅0.5～0.7ｍ、長さ３～10ｍで23箇所である。第３図はそのトレンチの配置図及び概要である。詳細については後述する。確認調査の結果、東端と北端斜面部のトレンチ（Ｔ５・８・20・23）を除き遺構・遺物が確認でき、遺跡の推定範囲が確定した。この結果は、開発事業者にも通知され、今後の造成計画に合わせ、樹木の伐採、重機の進入路が確定次第、発掘調査に入る事となった。また、この確認調査の結果は、平成10年３月４日付け、津教委文第131号で、岡山県教育委員会に「埋蔵文化財確認調査表」として提出している。その後、平成10年６月８日付け、津都土第49号で文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が開発事業者である津山市長　中尾嘉伸から文化庁長官宛に提出された。また、発掘調査に先立ち、平成10年９月２日付け、津教委文第73号で津山市教育委員会教育長　松尾康義より文化財保護法第98条の２第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官宛に提出した。同年８月には樹木の伐採・搬出も終わり発掘調査に入れる状況になったが、進入路の関係で重機が入る事ができず、発掘調査の開始がかなり遅れてしまった。結局発掘調査に入ったのは、平成11年２月になってからである。

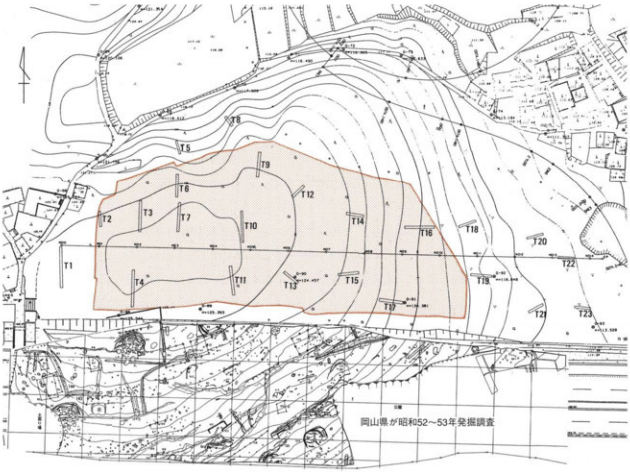
2．調査の経過

（確認調査の結果）　平成10年２月の確認調査で、23本のトレンチをいれた。その内10本のトレンチから出土遺物がある（第３図参照）。出土遺物は弥生土器と須恵器、陶器、石庖丁、鉄釘、鉄滓などがある。そのうち図示できたのは９点で（第４図）ある。土器はいずれも細片で１・８はトレンチ18、２・３・５・７はトレンチ21、４はトレンチ22、６はトレンチ９、９はトレンチ７から出土している。

１～３、５、６は須恵器、４・７は勝間田焼である。１は杯蓋、２は高台付きの杯身、３は高杯の杯部、５・６は甕の胴部片である。４は高台付きの椀、７も椀の破片で底部には糸切りの痕跡がある。８は緑色片岩製の石庖丁で円孔より上などが一部欠損する。９は断面が方形の鉄釘で先端が欠損する。

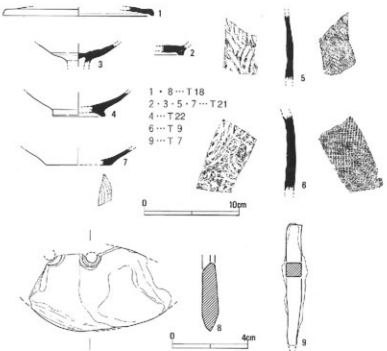
以上から、弥生時代の遺物は少なく、逆に古墳時代以降の遺物が多く見られ、この時点では弥生時代の集落の他、特に古代～中世の遺構の存在、鉄滓の出土から製鉄関連の遺構の存在が推測された。

（調査の経過）　平成11年２月２日より重機による表土剥ぎをおこなった。重機は進入路の関係で予定より小型のものを使用した。重機は国道179号線にかかる美和山橋（復員2.5ｍ）を通って調査区に入れた。また排土は置く場所がなく、斜面の調査であるため排土などが調査区外に流出するのを防ぐため、



トレンチ	調査面積(㎡)	遺　　構	出 土 遺 物
T 1	7.6	土坑 2 、溝 1 、柱穴 2	無し
T 2	2.5	土坑 1	無し
T 3	4.9	土坑 1 、柱穴 2	無し
T 4	6	土坑 1 、溝 1	無し
T 5	2.1	無し	無し
T 6	3.8	柱穴 4	弥生土器、須恵器、鉄滓
T 7	4.6	段状遺構 ?、柱穴 3	弥生土器、須恵器、鉄釘
T 8	2.5	無し	無し
T 9	4	無し	弥生土器、須恵器
T10	6	土坑 3 、溝 1	無し
T11	5.4	土坑 1 、溝 1	陶器
T12	3.2	土坑 1 、柱穴 1	無し
T13	3.4	土坑 1 、柱穴 2	無し
T14	2.8	柱穴 1	無し
T15	3.9	土坑 1 、柱穴 3	無し
T16	5.6	無し	陶器
T17	4.6	柱穴 1	弥生土器、須恵器
T18	3	無し	弥生土器、須恵器、石庖丁
T19	3.2	溝 1	弥生土器、須恵器、鉄釘
T20	2.8	無し	無し
T21	3.2	土坑、柱穴 2	須恵器
T22	2.9	無し	須恵器
T23	2.7	無し	無し

第 3 図　トレンチ配置図（S＝1：1,000）、トレンチ一覧表及び発掘調査区（トーン部分）



第4図　トレンチ出土遺物（1～7…S＝1：4、8・9…S＝1：2）

第1表　トレンチ出土遺物一覧表

挿図番号 出土位置	器種	法量（単位：cm） （　）内は残存値 口径	底径	器高	形　　態　（外・内面）	胎土・色調	備　考
4－1 トレンチ18	須恵器 杯蓋	(15.0)	—	(1)	口縁部にやや屈曲し、端部を下方につまむ。 外：ヨコナデ。 内：ヨコナデ。	1㎜程の砂粒を含む。 須恵質焼	
4－2 トレンチ21	須恵器 杯身	—	—	(1)	受部は内傾斜がつく回縁。 外：ヨコナデ。 内：ヨコナデ。	0.1㎜程の砂粒含む。 須恵質焼	
4－3 トレンチ21	須恵器 高杯	—	—	(7)	高杯の杯部とその脚裾を延する。 外：ヨコナデ。 内：ヨコナデ。	1㎜程の砂粒を含む。 褐灰色	
4－4 トレンチ22	弥生土師 壺	—	(5.6)	(2.5)	胴部ハの字形の底台がつく。 外：ヨコナデ。 内：ヨコナデ。	1.5㎜程の砂粒含む。 淡黄褐色	
4－5 トレンチ21	須恵器 壺	—	—	—	外：格子目タタキ後ナデ。 内：同心円タタキ後ナデ調整。	1㎜程の砂粒を含む。 灰色	
4－6 トレンチ9	須恵器 壺	—	—	—	外：平行タタキ後ナデ。 内：同心円タタキ後ナデ調整。	0.1㎜程の砂粒含む。 灰色	
4－7 トレンチ21	弥生土師 甕	—	(7)	(1.7)	外：ヨコナデ、頸部糸切り。 内：ヨコナデ	緻密 淡褐灰色	
4－8 トレンチ18	石製品 石錘？	(7.5) (現長)		(3.9) (幅.0)	円孔より上部が欠損。		緑色片岩製
4－9 トレンチ7	鉄製品 鉄鏃	(5.5) (現長)		(3.8) (厚さ)	先端が欠損、断面方形。		

北側の谷部へ大半を運んだ。また、北側の境界には排土の流失を防ぐために防御ネットを設置した。表土剥ぎと並行して発掘調査を2月8日から開始した。表土剥ぎは2台の重機を使用し2月18日にはほぼ終了した。この結果、須恵器などの出土のあった東側斜面部（第3図、トレンチ18～23）には、遺構がほとんど存在しない事、このあたりが竹林であるため地山がかなり改変されている事、またこれら出土遺物は高所から転落したものと推測されるため、実際に調査した範囲は確認調査後に推定した範囲よりはかなり狭いものとなった。実際に調査した範囲は第3図（トーン部分）に示している。発掘調査した面積は約3,300㎡である。

発掘調査は西側の丘陵頂部より行い、随時遺構の検出・掘り下げなどを行った。大きな木の根につ

いては遺構の破壊を考え重機ではとり除かず、極力人力で枝根などを取り除いている。また、調査にあたって10m四方のグリッドを設定し杭打ちをおこなった。遺構は全般に分布するものの、密度から言えば頂部よりは東側の斜面部の方が高い。頂部は後世に墓地や畑としてかなり改変されている部分が多いためにすでに消滅している遺構があるのかもしれない。検出した遺構としては、弥生時代の集落が中心だが、墳丘のほとんどが削平された古墳が1基、斜面尾根線上で確認された。周溝の形態から円墳と考えられ、埋葬施設の一部も確認できた。弥生時代の集落では、住居跡、建物跡の他、貯蔵穴が多数検出された。建物は丘陵の頂部に分布し、住居は逆に斜面部に見られる。また、貯蔵穴は斜面部高所にある程度まとまって存在し、その中には深さが背丈を越えるものもある。その他北側斜面で鉄滓や須恵器が出土しているが、明瞭な遺構は検出されなかった。これら調査は6月2日にはほぼ終了したため、各遺構の周囲には石灰で白線を引き、ラジコンのヘリコプターで航空写真を撮影した。航空写真は、遺跡の遠景、全景の他、住居や建物など主な遺構についても俯瞰で撮影した。また、調査と並行して遺溝の測量も行い、測量調査には臨時職員の協力を得て、7月1日には全調査が終了した。この間、4月28日に地元の向陽小学校6年（57名）が見学に訪れ、6月19日には、一般市民を対象にした現地説明会を開催した。説明会当日は悪天候にもかかわらず、約110名の参加があった。その後、遺物や図面の整理を行い、本報告書を作成した。

3．調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

津山市教育委員会　教育長　　松尾康義
教育次長　　菊島俊明
文化課長　　永礼宣子（～H11．3．31）
〃　　森元弘之（H11．4．1～）
文化財センター　所長　中山俊紀
次長　安川豊史
主任　小郷利幸（調査担当）
主事　川村雪絵（　〃　、事務担当）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、三谷順子、上原香里、上原恵美、仁木智子、岩本美紀が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

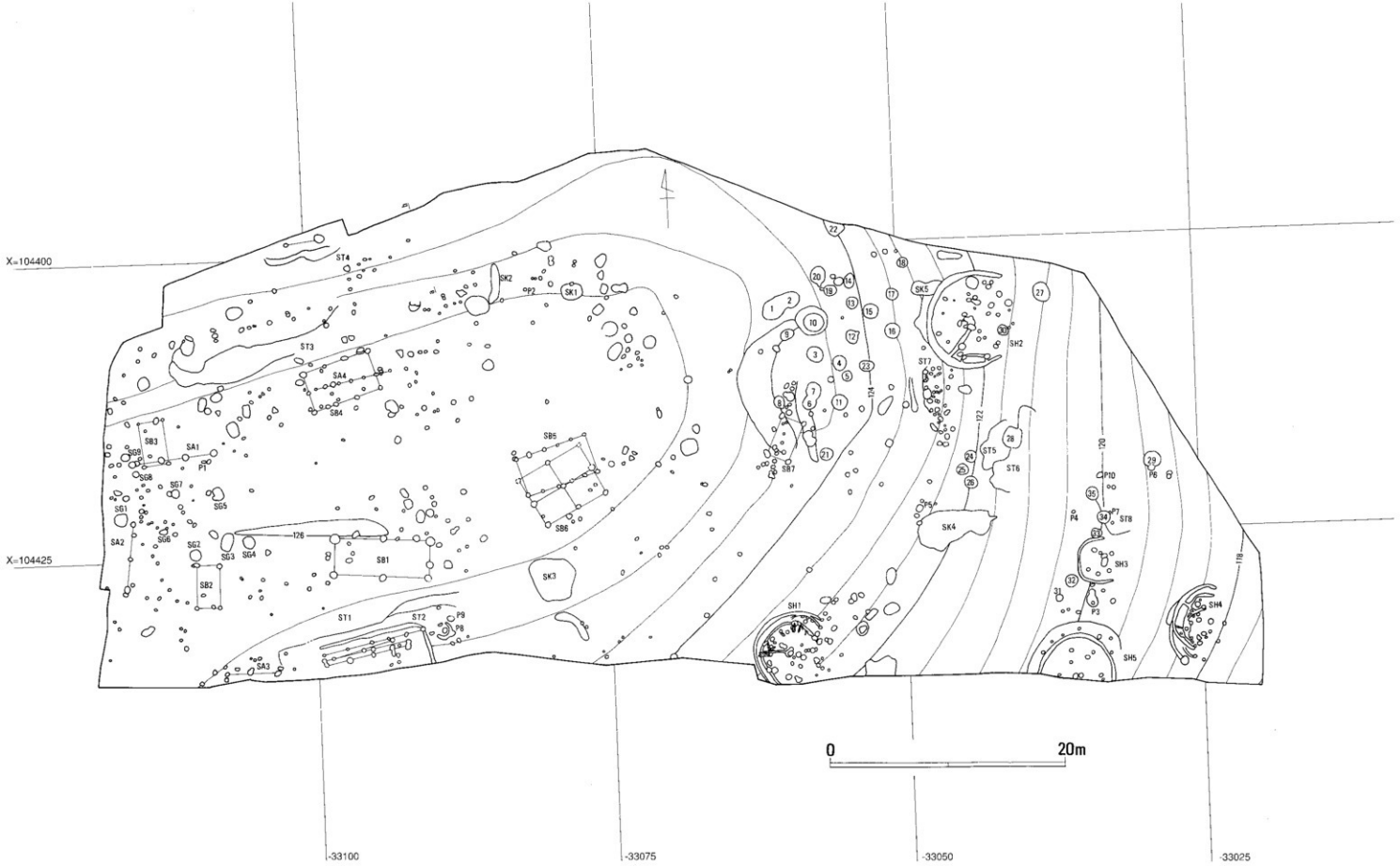
（敬称略）

（発掘作業員）河原照夫、杉山亥八、杉山由和、田島淳太郎、田口晴道、塚本正夫、西本　徳、橋本満、細田憲一、三好昭二、水杉利正、横部　明、脇山　康、青木敬子、青木照美、稲村奈美子、石近冬子、内山芙喜子、坂手美恵子、高山祥子、田渕尚子、橋本琴枝、藤原恵美子

（学生アルバイト）竹内教子、戸田裕子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、文化財センター職員の方々及び下記の方々の指導、助言を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

河本　清、白石　純、高畑知功、立石盛詞、園　正雄、上居　徹、長友明子



第５図　二宮岡東遺跡調査区平面図（Ｓ＝１：300）

Ⅲ　調査の記録

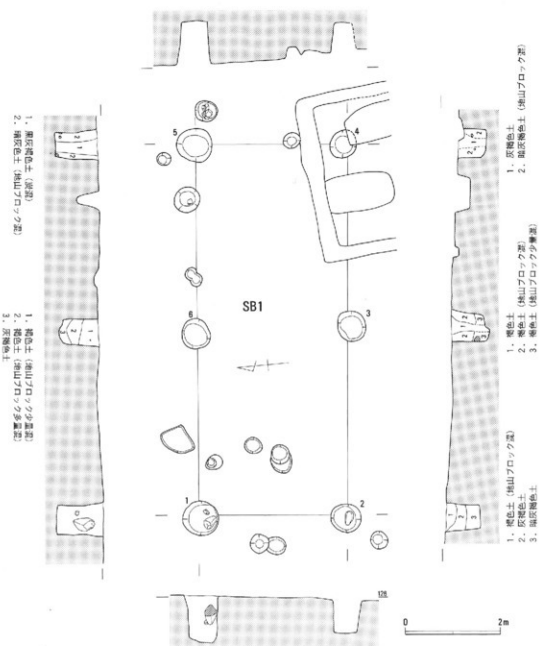
1．弥生時代

発掘調査によって発見された弥生時代の遺構は建物、竪穴住居、段状遺構、貯蔵穴などがある。以下、順に内容について述べる。

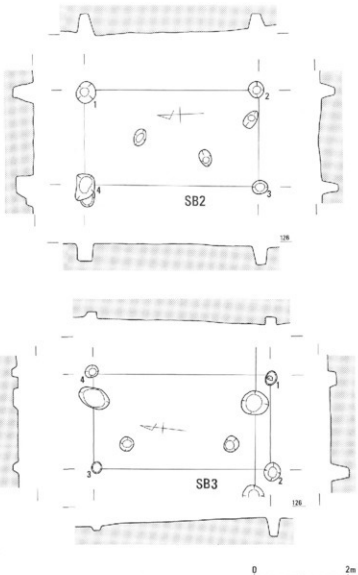
（1）建物

建物1（ＳＢ1、第6図、第10図1～3、図版4・5）

調査区中央よりやや南西部に位置する。柱穴は全部で6個検出しており、1間×2間の建物に復元できる。棟方向はＮ－85°－Ｗで、ほぼ東西方向の建物である。規模は桁行全長7.9m、梁間全長3.1m



第6図　建物1平・断面図（Ｓ＝1：80）



第７図　建物２・３平・断面図（Ｓ＝１：80）

をはかり、調査区の中では最大である。柱穴の規模は平均直径0.6～0.7ｍ、深さは削平の少ないところで１ｍにも達する。柱穴の中には、Ｐ５のように柱の材の痕跡がみられるものもあり、そこから推定すると柱材は直径30㎝前後のものであったと考えられる。また、Ｐ１の内部には、人頭大の石が底面から浮いた状態で検出された。この石が柱穴が埋没する際に入ったものなのか、柱の支えとして置かれていたものなのかは判断できなかった。

遺物は各柱穴からみつかっているが、いずれも少量、小片であった。図示できたのは３個体のみである。高杯の杯部（２、３）は直立する口縁をもつもので、外面に凹線文を施している。

建物２（ＳＢ２、第７図、図版６）

調査区南西部に位置する。４個の柱穴を検出しており、１間×１間の建物と考えられる。棟方向はＮ－２°－Ｅで、規模は桁行3.7ｍ、梁間２ｍをはかる。遺物は出土しておらず、時期を特定することはできなかった。

建物３（ＳＢ３、第７図、第10図４・５、図版６・30）

調査区西端に位置する。4個の柱穴を検出しており、1間×1間の建物と考えられる。棟方向はN－7°－Wであり、規模は桁行3.7m、梁間2.0mをはかる。

遺物は2個の柱穴からそれぞれ甕、高杯などが出土した。4はP2出土の甕の口縁部である。端部を斜め下方に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。5はP1出土の高杯の脚で、裾端部を拡張している。裾部付近には4個ずつ3方向、計12個のスカシ孔がみられる。これらの遺物は弥生時代中期後半のものと思われる。

建物4（SB4、第8図、第10図6・7、図版6・30）

調査区西北部に位置する。2間×3間の建物になると考えられるが、建物東側の梁間の中央部にあたる柱穴は検出することができなかった。柱穴5では3個の平らな石が重なるようにしてみつかっており、柱の根石である可能性がある。棟方向はN－73°－Eであり、規模は桁行全長5.9m、梁間全長3.4mをはかる。

遺物は柱穴1、2、3、7より出土した。6の壺は口縁端部を斜めに拡張し、端面に4条の凹線文を施す。頸部には半行沈線文がみられる。

建物5（SB5、第8図、図版7）

調査区中央部に位置する。後述する建物6の北側部分と重複している。柱穴は合計12個検出しており、1間×5間の建物になると考えられる。棟方向はN－73°－Eであり、建物4とほぼ同じ方向であることが分かる。規模は桁行全長6.4m、梁間全長3.3mをはかる。遺物は柱穴1、2より土器の小片が出土したが、時期を特定することはできなかった。しかし建物5は建物4と建物の棟方向が全く同じであり、この2棟は同時期に存在していた可能性が高い。

建物6（SB6、第9図、図版7）

調査区中央部に位置し、北側部分はSB5と重複している。2間×2間の総柱の建物に復元できると考えられるが、北側の隅柱2本分の柱穴のうち、1個は後世の撹乱によって消失しており、残る1つは検出することができなかった。棟方向はN－61°－Eで、規模は桁行全長6.1m、梁間全長1.7mをはかる。

遺物は柱穴1、4、6から弥生土器が出土したが小片であり、正確な時期を特定することはできなかった。

建物7（SB7、第9図、第10図8、図版7・30）

調査区中央からやや東寄りに位置しており、後述する古墳の周溝に一部重複している。4個の柱穴を検出しており、1間×1間の建物と考えられる。棟方向はN－25°－Eで、規模は桁行3.5m、梁間1.8mをはかる。

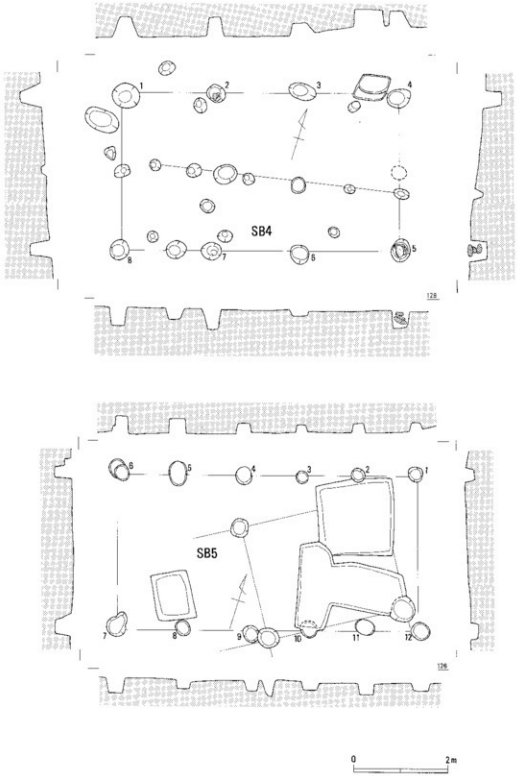
遺物は柱穴1から平行沈線文と波状文を施した弥生土器片が出土した。

（2）柵列

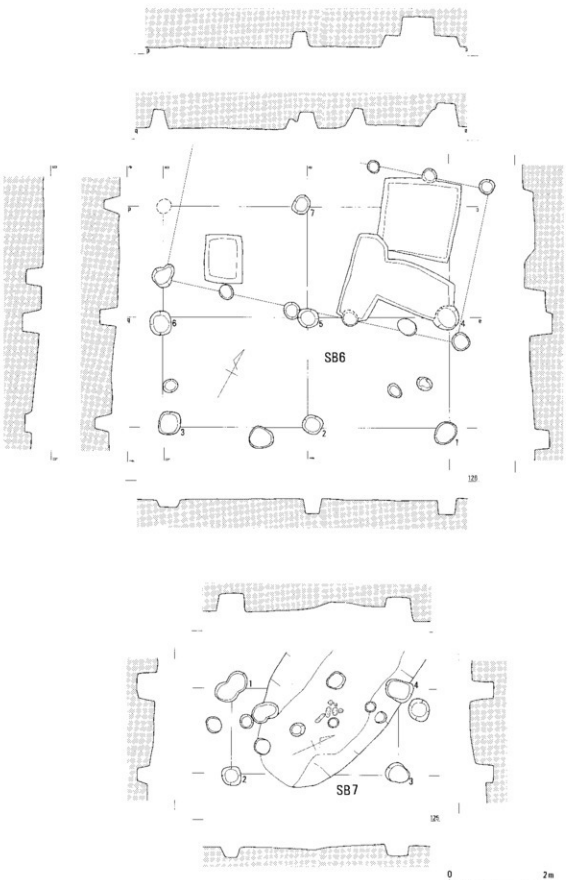
柵列は合計4つ確認できた。そのうち弥生時代に属すると思われるものは3つある。柵列1については古代以降のところで述べる。

柵列2（SA2、第11図、図版8）

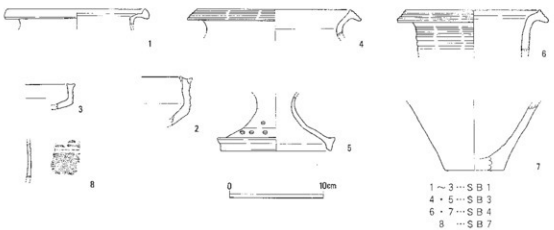
調査区西端部に位置する。柱穴は3個が一直線上に並んでおり、柵列と考えられるが、調査区外に柱穴が存在する可能性もある。主軸方向はN－8°－Eであり、柱間は約2.9mをはかる。



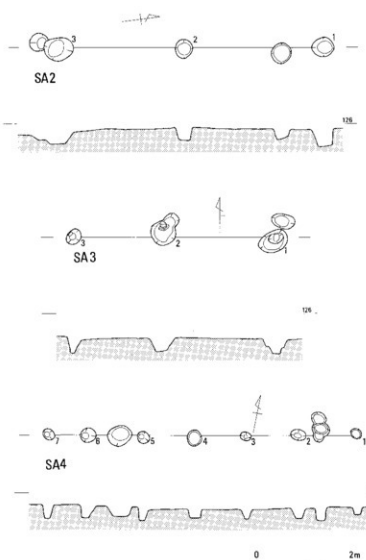
第８図　建物４・５平・断面図（Ｓ＝１：80）



第9図　建物6・7平・断面図（S＝1：80）



第10図　建物出土遺物実測図（S＝1：4）



第11図　柵列2・3・4平・断面図（S＝1：80）

遺物は柱穴１から弥生土器の小片が出土したが、正確な時期は不明である。

柵列３（ＳＡ３、第11図、図版８）

調査区南西隅に位置する。柱穴は中央のものがやや西に寄っているものの、３個が一直線上に並んだ状態で検出されており、柵列と考えられる。主軸方向はＮ－89°－Ｅで、ほぼ東西方向である。柱間は2.2～2.3ｍをはかる。柱穴１より弥生土器の小片が出土したが時期の特定は出来なかった。

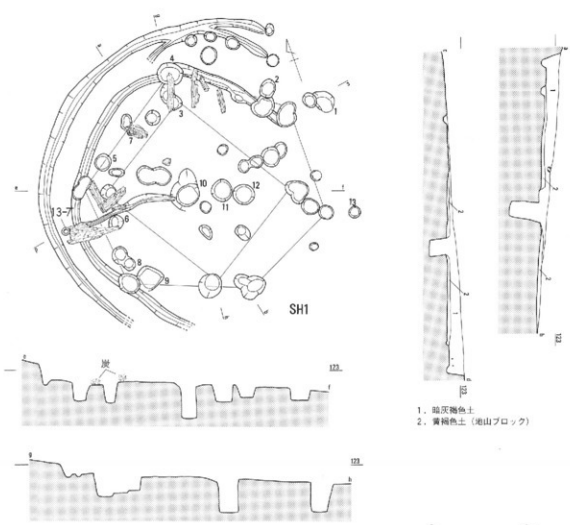
柵列４（ＳＡ４、第11図、図版６）

調査区中央よりやや西よりに位置する。柱穴は合計７個が一直線上に並んでおり、柵列と考えられる。主軸方向はＮ－78°－Ｅであり、柱間は約1.1ｍをはかる。遺物は出土せず、時期の特定はできなかったが、埋土の状況などから、弥生時代のものであると思われる。

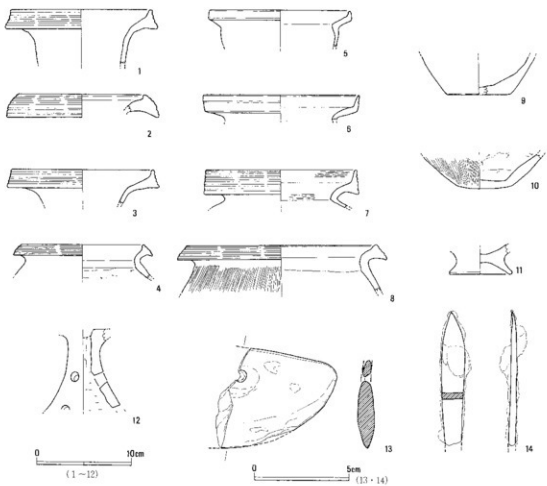
（３）竪穴住居

竪穴住居１（ＳＨ１、第12図、第13図、図版９・30・40）

調査区の中央部南端部分に位置する円形の竪穴住居である。周溝は一部南側に続くが、全周していない。南端部分は周溝から判断して、中央穴を中心に同心円状に２回の拡張が行われたものと思われる。



第12図　竪穴住居１平・断面図（Ｓ＝１：80）



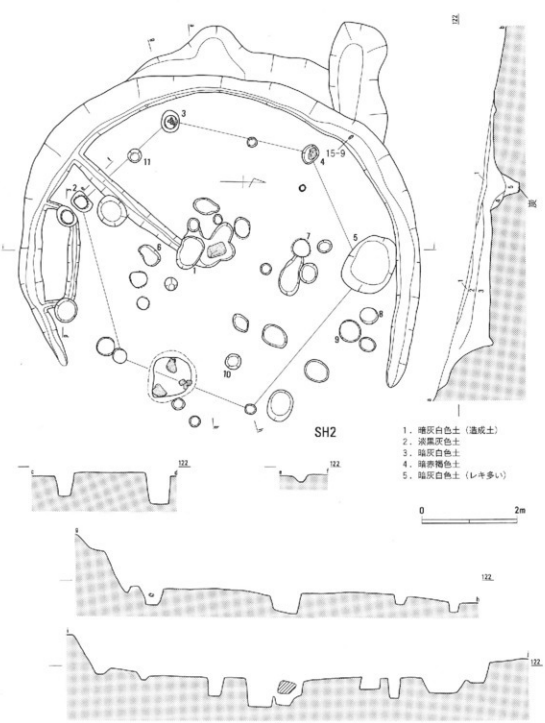
第13図　竪穴住居１出土遺物実測図（１～12…Ｓ＝１：４、13・14…Ｓ＝１：２）

規模は最初の段階で直径約５ｍ、拡張時で約７ｍである。柱穴は最初の段階で４個、拡張時で６個みつかっており、外側の柱穴はほぼ同じ場所に２個重なっている。住居内には柱材であったと思われる炭が放射状に存在しており、埋土中にも炭が多く検出されたことから、火災を受けた可能性が高い。

遺物は埋土中および柱穴内から出土したが、埋土中からのものの図示できた。壺、甕、鉢、高杯などの他に、石庖丁が１点ある。壺、甕の口縁部には凹線文が明瞭なものが多く、端部の立ち上がりはやや内傾するものと、直立に近いものとが混在している。高杯（12）には上段に３孔、下段に５孔のスカシ孔がみられる。土器以外の遺物としては緑色片岩製の磨製石庖丁（13）、鏃（14）がある。これらの出土遺物は拡張以降のもの（６・７・11）と拡張以前のものに明確に分けることができ、土器にやや時期差がみられる。

竪穴住居２（ＳＨ２、第14図、第15図、図版10・11・30・40）

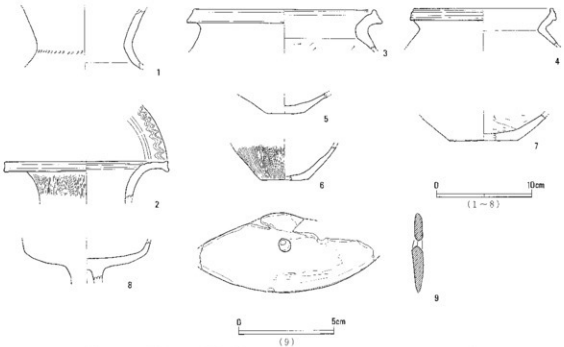
調査区の北東部分、貯蔵穴群の東側に位置する。周溝は全周せず、東側は流失している。建て替えによる拡張などは行われておらず、復元すると直径8.3ｍ程度の円形住居になる。斜面の上側にあたる住居西部には周溝に沿って長さ４ｍ強、幅0.5～１ｍほどのテラス状の遺構がみつかっている。なお、テラスの北側にある長円形の遺構は後世のものであり、後述する。また、南端部には周溝に接した状態で長さ1.8ｍ、幅0.5～0.6ｍの長方形の高まりがあり、周溝を巡らす。住居の周溝に接しない部分の両隅には柱穴が２個みられ、住居の入り口であるかのような様相を呈している。住居の上屋を形成する柱穴は６個みつかっており、その中には柱を支えるためと考えられる石がみられるものもある。中央



第14図　竪穴住居２平・断面図（S＝1：80）

穴にも40×20×30㎝程度の直方体の河原石が検出されたが、これは底部から浮いた状態であった。東端の貯蔵穴30は住居内に存在していた可能性がある。

出土遺物は埋土中及び柱穴内から壺、甕、高杯片などが出土した。4・7は中央穴（P1）からの出土である。長頸壺（2）には外反する口縁部の内面に波状文や凹線文を施している。甕は口縁部が「く」の字状に外反し、内面は頸部直下からヘラ削りを行っている。口縁端部の拡張が少なく、端面をナデているだけのものが多い。このほか図示できなかったものの中に山陰系の複合口縁の破片などもある。高杯（8）は杯部と脚部が別づくりである。磨製石庖丁（9）は周溝内から出土したもので、



第15図　竪穴住居２出土遺物実測図（１～８…Ｓ＝１：４、９…Ｓ＝１：２）

白雲母石英片岩製のものである。

竪穴住居３（ＳＨ３、第16図、第17図１・２、図版11）

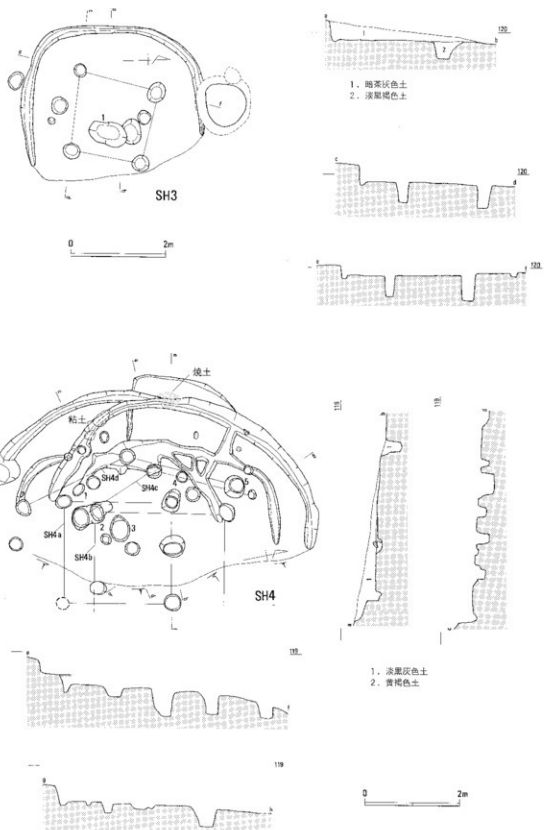
調査区の東寄り、ＳＨ４の北側約３ｍのところに位置する。東半部は流失している。平面は隅丸方形を呈しており、規模も南北で幅3.9ｍと調査区内で検出した住居の中では小さい部類である。柱穴は４個みつかっており、中央穴は中心よりやや東寄りにみられる。北側に貯蔵穴33が存在するが、切り合い関係から判断すると貯蔵穴の方が新しい時期のものである。

遺物は埋土中及び中央穴（Ｐ１）から出土したが、いずれも口縁部や底部の小片のみであった。

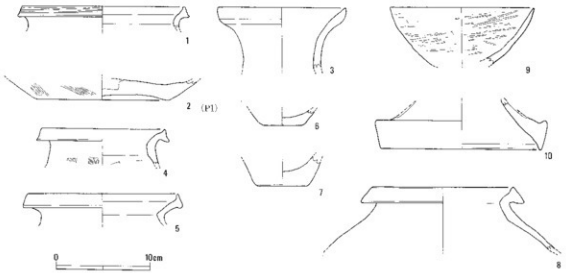
竪穴住居４（ＳＨ４、第16図、第17図３～８、図版12・30）

調査区南東端、調査区の最も低い部分に位置する。西側の一部分のみを検出しており、東側の大半が流失している。周溝が重複して検出されたため正確には分からないが、円形の住居が計３回建て替えられたものと考えられる。最初に４本柱のＳＨ４ａが建てられた後、やや中心を北にずらしてやはり４本柱のＳＨ４ｂが、続いてＳＨ４ｂの同心円上に拡張した形でＳＨ４ｃが建てられ、最後に再び中心をやや南にずらしてＳＨ４ｄが建てられたと推測される。各段階の住居の規模は、ａからｄの順に約4.3m、4.5ｍ、5.7ｍ、７ｍに復元できる。それぞれの段階で検出していない柱穴はあるが、ａ・ｂ段階で４本柱であったものが、拡張したｃ・ｄ段階ではおそらく６本柱になっていると考えられる。中央穴についても、それぞれの竪穴住居との対応関係が不明確であるが、ｂ・ｃ段階では同位置に存在していたと推測される（図中）。ＳＨ４ｃの南側周溝上にあたる部分には粘土が面的に広がっているのが２箇所確認されている。これらはＳＨ４ｄの床面にあったものであろう。また、ＳＨ４ｃ・ｄの西側に重複して深さ0.2ｍ程度の遺構があり、底面には0.5×0.3ｍの範囲で焼土が検出された。この遺構とＳＨ４ｄとの関係は明らかにすることはできなかった。

遺物は埋土中から甕、高杯などが出土した。甕は口縁部が「く」の字状に外反するもので、端面はナデている。口縁部のみの出土であり、各段階の時期を詳細に特定することはできなかったが、口縁端部に凹線文を施すものがみられないことが特徴としてあげられる。



第16図　竪穴住居３・４平・断面図（S＝1：80）



第17図　竪穴住居３（１・２）・４（３～８）出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

竪穴住居５（ＳＨ５、第18図、第19図、図版13・30・40）

調査区南東端、竪穴住居４の西約２ｍのところに位置する。北半部のみの検出であり、南半部は調査区外である。直径6.7mの円形住居に復元でき、建て替えは行われていない。周溝の外側には同心円状に幅１～1.2mのテラスがみられ、この部分を含めると直径8.5mと検出した竪穴住居の中では最大のものとなる。柱穴は調査区内で３つしか検出していないが、住居の規模や柱穴の検出位置などから判断すると６本柱であった可能性が高い。また、テラス上にも柱穴がみられることから、上屋を支えるための柱が存在していたのかもしれない。中央穴の周囲には炭層がドーナツ状に検出され、この部分に炉があったと考えられる。

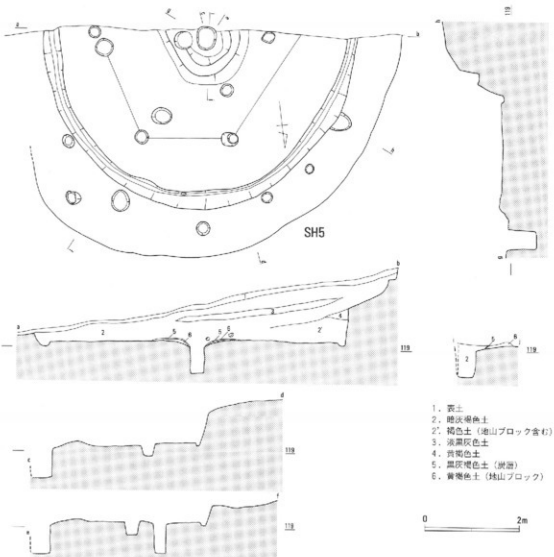
遺物は埋土中および周溝内から出土した。壺、高杯、石庖丁などがある。壺（１）は山陰系の複合口縁をもつものである。高杯は６のように円盤充填しているものと、５のように杯部と脚部が別づくりになるものとが共伴している。３は口縁端部にわずかながら面をもっている。磨製石庖丁は緑色片岩製のものである。

（４）段状遺構

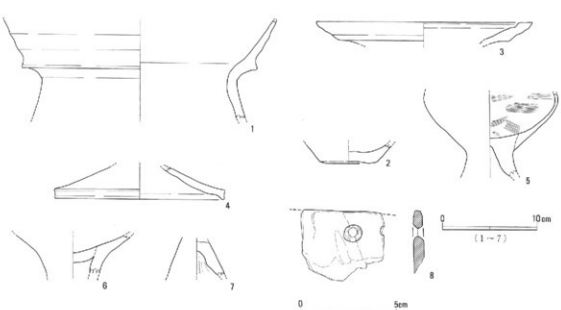
ここで示す段状遺構とは、斜面を切ることによって平坦面をつくり、そこに柱を建てて簡単な上屋を形成していたと思われる遺構のことである。今回の調査では合計８つの段状遺構と思われるものがみつかった。そのうち、須恵器や鉄滓が出土した段状遺構１を除いた７つの段状遺構について記述する。段状遺構１については古代以降のところで後述する。

段状遺構２（ＳＴ２、第20図、第24図１～４、図版14）

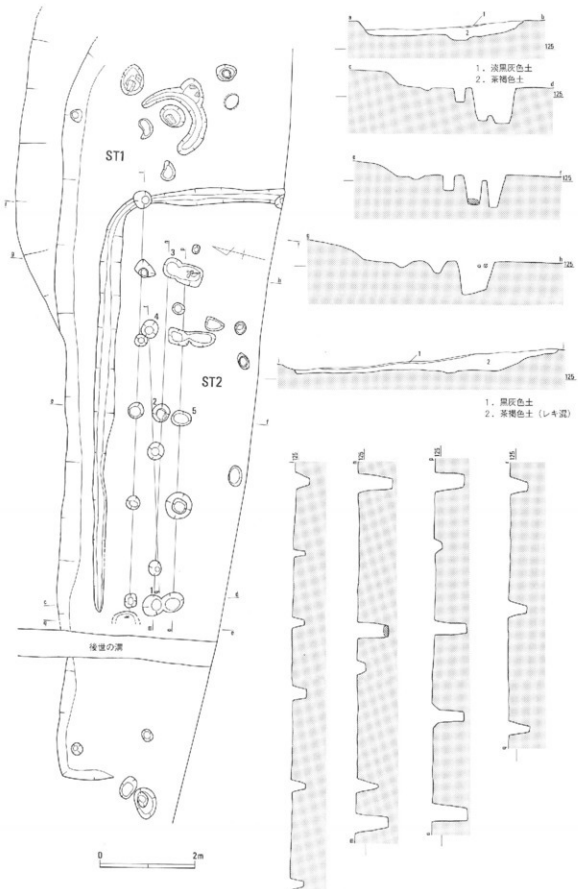
調査区南西部に位置する。丘陵の南斜面を削平して平坦面を形成しており、現状で長さ8.4ｍ、幅3.6ｍをはかるが、南へさらに続くものと思われる。壁溝の幅は0.2～0.5ｍをはかる。平坦面には直線的に並ぶ柱穴列が合計４つ検出された。これらのうち、最も北側にある６個の柱穴で形成されるものは段状遺構１に伴うものであると思われる。その柱穴列の南側に、３個の柱穴で形成される柱穴列が３つあり、これらが段状遺構２に伴うものであろう。３つの柱穴列のうちの２つ（第20図のｍ－ｎ、ｏ－ｐ断面で示すもの）は、柱穴の直径約0.4ｍ、深さ約0.8ｍとほぼ一定しており、列の方向や各柱穴の間



第18図　竪穴住居５平・断面図（S＝１：80）



第19図　竪穴住居５出土遺物実測図（１～７…S＝１：４、８…S＝１：２）



第20図　段状遺構１・２平・断面図（Ｓ＝１：80）

隔も同様である。柱穴の中にはＰ２のように柱の根石と思われる石が残るものもある。残る１つ（図のｑ－ｒ断面で示すもの）は角度や全長、柱穴の規模などが他の２つと異なり、全体的にやや小さいものである。柱間は前者２つがそれぞれ４～５ｍ、後者が約2.6ｍである。

遺物は埋土中および柱穴から弥生時代中期のものと思われる土器小片が出土したが、正確な時期は不明である。

段状遺構３（ＳＴ３、第21・22図、第24図５～21、第25図１～９、図版15・16・31）

調査区北西端に位置する。丘陵の北斜面を削平している。第21・22図で示すように、平面は不整形で、断面は平坦ではなく、北に向かって下がっており、平坦面は流失したと考えられる。埋土は黒灰色土であるが、上層に褐色土があり、これは丘陵上から流れてきた後世のものと考えられる。また、削平部分のラインより南側にも段状遺構の埋土と同様の黒灰色土がみられた。また、遺構の東側にも同様の黒灰色土がみられるため、遺構の東端はさらにのびる可能性が高い。検出部分で全長15.2ｍをはかる。遺構内にはいくつかのピットを検出したが、段状遺構３に伴うものかどうかは不明である。

遺物は段状部分の黒灰色土、段状遺構の南側の黒灰色土、同東側の黒灰色土および遺構内の柱穴からそれぞれ出土した。器種は壺、甕、高杯、器台など多数あるが、特に大型の器台の出土が目立つ。壺は拡張させた口縁部外面に鋸歯状のスタンプ文を施すものが３点ある。甕は口縁端部をわずかに拡張させるもの（第24図８）、上方に拡張し、端面に凹線文を施すもの（第25図３）の２種ある。高杯（第24図13）は円筒状のまっすぐな脚柱部をもつもので、杯部の円盤充填の痕が明瞭である。器台（第24図15～21）は口縁端部に鋸歯文を施すものが多い。15は筒状の体部をもつもので、ハケの後、平行沈線文と円形のスカシ孔を配している。これらの遺物は、第25図６、７、９のように中期中葉のものも一部みられるが、大半は弥生時代後期中葉から後葉のものである。

なお、この段状遺構３の埋土である黒灰色土は北斜面のほぼ全域にわたってみられ、遺構に伴う柱穴なども不明瞭であるため、段状遺構とは異なる様相を呈しているように思われる。また、黒灰色土の上層には褐色土が覆いかぶさるように堆積しており、そこから須恵器片や鉄滓などが出土している。これらの状況からは、段状遺構としてよいのかどうかやや疑問が残り、丘陵上からの流土である可能性も否定できない。しかし黒灰色土には明らかに弥生土器を包含しており、ここでは段状遺構と判断する。

段状遺構４（ＳＴ４、第21・22図、第25図10、図版16）

調査区北西端、段状遺構３のさらに北側に位置する。丘陵の北斜面を削平しているが、平坦面は流失している。全長6.7ｍをはかり、壁溝の幅は0.4～0.55ｍである。柱穴は壁溝に平行して２個の柱穴が並んでいる。

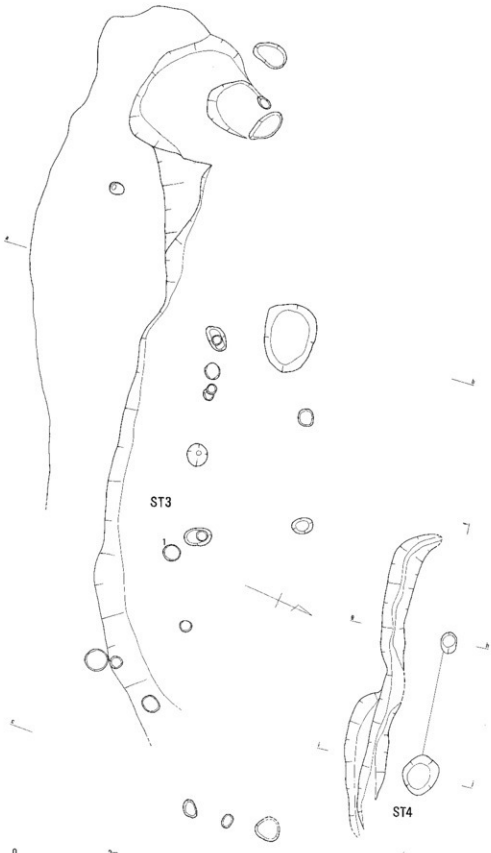
遺物は少なく、小型のポリ袋１袋分程度である。甕（第25図10）は「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部は上方へわずかに拡張する。また、段状遺構３の埋土である黒灰色土から出土した器台（図９）と同一個体となる小片も出土していることから、弥生時代中期中葉のものと考えてよいだろう。

段状遺構５（ＳＴ５、第23図、図版16）

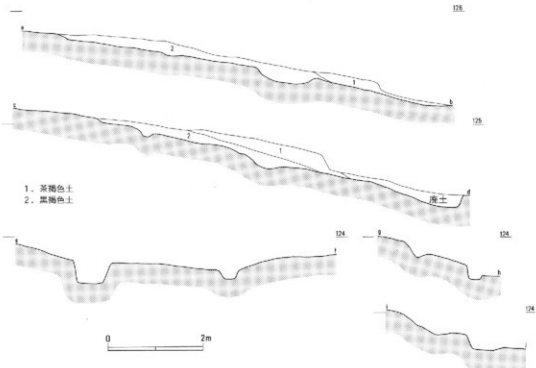
調査区東部に位置する。丘陵の東斜面を断面Ｌ字形に削平して平坦面を形成している。全長4.6ｍ、幅最大2.5ｍをはかるが、東側を段状遺構６に切られているため、平坦面はさらに続くものと思われる。平坦面上に柱穴はみられなかった。

遺物は弥生土器片が少数出土したのみで、正確な時期は不明である。

段状遺構６（ＳＴ６、第23図、図版16）



第21図　段状遺構３・４平面図（S＝1：80）



第22図　段状遺構３・４断面図（Ｓ＝１：80）

調査区東部、段状遺構５のすぐ東側に位置する。丘陵の東斜面を断面Ｌ字形に削平して平坦面を形成しており、一部貯蔵穴28と切り合っている。また、平坦面の東側部分は後世の削平によって途中で切られている。平面はいびつに曲がっており、南側で大きく西に膨らんでいるため、この膨らんだ部分は別の遺構である可能性があるが、ここでは１つの遺構として扱うことにする。全長約7.5ｍ、残存部分で最大幅約２ｍをはかる。

遺物はなく、時期の特定はできないが、後述する貯蔵穴28に切られていることから、弥生時代のものと判断できる。

段状遺構７（ＳＴ７、第23図、第25図11・12、図版17・31）

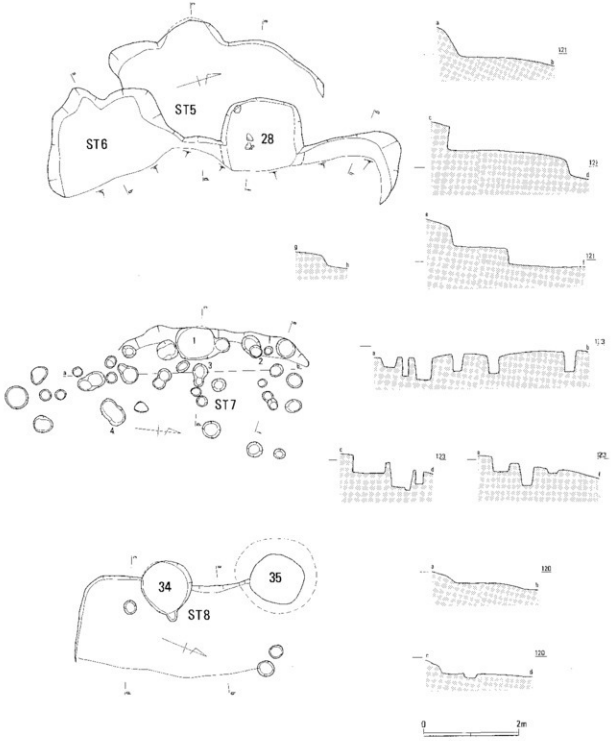
調査区北東部、竪穴住居２の１ｍ南側に位置する。丘陵の東斜面を削平しているが、平坦面は流失している。全長は約4.1ｍをはかる。段の下面には20個あまりの柱穴を検出しており、そのうちの３個が等間隔にほぼ一直線に並んでいる。柱間は1.6ｍをはかる。

遺物は柱穴３その他３個のピットから出土した。11は長頸壺の口縁部で、拡張した端面には浅い凹線文を施している。また、蓋（12）は偏平な蓋部に細長いつまみをつけるものである。

段状遺構８（ＳＴ８、第23図、図版17）

調査区の東端部、竪穴住居３の北東約0.5ｍのところに位置し、西側は貯蔵穴34、35に切られている。丘陵の東斜面を断面Ｌ字状に削平して平坦面を形成している。平面はＬ字形を呈しており、全長約3.5ｍ、幅約２ｍをはかる。平坦面に柱穴を１個検出した。

遺物はなく、正確な時期は特定できないが、貯蔵穴がこの段状遺構８よりも後にできたものであることから、おそらく弥生時代のものと思われる。

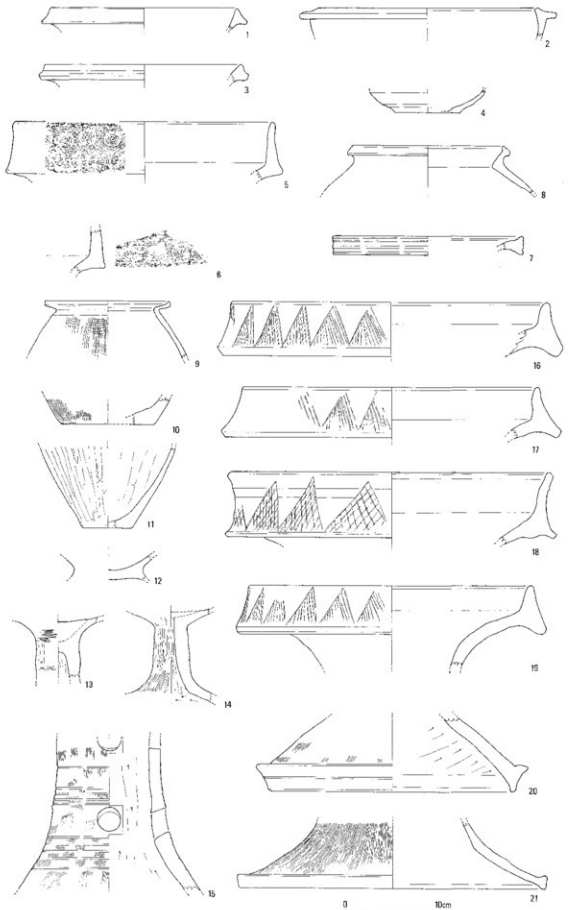


第23図　段状遺構５～８平・断面図（S＝1：80）

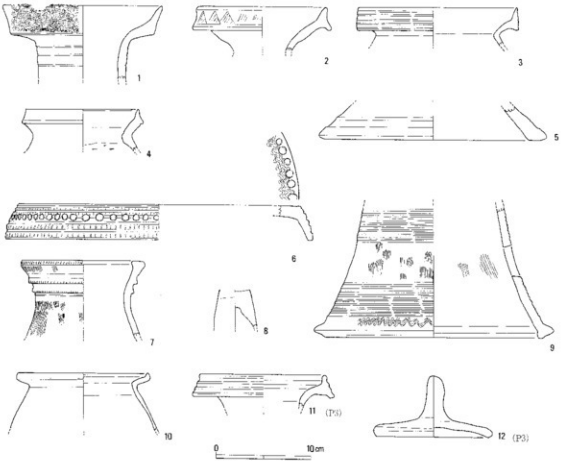
（5）貯蔵穴

今回の調査では、平面形態は円形で、断面は袋状をなす土坑が30基あまりみつかっている。これらの土坑は一部のものを除いてそのほとんどが調査区の北東部に集中しており、その規模は直径１～２m、深さ0.5～1.5mの間におさまるものである。この土坑群は、その形状や検出状況から食料を保存するための貯蔵穴と考えられる。以下に貯蔵穴と推定できるものについて、内容を示す。

貯蔵穴１（第26図、第27図１～７、図版18・32）



第24図　段状遺構２（１～４）・３（５～21）出土遺物実測図（S＝１：４）



第25図　段状遺構３（１～９）・４（10）・７（11・12）出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

貯蔵穴群の最西端に位置し、後述する貯蔵穴２と重複している。平面形は円形に復元でき、直径1.6～1.8ｍ、底径２～2.2ｍ、深さ1.8ｍをはかり、断面は袋状を呈するものと思われる。貯蔵穴の中では最大の部類にはいる。内部には一辺20～40㎝の河原石が東半部にまとまってみられ、北側にはそれよりもやや小型の石とともに弥生土器がまとまって出土した。

出土遺物は壺、高杯、器台などがある。壺は１のみ図示できた。若干拡張した口縁端部に、強いナデによる凹線が１条みられる。５は高杯である。脚部は脚柱部から裾部に向かって大きくひらく形状で、小型の杯部をもつ。また、６、７はともに器台であるが、６はＸ字状に上下にひらく形状で、口縁端部は外反ぎみに拡張する。裾部には３方向にスカシ孔がみられる。７は鼓形器台である。筒部は比較的狭く、器受部の方が脚台部よりも若干大きくなる形状で、外・内面とも丹塗りである。高杯は小型の杯部に大きくひらく裾部をもつものである。

貯蔵穴２（ＴＺ２、第26図、第27図８・９、図版19）

貯蔵穴１の東側に接して検出。復元すると直径1.4～1.5ｍ、底径2.2～2.4ｍ、深さ1.75ｍとなり、断面は袋状を呈する。

出土遺物は土器の小片のみで、図示できるものは少ない。８の甕の口縁部は凹線文が施されず、ナデのみである。９の脚部片には、裾部の屈曲部分に小型の爪形文が上下２段に施されている。

貯蔵穴３（ＴＺ３、第28図、第27図10～14、図版19・32）

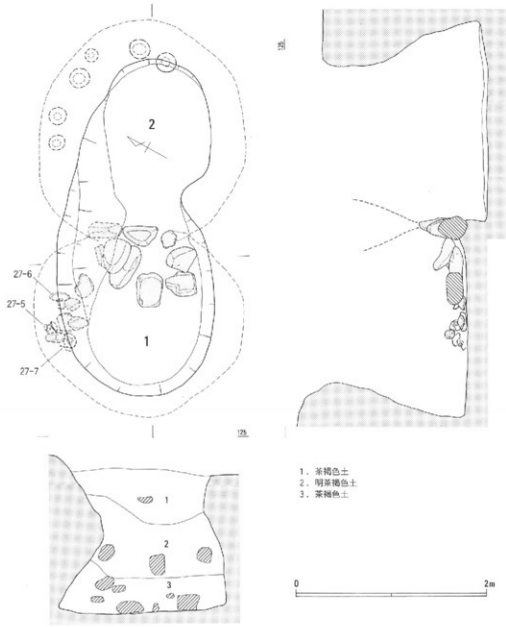
貯蔵穴１、２の南東部で検出した。平面形態は直径1.3ｍ程度の不整円形であり、底径1.8～1.85ｍ、深さ1.65～1.75ｍをはかる。

出土遺物は甕、蓋などがある。甕の口縁部は凹線文が施されているものは少なく、ナデのみのものが多い。また、端部を外側に拡張しているものもみられる（13）。内面はいずれも頸部直下までヘラ削りを施している。また、10の口縁部は、後述する貯蔵穴４で出土した口縁部と接合することが遺物の整理段階で判明した。

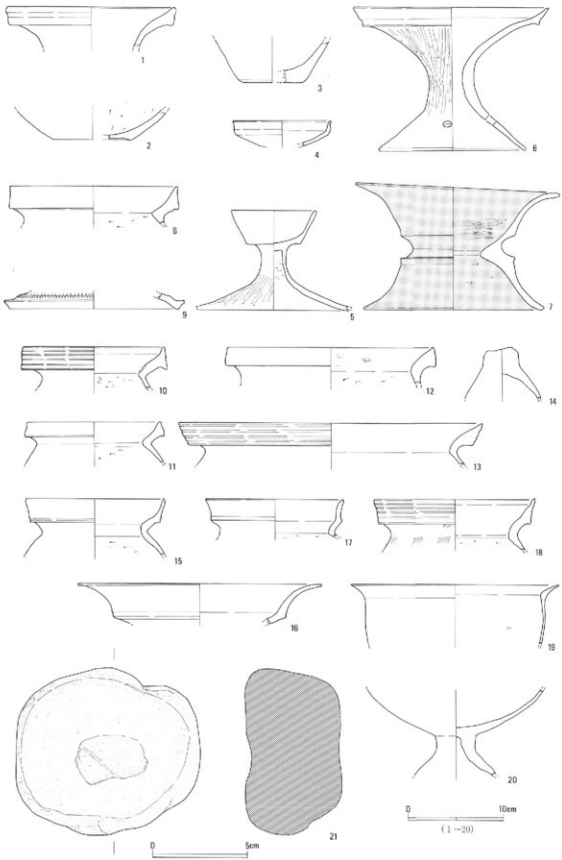
貯蔵穴４（ＴＺ４、第28図、第27図15・16、図版19・32・40）

貯蔵穴３から南東約１ｍのところに位置しており、貯蔵穴５とは深さ１ｍのところで重なっている。直径1.15～1.25ｍ、底径1.6ｍ、深さ1.3ｍをはかる。断面形は袋状である。

遺物は弥生土器の小片およびくぼみ石がある。土器は２点のみ図示できた。16の高杯は口縁部が大きく外反しており、端部は面を持たず丸くおさめる。15の甕は口縁端部がやや外側上方に立ち上がる形状のものである。



第26図　貯蔵穴１・２平・断面図（Ｓ＝１：40）



第27図　貯蔵穴1（1～7）・2（8・9）・3（10～14）・4（15・16・21）・5（17～20）
出土遺物実測図（1～20…S＝1：4、21…S＝1：2）

貯蔵穴５（ＴＺ５、第28図、第27図17～21、図版20・32）

貯蔵穴４の南側に接するもので、直径0.8～0.9ｍ、底径1.15～1.5ｍ、深さ1.2ｍをはかる。断面形は袋状で、貯蔵穴４と接する北側はやや垂直ぎみに立ち上がっている。

遺物は甕、高杯、砥石などがある。甕は口縁部を外側上方に拡張するタイプのもので、回線文はない。高杯（20）は杯部が浅く、脚部が短くひらく新しい段階のものである。

貯蔵穴６（ＴＺ６、第28図、図版20）

貯蔵穴３の南約３ｍのところに位置し、後述する貯蔵穴７と北側で重複している。復元すると直径1.1ｍ、底径1.2ｍ、深さ0.55ｍをはかり、平面は楕円形で、断面は南側でほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は出土していないため、時期は特定できない。

貯蔵穴７（ＴＺ７、第28図、第31図１～６、図版20・33）

貯蔵穴５から西に約２ｍのところに位置し、貯蔵穴６と重複している。直径1.2～1.4ｍ、底径1.7～1.8ｍ、深さ1.55ｍをはかり、断面は袋状で、貯蔵穴６と接する南側は垂直ぎみに立ち上がっている。遺物は壺、甕がある。壺（５）の頸部には刺突文が巡らされているほか、ヘラ記号が施されている。甕は拡張部分が垂直に立ち上がるタイプのもので、内面は頸部直下までヘラ削りを施している。

貯蔵穴８（ＴＺ８、第28図、第29図、図版20・32・33）

貯蔵穴６・７の西1.5ｍのところに位置し、後述する古墳の周溝を切っている。直径0.9～1.1ｍ、底径1.3～1.55ｍ、深さ1.6ｍで、断面は袋状を呈する。底には人頭大よりもやや大きめの石が１つみられ、土器の一部はそのうちの１つの石に接して底面から浮いた状態で出土した。

遺物は壺、甕、高杯など多量に出土している。甕は口縁端部が直立するもの、外側上方に拡張するもの、わずかに拡張するのみのものの３種類がみられる。端面に回線文を施すものも少なからず存在する。また、台付きのもの（17）などもみられる。底部は平面を保っているが、23のように丸底化しているものもある。高杯の杯部は口縁部が屈曲して外反するもので、端部を丸くおさめる。脚部は短いものが多い。これらの遺物にはやや時期幅があり、16～18、21、23などは他のものと比べやや新相のものである。また、刀子と思われる鉄器（32）なども出土しており、貯蔵穴出土遺物の中で唯一の鉄製品である。

貯蔵穴９（ＴＺ９、第30図、第31図７～13、図版20・34）

貯蔵穴１、２の南約1.5ｍのところに位置し、一部古墳の周溝と重複している。平面は不整円形で、断面はわずかに内傾気味に立ち上がる。直径0.9～1.2ｍ、底径1.1～1.2ｍ、深さ１ｍをはかる。

遺物は甕、鉢、器台などがある。甕は口縁端部を拡張して回線文を施すものと、強いナデによりわずかに肥厚させるものがある。器台（13）は口縁部に鋸歯文を施し、中央にはスカシ孔がみられる。

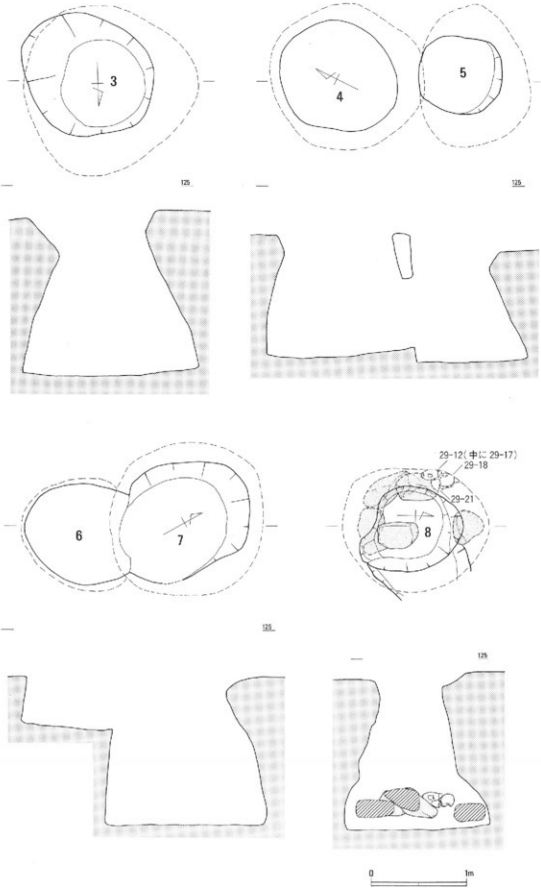
貯蔵穴10（ＴＺ10、第30図、第31図14～19、図版20・34）

貯蔵穴１、２の南側に位置する。平面は円形を呈し、断面は２段堀りになっている。１段目の直径2.6～2.7ｍ、底径2.3ｍ、２段目の直径1.6ｍ、底径1.8ｍをはかる。貯蔵穴の中では最大である。

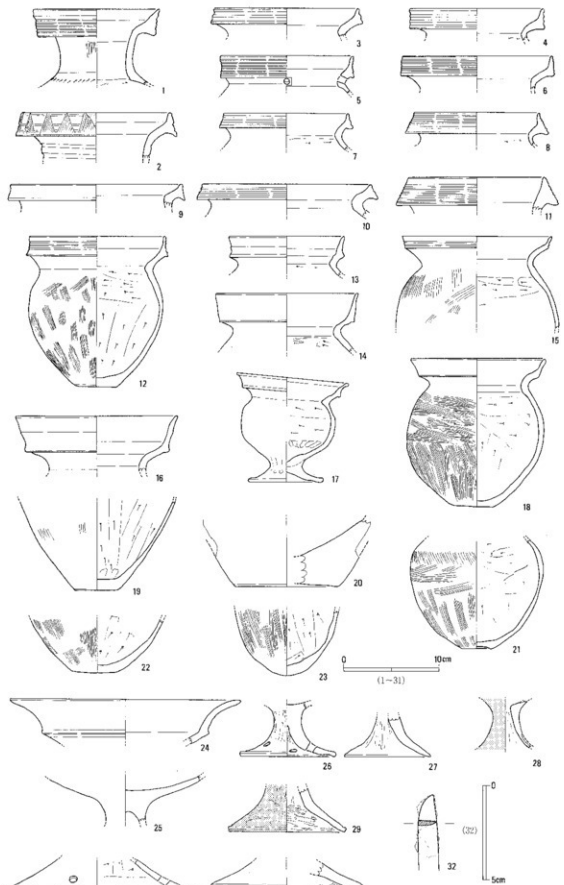
出土遺物は甕口縁部、壺口縁部、椀、器台などがある。小片のみで時期の特定は困難であるが、14と15の口縁部を比べるとやや時期幅があるように思われる。

貯蔵穴11（ＴＺ11、第30図、第31図20～22、図版20）

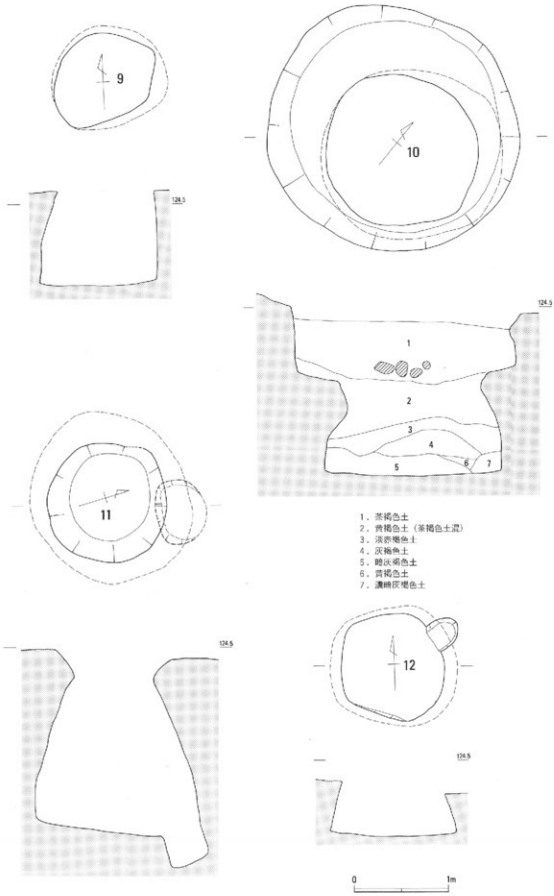
貯蔵穴６、７の西1.2ｍのところに位置する。円形を呈し、断面は袋状である。北側の底面には北に向かってさらに小さい穴がみられる。直径1.3ｍ、底径1.7～1.85ｍ、小穴の直径0.4ｍ、深さ0.4ｍをはか



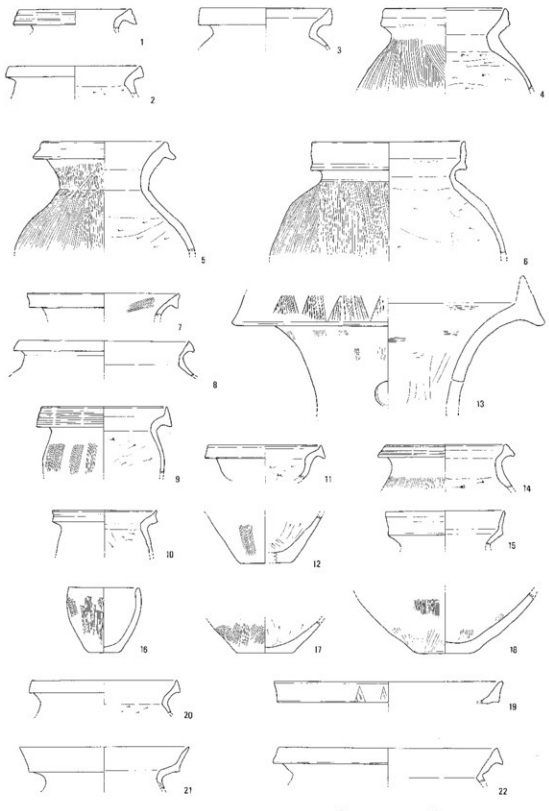
第28図　貯蔵穴３～８平・断面図（S＝１：40）



第29図　貯蔵穴８出土遺物実測図（１～31…Ｓ＝１：４、32…Ｓ＝１：２）



第30図　貯蔵穴９～12平・断面図（Ｓ＝１：40）



第31図　貯蔵穴7（1～6）・9（7～13）・10（14～19）・11（20～22）出土遺物実測図（S＝1：4）

る。

遺物は甕の口縁部がある。いずれも表面が風化しており、調整を観察することができない。21は口縁部が大きくひらく複合口縁で、器壁が薄くつくられている。

貯蔵穴12（ＴＺ12、第30図、図版21）

貯蔵穴４の北1.2ｍ、貯蔵穴群のちょうど中央部に位置する。円形を呈し、断面は浅い台形である。貯蔵穴群の中では浅い部類に入るもので、直径1.1～1.2ｍ、底径1.3～1.4ｍ、深さ0.4～0.55ｍをはかる。遺物は出土していないため正確な時期は不明である。

貯蔵穴13（ＴＺ13、第32図、第33図１～３、図版21）

貯蔵穴12の北２ｍのところに位置する。円形を呈し、断面は台形である。直径1.1ｍ、1.25～1.45ｍ、深さ1.1～1.25ｍをはかる。

遺物は口縁部片、底部片など、小片のみである。１は端部を斜め上方に拡張するもので、端面に４条の凹線文を施す。２は下方に拡張するタイプのものである。この２つをみると、貯蔵穴10同様、時期幅が想定できるが、遺物が少量であるため確実には言えない。

貯蔵穴14（ＴＺ14、第32図、第33図４、図版21）

貯蔵穴13の北約１ｍのところに位置する。平面は楕円形で、断面は袋状を呈する。直径１～1.25ｍ、底径1.25～1.45ｍ、深さ1.2～1.3ｍをはかる。

遺物は口縁部片や高杯の脚部片などがあるが、小片であるため、図示することができない。図示することができたのは４の底部のみである。体部から底面にかけてヘラミガキを施している。内面はヘラ削り調整。遺物の時期は明確には分からないが、短く直立する口縁部片などの出土もみられることから、弥生時代のものと考えられる。

貯蔵穴15（ＴＺ15、第32図、第33図５～15、図版21・34・35）

貯蔵穴13の南東0.6ｍのところに位置する。不整円形を呈し、断面は浅い袋状である。直径1.3ｍ、底径1.4～1.5ｍ、深さ0.8～１ｍをはかる。

遺物は壺、甕、鉢、高杯などがある。小片が多く、図示できたものが少ない。甕は６を除くといずれも頸部直下までヘラ削りが施されている。13の高杯は全面丹塗りであり、口縁部に上下２段に渦巻状のスタンプ文が施されている。脚柱部は短く、屈曲して裾部へ向かう。この高杯と同様のスタンプ文は器台片（15）にもみられる。

貯蔵穴16（ＴＺ16、第32図、図版21）

貯蔵穴15の南東約１ｍのところに位置する。平面は円形を呈し、断面は他の貯蔵穴と異なり浅い台形を呈する。貯蔵穴群の中では最も浅い部類にはいる。直径1.25ｍ、底径1.15ｍ、深さ0.15～0.3ｍをはかる。遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

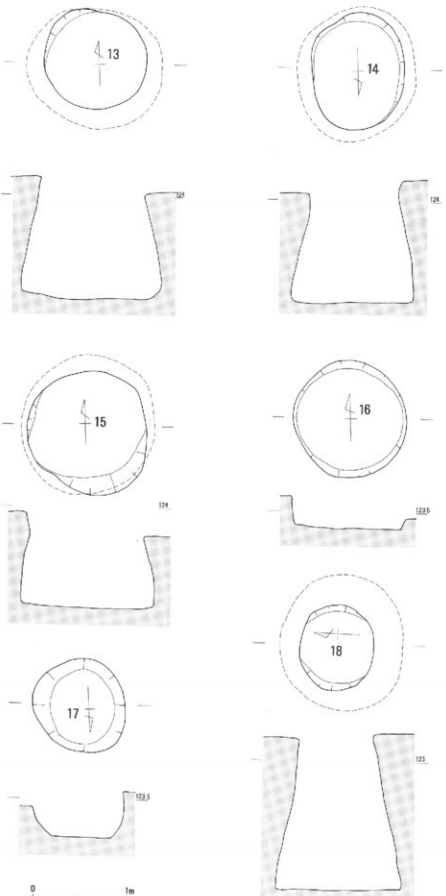
貯蔵穴17（ＴＺ17、第32図、第34図１、図版21）

貯蔵穴16の北約２ｍのところに位置する。平面は不整円形で、断面はやや膨らみをおびた台形を呈する。直径0.95～1.05ｍ、底径0.7～0.8ｍ、深さ0.3～0.5ｍをはかる。

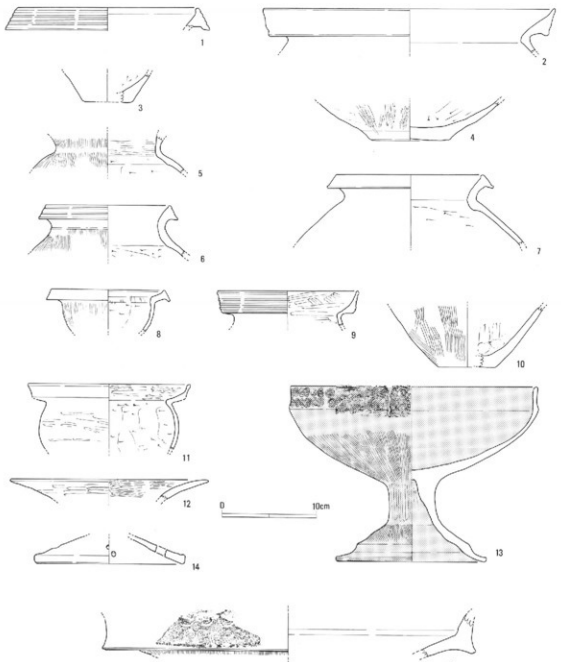
遺物は少なく、図示できたのは１のみである。口縁端部上下に拡張し、端面には浅い凹線文がみられる。

貯蔵穴18（ＴＺ18、第32図、第34図２～24、図版21・35・36）

貯蔵穴17の北約２ｍのところに位置する。平面はやや楕円形であり、断面は底に向かって直線的に



第32図　貯蔵穴13～18平・断面図（S＝1：40）

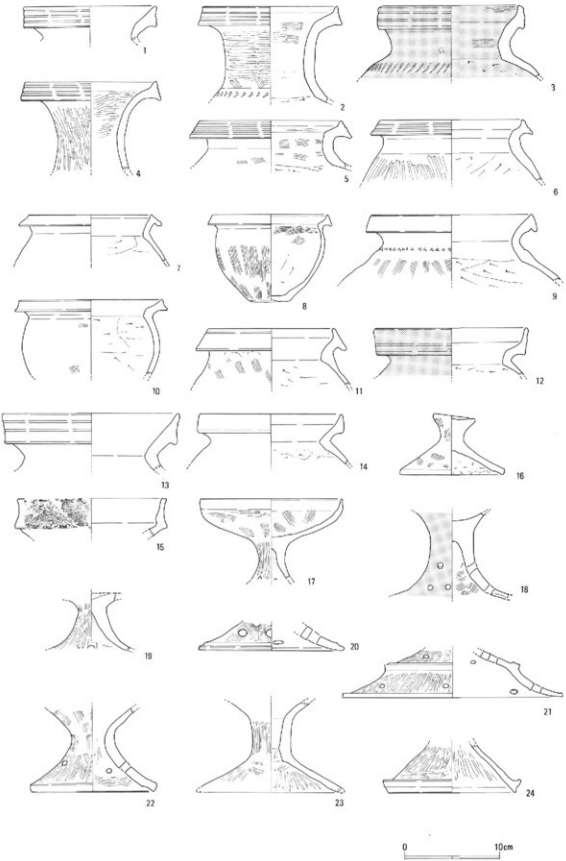


第33図　貯蔵穴13（1～3）・14（4）・15（5～15）出土遺物実測図（S＝1：4）

大きくひらく等脚台形を呈している。平面の直径は0.8～0.9m、底径1.3～1.5m、深さ1.65mをはかり、貯蔵穴群の中で深い部類のものである。

遺物は多数あり、掲載できなかったものも多い。器種としては壺、甕、高杯、盌などがある。2・4は長頸壺で、拡張した口縁部に凹線文を施すものである。いずれも外・内面に丁寧にヘラミガキを施している。甕体部内面のヘラ削りは頸部直下まで行われている。口縁端面に凹線文を残すものもあるが、ナデのものの方が多い。高杯は脚柱部から裾部にかけて緩やかに広がるものと、屈曲してハの字状にひらくものの2種あり、裾部付近にスカシ孔のあるものが多い。21などは装飾的な高杯で、エンタシス状の脚柱部をもつものである。5や6などは若干古い様相を呈しているが、概ね同時期のものであろう。

貯蔵穴19（TZ19、第35図、第37図1～4、6～9、11、図版21・36）



第34図　貯蔵穴17（1）・18（2～24）出土遺物実測図（S＝1：4）

貯蔵穴1・2の北東約1.5mのところに位置する。平面は円形であり、断面は等脚台形を呈している。平面の直径1m、底径1.7～1.8m、深さ1.6mをはかり、貯蔵穴18と同様貯蔵穴群の中では深い部類に入る。

遺物は甕や壺の体部などがある。甕の口縁部は、ほとんどが端部を上方へ拡張する新しい段階のもので、凹線文も退化している。7などは山陰系の複合口縁と考えられる。2は端部の拡張が少なく、端面もナデのみである。壺の体部（1）は波状文と平行沈線文を施しており、中期のものと思われる。中期の土器はこの一点のみで、混入したものである可能性が高い。その他の遺物はすべて同時期のものであろう。

貯蔵穴20（TZ20、第35図、第37図3・10、図版22）

貯蔵穴19の北隣に位置する。平面は楕円形を呈し、断面は袋状である。直径1.1～1.7m、底径1.5～1.65m、深さ1.3mをはかる。

遺物は甕、壺、高杯などがある。10は壺の拡張した口縁部と思われ、外面にスタンプ文を施す。この他、山陰系の甕の複合口縁部片などもあるが、小片であるため図示できなかった。

貯蔵穴21（TZ21、第35図、第38図1～14、図版22・36・37）

貯蔵穴6の南3.5mのところに位置する。平面は円形で、断面は袋状である。直径1.1m、底径1.7～1.8m、深さ1.4mをはかる。貯蔵穴内南側には20×30×40cmの石が底面から約0.4m浮いた状態でみられ、北側にもそれよりやや小型の石がみられた。

遺物は壺、甕が目立つ。7は貯蔵穴内の北側で底面から約0.4m浮いた状態で出土した大型の壺である。山陰系の複合口縁をもち、口縁部下端および肩部にスタンプ文を施す。3は拡張した口縁部に鋸歯文、肩部付近にヘラ状の工具で施した刺突文がみられる。甕は上方に拡張した口縁端部に凹線文を施すもの、強いナデによりわずかに拡張するものなどが目立つ。鉢（13）にはヘラミガキが丁寧に施されている。壺の口縁部が外側上方に拡張されていることから、全体的に新しいものであることが分かる。

貯蔵穴22（TZ22、第36図、第38図15・16、図版22）

貯蔵穴群の最北壁に位置しており、半分は調査区外にのびる。復元すると平面は長方形となり、断面は底に向かってわずかに膨らみをみせるものの、ほぼ垂直に落ちている。上面1.9m×1.3m、底面1.7×1.1m、深さ0.85mをはかる。

遺物は弥生土器の破片が少量出土しており、図示できたのは2個体のみである。15の壺の口縁端部には凹線文はなく、ナデるだけのものである。16の甕は拡張した口縁部端面に凹線文を施している。

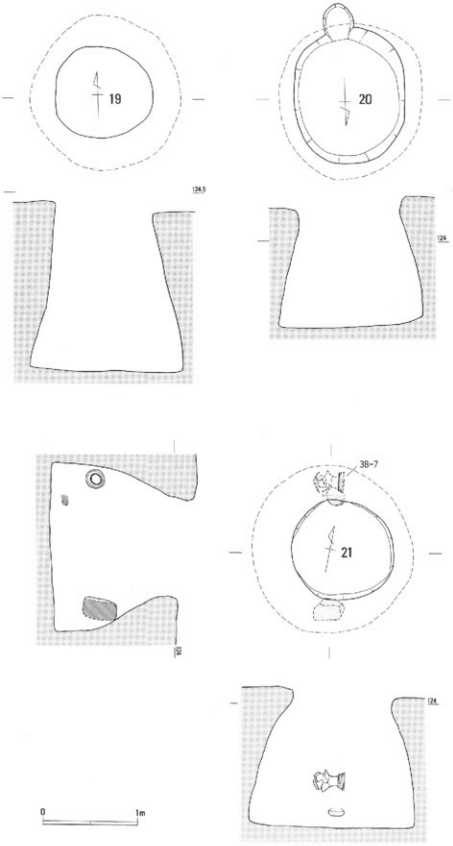
貯蔵穴23（TZ23、第36図、第38図17～21、図版22・37）

貯蔵穴4、5の東約1mのところに位置する。平面は楕円形を呈し、断面は袋状である。直径0.9～1.1m、底径1.5～1.6m、深さ1mをはかる。

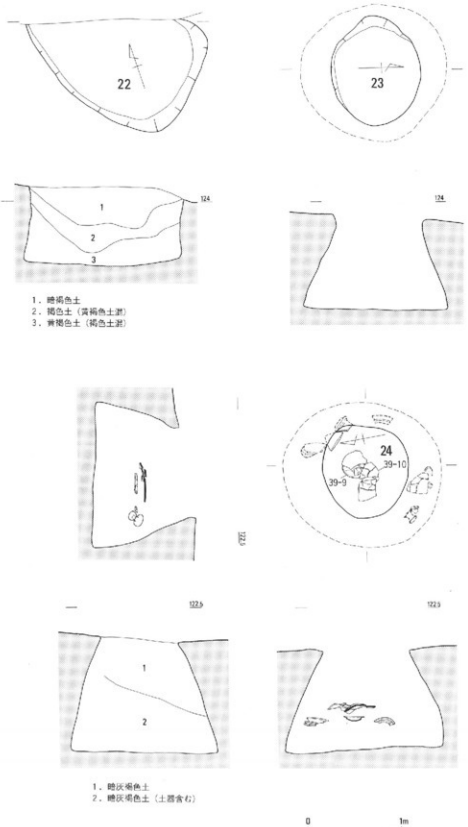
遺物は多くなく、甕のみ復元することができた。20、21などは山陰系のものと思われ、口縁部が外側上方にひらく。斜めに大きく外反するものの2種がみられる。また、19のように端部を拡張せずに丸くおさめるのみで、体部が球形に近い形状のものもある。これらの遺物は複合口縁の形態や、19の甕の最大径が体部中央付近にあることなどから、新しい段階のものであろう。

貯蔵穴24（TZ24、第36図、第39図、図版22・37）

貯蔵穴群から約8m南東側に離れたところにある4つの貯蔵穴の中の一つ。平面は円形で、断面は



第35図　貯蔵穴19～21平・断面図（＝1：40）



第36図　貯蔵穴22～24平・断面図（S＝1：40）

第37図　貯蔵穴19（1～4・6～9・11）・20（5・10）出土遺物実測図（S＝1：4）

底部に向かって大きくひらく等脚台形である。直径0.9～1ｍ、底径1.5～1.7ｍ、深さ1.1～1.3ｍをはかる。

出土遺物は多量にあり、貯蔵穴底面から0.3～0.4ｍ浮いたところに集中して出土した。器種は壺、甕、蓋、高杯、器台などがある。壺（10）は高さ55cmと大型のもので、体部は表裏とも丁寧にヘラミガキを施している。頸部と体部との境目には突帯を巡らす。高杯（9）は口縁部を水平に大きく拡張し、上面に凹線文を施す。器台（7）は復元すると底径30cm程にもなるもので、ハケの後ヘラ描きの沈線文を巡らす。

貯蔵穴25（ＴＺ25、第40図、第41図1～3、図版23・37）

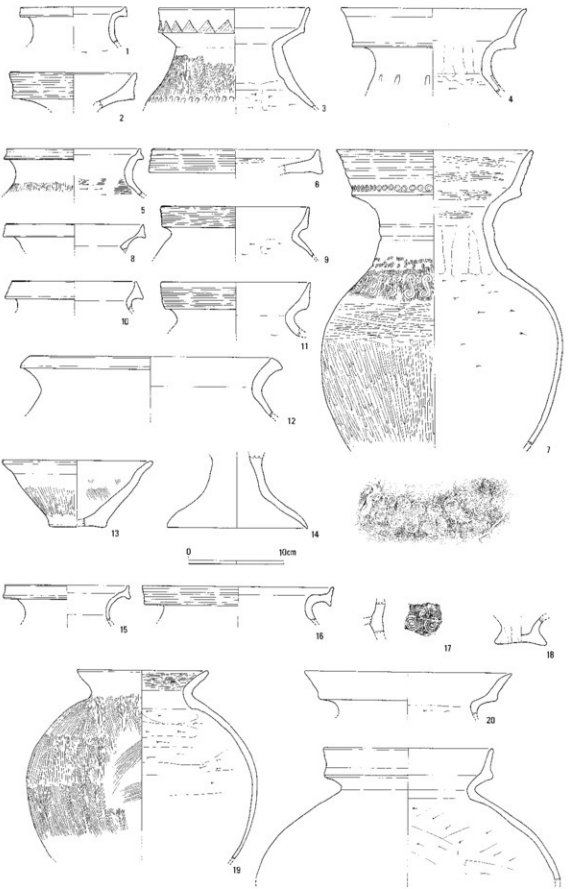
貯蔵穴24のすぐ南隣に位置する。貯蔵穴群の中では小型のものである。平面は不整円形で、直径0.8ｍ、底径0.8ｍ、深さ0.2～0.3ｍをはかる。内部には一辺20～40cm程度の河原石が2個と多数の小石がみられた。

遺物はその多数の小石の中に少数あるのみであった。壺（1）は口縁部端面に4条の凹線文を施している。高杯（3）は浅い杯部で、口縁は拡張して端部にやや内傾した面をもつ。脚柱部から裾部にかけて上段に4方向、下段に7方向のスカシ孔を穿つものに復元できる。杯部と脚部の接合は円盤充填法である。

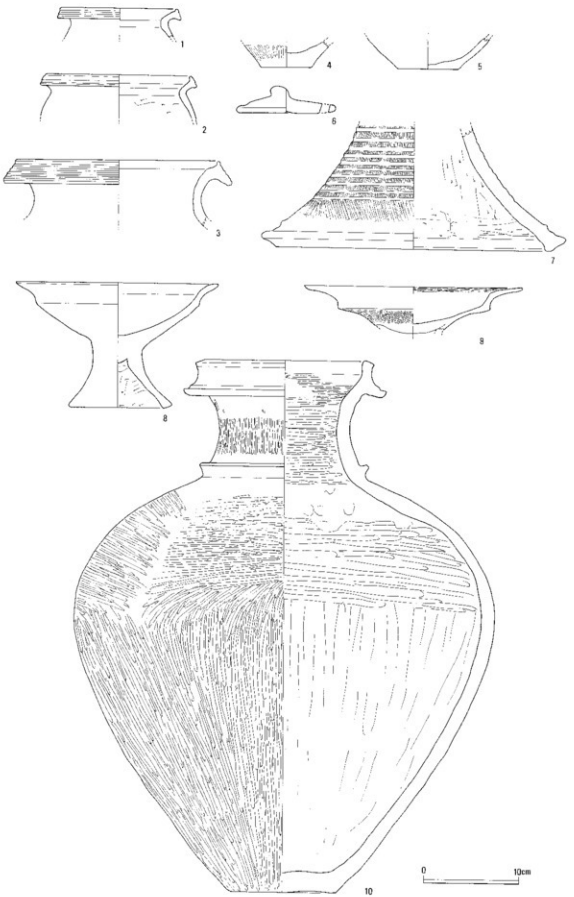
貯蔵穴26（ＴＺ26、第40図、第41図4・5、図版23）

貯蔵穴25の南隣に位置する。平面は円形で、断面は台形を呈する。直径1～1.2ｍ、底径1.3～1.6ｍ、深さ1ｍをはかる。底部には人頭大の石が数個みられた。

遺物は少なく、ポリ袋に1袋分程度である。4は壺の口縁で、端部はわずかに上方に拡張する。外面・内面の両方が丹塗りである。まっすぐにのびる頸部をもつものと思われる。



第38図　貯蔵穴21（1～14）・22（15・16）・23（17～21）出土遺物実測図（S＝1：4）



第39図　貯蔵穴24出土遺物実測図（S＝1：4）

貯蔵穴27（ＴＺ27、第40図、第41図６、図版23）

調査区北東部、貯蔵穴群からはやや離れたところに位置する。平面は円形で、断面は浅い台形を呈する。直径1.4～1.6ｍ、底径1.8ｍ、深さ0.4～0.5ｍをはかる。

遺物は少なく、ポリ袋に１袋分程度である。図示できたのは唯一６の甕の口縁部のみであった。

貯蔵穴28（ＴＺ28、第40図、第41図７、８、図版38）

貯蔵穴24から東へ３ｍ、後述する段状遺構６に重複して検出した。平面は復元すると一辺1.7ｍ程度の隅丸正方形となり、深さは0.3～0.4ｍと浅い。

遺物はごくわずかで、復元し得たのは壺、甕のみである。壺は頸部が外反しながら口縁部に向かう形状をしており、口縁部端面に４条の凹線文を施している。甕の口縁部はわずかに拡張している。

貯蔵穴29（ＴＺ29、第40図、第41図９～17、図版23・38）

貯蔵穴28から東に10ｍあまりのところに位置する。検出した貯蔵穴のなかでは最東端のものである。他のピットと重複しているが、平面は円形で、断面は四側がややオーバーハングしている。直径1.7～2.3ｍ、底径1.6～1.9ｍ、深さ0.2～0.5ｍをはかる。内部には人頭大の石及びそれよりやや小さめの石が中心にまとまった状態でみられた。

遺物は壺、甕、高杯などがある。壺、甕の口縁部は端部を斜め上下に拡張するものと、上方にのみ拡張するものの２種ある。前者の端面には凹線文はみられず、ナデのみである。15、16は器台の裾部と思われる。いずれも端部を強くナデている。16には円形のスカシ孔が２個穿孔されている。

貯蔵穴30（ＴＺ30、第42図、図版23）

調査区北東部、竪穴住居２の東部に位置する。平面は不整円形で、断面は袋状を呈する。直径0.8～１ｍ、底径１～1.1ｍ、深さ0.5ｍをはかる。

遺物は小型のポリ袋１袋分程度しかなく、復元できるものがなかったため、時期を特定することはできなかった。

貯蔵穴31（ＴＺ31、第42図、図版24）

調査区南東部、竪穴住居５から約２ｍ北側に位置する。小型の貯蔵穴で、平面は円形、断面は北側に向かってオーバーハングしている。直径0.6ｍ、底径0.4～0.5ｍ、深さ0.3～0.5ｍをはかる。

遺物は小型のポリ袋１袋分に満たない。小片であり、時期を特定することはできなかった。

貯蔵穴32（ＴＺ32、第42図、第43図１～12、図版24・38）

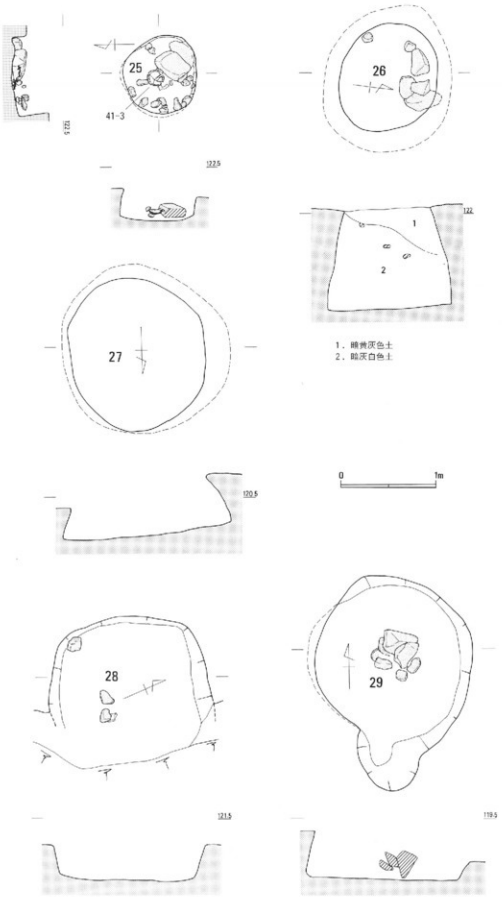
調査区南東部、竪穴住居３のすぐ南西側に位置する。平面は円形で、断面は等脚台形である。直径1.0ｍ、底径1.4～1.55ｍ、深さ0.7～0.8ｍをはかる。

遺物は甕、壺、高杯などがある。甕は口縁端部が斜め上方に拡張されているものが多く、直立するものはみられない。端面には凹線文を施すものも若干あるが、ナデのみのものが目立つ。11の甕は大型のもので、内・外面ともヘラミガキを行っており、丁寧なつくりである。甕内面のヘラ削りが頸部よりやや下方から始まるものが多く、高杯は口縁端部を外側に拡張するもの（12）がみられることなどが特徴である。

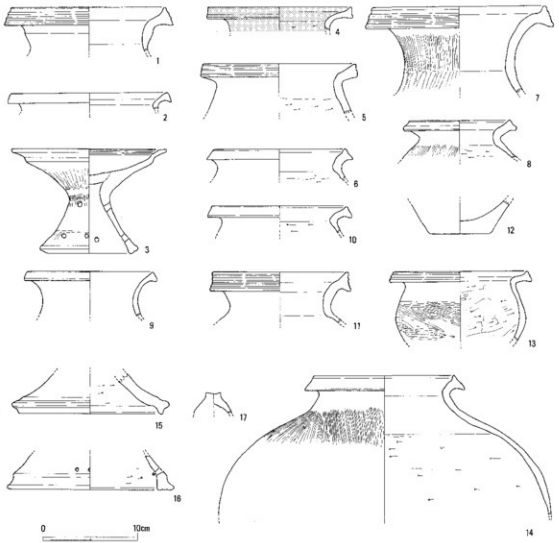
貯蔵穴33（ＴＺ33、第42図、第43図13～18、図版24・38）

調査区南東部、竪穴住居３の北側に一部重なっている。平面は不整円形で、断面は等脚台形を呈する。直径0.8～0.9ｍ、底径1.2～1.3ｍ、深さ0.7～１ｍをはかる。

遺物は甕、高杯などがある。甕はいずれも口縁端部が斜め上下に拡張するものである。



第40図　貯蔵穴25～29平・断面図（S＝1：4）



第41図　貯蔵穴25(1～3)・26(4・5)・27(6)・28(7・8)・29(9～17)出土遺物実測図（S＝1：4）

貯蔵穴34（TZ34、第42図、第43図19、図版24）

貯蔵穴33の北東0.5mのところに位置する。平面は円形を呈し、断面は底からほぼまっすぐに立ち上がる。直径1.1～1.3m、底径0.9～1.1m、深さ0.25～0.5mをはかる。

遺物は小型のポリ袋1袋分程度で、図示できたのはわずかに1点のみである。19の甕口縁部は端部を斜め下方に拡張し、3条の凹線文を端面に施すものである。

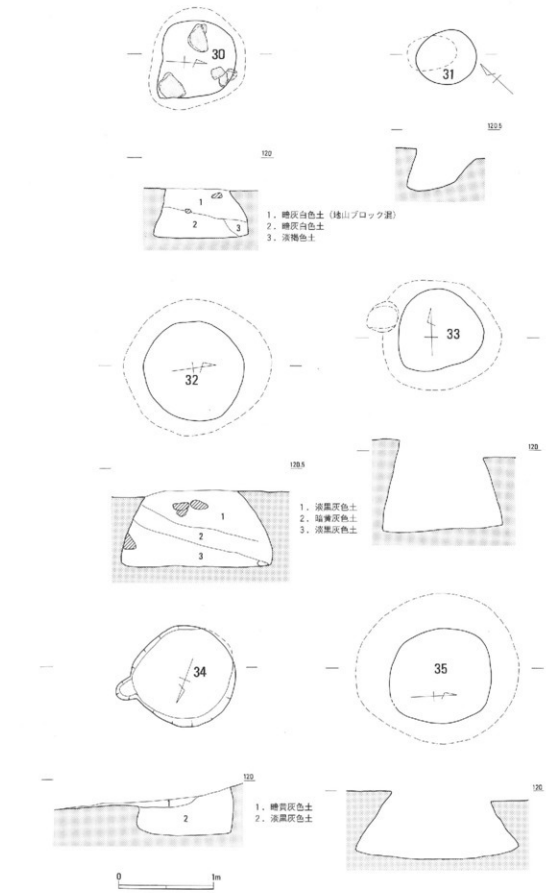
貯蔵穴35（TZ35、第42図、第43図20～27、図版24・38）

貯蔵穴34の北約1mのところに位置する。平面は円形で、断面は底部へ向かって袋状に大きくひらく。直径1～1.1m、底径1.6～1.7m、深さ0.6～0.7mをはかる。

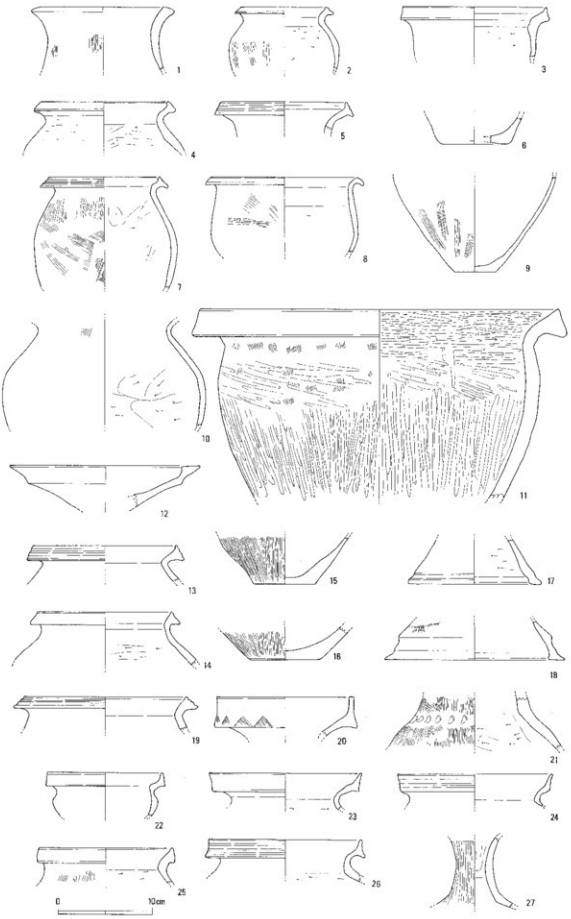
遺物は壺、甕、高杯などがある。20の壺の直立した口縁端部には鋸歯文が施されており、21の壺は頸部にヘラ状の工具による刺突文がみられる。甕はLI縁端面に凹線文を施すものに比べ、ナデのみのものが多い。23や24など外反するものもみられる。内面のヘラ削りは頸部直下から施されている。

（6）その他の遺構・遺物（第5図、第44図、図版39）

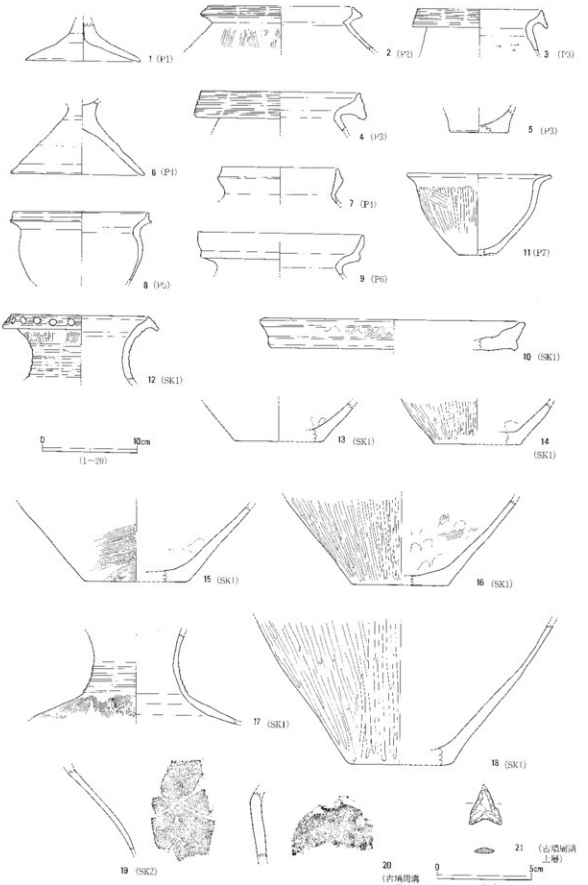
調査では上記のほかにも建物に復元することのできないピットや、性格の分からない土坑などが検



第42図　貯蔵穴30～35平・断面図（S＝1：40）



第43図　貯蔵穴32(1～12)・33(13～18)・34(19)・35(20～27) 出土遺物実測図（S＝1：4）



第44図　その他の遺構出土遺物実測図（1～20…S＝1：4、21…S＝1：2）

出されている。ここではそれらの出土遺物をまとめてとりあげることにする。

土器片の出土したピットは合計すると70個以上に及ぶが、その中で器種の分かるものはわずかしかない。甕、鉢、蓋などがある。甕は2のようにL1縁端部が内傾するものと、3・4・8のようにやや内傾気味ではあるが上方にのびるものとの2者がある。鉢（11）はL1縁部を外反させ、端部は丸くおさめるものである。外面は丁寧なヘラミガキがなされている。蓋（1）は浅い蓋部につまみをつけるもので、頂部を欠いている。2はハの字状に直線的に頂部へのびる形状で、短いつまみをつける。2の甕が弥生時代中期のものと考えられる以外はおおむね後期のものと考えられる。

また、土坑1（ＳＫ1）は直径1.5m、深さ0.15～0.2m程度の浅い土坑であるが、大型の土器が出土している。壺（11）は頸部に平行沈線文、L1縁端部に円形浮文をつけている。16は肩の張った広口壺で、頸部に太い沈線文を施す。これらはすべて弥生時代中期のものであろう。

その他遺構に伴わない遺物の中で注目すべきものとして、器台の脚部、石鏃などがある。器台（19）は、綾杉文と鋸歯文を組み合わせたような模様を施し、方形のスカシ孔の一辺が残る。(20) はサヌカイト製の石鏃である。

番　号	形　状	直　径	底　径	深　さ	時　期
1	円	1.6～1.8	2.0～2.2	1.8	④
2	円	1.4～1.5	2.2～2.4	1.75	④
3	不整円	1.3	1.8～1.85	1.65～1.75	④
4	円	1.15～1.25	1.6	1.3	④
5	円	0.8～0.9	1.15～1.5	1.2	④
6	楕円	1.1	1.2	0.55	?
7	不整円	1.2～1.4	1.7～1.8	1.55	②～③
8	不整円	0.9～1.1	1.3～1.55	1.6	④
9	不整円	0.9～1.2	1.1～1.2	1.0	③
10	円 （2段）	2.6～2.7	1.8～1.9 1.6	0.6～0.7（上） 1.65～1.75（下）	③
11	円	1.3	1.7～1.85	1.9	④
12	円	1.1～1.2	1.3～1.4	0.4～0.55	?
13	円	1.05～1.1	1.25～1.45	1.1～1.25	③
14	楕円	1.0～1.25	1.25～1.45	1.2～1.3	?
15	不整円	1.3～1.35	1.4～1.5	0.8～1.0	③
16	円	1.25	1.15	0.15～0.3	?
17	不整円	0.95～1.05	0.7～0.8	0.3～0.5	③
18	楕円	0.8～0.9	1.3～1.5	1.6～1.65	③
19	円	0.95～1.05	1.7～1.8	1.55～1.65	③
20	楕円	1.1～1.7	1.5～1.65	1.25～1.3	③
21	円	1.1	1.7～1.8	1.4	④
22	長方	1.9×1.3	1.7×1.1	0.85	③
23	楕円	0.9～1.15	1.5～1.6	0.9～1.0	④
24	円	0.9～1.0	1.55～1.7	1.1～1.3	②
25	不整円	0.8	0.75～0.85	0.2～0.3	②
26	円	1.05～1.2	1.3～1.6	1.0～1.05	③
27	円	1.4～1.6	1.8	0.35～0.5	?
28	隅丸方	1.7	—	0.3～0.4	②
29	円	1.7～2.3	1.6～1.9	0.2～0.5	②
30	不整円	0.8～1.0	1.0～1.1	0.45～0.55	?
31	円	0.6	0.4～0.5	0.3～0.45	?
32	円	1.05	1.4～1.55	0.7～0.8	②
33	不整円	0.8～0.9	1.2～1.3	0.7～1.0	②
34	円	1.1～1.3	0.9～1.1	0.25～0.5	②
35	円	1.0～1.1	1.6～1.7	0.6～0.7	④

凡例：②＝第2段階（弥生時代後期前葉）　③＝第3段階（弥生時代後期中葉）
④＝第4段階（弥生時代後期後葉～終末期）

第2表　貯蔵穴一覧

第3表　建物出土遺物一覧表

挿図番号 図面番号 出土位置	器種	法量（単位：cm）（ ）内は残存値 口径	底径	器高	形態・調整（外・内面）	胎土・焼成・色調	備考
10−1 507 SB1P2	甕	14.6	—	(1.7)	端部わずかに上方に拡張する。 外：ナデか。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡褐色	
10−2 509 SB1P4	高杯	—	—	(5.2)	口縁部直立する。 外：6条の凹線文。端部ナデ。 内：ナデ。	0.5mm程度の砂粒多く含む。 淡黄色	
10−3 508 SB1P5	高杯	—	—	(2.2)	口縁部直立し、端部わずかに外傾に拡張する。 外：3条の凹線文。端部ナデ。 内：ナデ。	0.5mm程度の砂粒含む。 淡橙褐色	
10−4 510 SB3P2	甕	16	—	(2.8)	口縁端部斜め上下に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒含む。 暗褐色	
10−5 436 SB3P1	高杯	13.4	—	5.7	脚部からやや屈曲して裾部へ向かう。裾部は上方に拡張する。上段に1孔、下方に3孔、計4つのスカシ孔を3方向に穿つ。 外・内面とも風化のため調整不明。	2mm以下の砂粒多く含む。 淡赤褐色	
10−6 506 SB4P3	壺	14		(4.5)	筒状の頸部から緩やかに外反する。端部わずかに上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。頸部に平行沈線文。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	
10−7 433 SB4P2	底部	—	6	(7)	外・内面とも風化のため調整不明。	1～3mmの砂粒多く含む。 赤褐色	
10−8 511 SB7P1	壺体部？	—	—	—	3条の平行沈線文の下に波状文。	1mm程度の砂粒含む。	

第4表　竪穴住居出土遺物一覧表

挿図番号 図面番号 出土位置	器種	法量（単位：cm）（ ）内は残存値 口径	底径	器高	形態・調整（外・内面）	胎土・焼成・色調	備考
13−1 104 SH1	壺	15	—	(5.7)	口縁部緩やかに外反。端部は上下に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。頸部に2条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～2mmの砂粒含む。 黄褐色	
13−2 97 SH1	口縁部	13.6	—	(2.4)	口縁端部斜め上下に拡張（やや内傾）。 外：端面に5条の凹線文。 内：ナデ。	1mm以下の砂粒若干含む。 淡橙色	
13−3 106 SH1	壺	14.8	—	(3.6)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：風化のため調整不明。	0.5～2mmの砂粒含む 黄褐色	口縁部にスス付着。
13−4 100 SH1	甕	13	—	(3.5)	口縁部くの字状に外反。端部は上下に拡張する。 外：端面に5条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2mmの砂粒多く含む。 黒茶色	
13−5 105 SH1	鉢	15	—	(3.8)	口縁部くの字状に外反。端部上方に拡張する。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	0.5～2mmの砂粒含む 褐色	
13−6 102 SH1	甕	16.4	—	(2.7)	口縁端部は上方に拡張する。 外：端面に2条の凹線文。 内：ナデ。	1mm程度の白色砂粒含む。 黄褐色	
13−7 101 SH1	甕	15.8	—	(4)	口縁部くの字状に強く外反。端部は上方に拡張する。 外：端面に5条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の砂粒多く含む。 暗黄褐色	
13−8 99 SH1	甕	20	—	(5)	口縁部くの字状に外反。端部は下方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。胴部にタテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～4mmの砂粒多く含む。 橙色	
13−9 96 SH1	底部	—	3.4	(4)	外：ハケの後、ナデ。 内：ナデ。指頭痕あり。	1mm以下の砂粒多く含む。 淡橙色	
13−10 98 SH1	底部	—	5.2	(3.8)	外：タテハケ。 内：ヘラ削り。指頭痕あり。	0.5～2mmの砂粒含む。 黒茶色	
13−11 103 SH1	台部	—	6.6	(3.2)	外：ナデ。 内：ナデ。	1.5mm程度の砂粒含む。 暗黄褐色	
13−12 95 SH1	高杯	—	—	(8.6)	外：風化のため調整不明。上下2段にスカシ孔あり（上段3方向、下段5方向）。 内：ヘラ削り。脚柱部に絞り目あり。	1mm以下の砂粒含む。 淡赤灰色	
13−13 SH1	石庖丁	(6.5) (長さ)	(5.5) (幅)	(0.9) (厚さ)	外湾刃半月形。 緑色片岩製		
13−14 SH1	鉇	(6.9) (長さ)	(1.3) (幅)	(0.4) (厚さ)			
15−1 289 SH2	壺	—	—	(5.7)	頸部より口縁部に向かって緩やかに外反する。 外：頸部に刺突文。 内：風化のため調整不明。	1mmの砂粒含む。 淡茶灰色	
15−2 290 SH2	壺	17	—	(4)	口縁部緩やかに大きく外反。端部わずかに上下に拡張する。 外：端面ナデ。頸部タテハケ。 内：口縁上部に波状文、頸部にかけて3条の凹線文。頸部ヨコハケ。	1mmの砂粒含む 赤茶色	
15−3 288 SH2	甕	19	—	(4.2)	くの字状に外反。端部はわずかに上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～3mm程度の砂粒含む。 茶灰色	
15−4 87 SH2P1	甕	14.6	—	(4)	口縁部くの字状に外反。端部は斜め上方に拡張する。 外：端面に2条の凹線文。頸部ナデ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1.5mmの砂粒含む。 橙褐色	
15−5 292 SH2	底部	—	4	(1.8)	外・内面とも風化のため調整不明。	1mm程度の砂粒を含む。 黄灰色	外面スス付着。
15−6 293 SH2	底部	—	5	(3.5)	外：底面ナデ。体部タテハケ。 内：ナデ。	1mm程度の白色砂粒を含む。 濃褐色	
15−7 88 SH2P1	底部	—	7	(2.4)	外：ナデ。 内：ヘラ削り。	1～2mmの砂粒含む。 茶褐色	
15−8 291 SH2	高杯	—	—	(4)	外・内面とも風化のため調整不明。	0.5mmの砂粒含む。 赤橙褐色	
15−9 SH2	石庖丁	(9.1) (長さ)	(4.3) (幅)	(0.6) (厚さ)	外湾刃半月形。 白雲母石英片岩製。		
17−1 SH3	甕	17	—	(2.3)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1.5mmの砂粒含む。 暗灰褐色	

17−2 308 SH3P1	底部	—	14	(2)	外：ナデ。 内：ナデ。	1～2㎜の砂粒含む。 明茶褐色	外面スス付着。
17−3 278 SH4	杯	13.6	—	(6.5)	外・内面ともに風化のため調整不明。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡黄色	内面スス付着。
17−4 279 SH4	甕	13.2	—	(3.8)	口縁部緩やかに外反。端部上下に拡張する。 外：端面ナデ。頸部ハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の砂粒含む。 淡橙色	
17−5 281 SH4	甕	18	—	(3)	口縁部くの字状に外反。端部上部に拡張する（やや内傾）。 外：端部ヨコナデ。 内：口縁部から頸部にかけてヨコナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
17−6 294 SH4	底部	—	4	(1.5)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜程度の砂粒含む。 黒茶色	外面スス付着。
17−7 283 SH4	底部	—	5.4	(2.5)	外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の白色砂粒含む。 淡橙褐色	
17−8 282 SH4	甕	15	—	(6.5)	口縁部くの字状に大きく外反。端部斜め上下に拡張する。 外：風化のため調整不明。 内：口縁部から頸部にかけてヨコナデ。	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。 橙色	
17−9 209 SH4	高杯	14.2	—	(7.1)	外：ナデ。一部にヘラミガキ痕あり。 内：ヘラミガキ。	1～2㎜の砂粒多く含む。 濃橙色	
17−10 280 SH4	器台	16.8	—	(5)	外・内面とも風化のため調整不明。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡橙色	
19−1 284 SH5	甕	20.6	—	(10.4)	外反する複合口縁。 外：口縁部ナデ。胴部ナデ。 内：風化のため調整不明。ナデか。	1.5～2㎜の砂粒含む。 暗褐色	
19−2 317 SH5	底部	—	6	(1.9)	外：ナデ。底面に指頭痕あり。 内：底面に指頭痕あり。	1㎜程度の白色砂粒含む。 黒茶色	
19−3 318 SH5	高杯	23	-	(2.4)	口縁部斜め上方に立ち上がり、端部は面をもつ。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	2㎜程度の砂粒含む。 橙色	
19−4 285 SH5		—	17.8	(3.4)	外・内面とも風化のため調整不明。	1㎜程度の砂粒含む。 橙色	
19−5 316 SH5溝		—	—	(8.5)	外：ナデか。 内：ヨコハケ。	1～2㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
19−6 287 SH5		—	—	(4.5)	円盤充填。 外：ナデ、ハケ目わずかに残る。 内：ナデか。	0.5㎜以下の乳白色砂粒含む。 淡橙色	
19−7 286 SH5		—	—	(4)	外：風化のため調整不明。 内：柱部に絞り目。	0.5～1㎜の砂粒含む。 橙色	
19−8 SH5	石庖丁	(4.4) (長さ)	(3.7) (幅)	(0.5) (厚さ)	外湾刃半月形か。 緑色片岩製。		

第5表　段状遺構出土遺物一覧表

挿図番号 図面番号 出土位置	器種	法量（単位：cm） （ ）内は残存値 口径	 底径	 器高	形態・調整（外・内面）	胎土・焼成・色調	備考
24−1 454 ST2	口縁部	19.6	—	(2.3)	端部わずかに斜め上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：ナデ。	1㎜以下の砂粒含む。 黒灰色	
24−2 457 ST2	甕	23.2	-	(2.8)	端部斜め下方に拡張する。 外：ナデ。 内：風化のため調整不明。	1㎜以下の砂粒含む。 黄褐色	
24−3 456 ST2	口縁部	20.8	—	(1.9)	わずかに拡張した口縁端部のみ残存。 外：端面ナデ。 内：ナデ。	2㎜以下の砂粒含む。 褐色	
24−4 515 ST2	底部	—	6.6	(2.5)	外：体部ナデ。底面ヘラ削り。 内：ナデか。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡黄褐色	
24−5 255 ST3	壺	27	—	(6)	端部大きく上方に拡張する。 外：端面に2段に渦巻状のスタンプ文。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒若干含む。 淡褐色	
24−6 ST3		—	—	(4.4)	拡張した口縁端部。 外：端面に2段に渦巻状のスタンプ文。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒含む。 黄橙色	
24−7 412 ST3	口縁部	20	—	(2)	端部わずかに上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡赤茶色	
24−8 243 ST3	甕	16	—	(5)	口縁部くの字状に外反し、端部にわずかに上方に拡張する。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	0.5㎜程度の白色砂粒多く含む。 橙褐色	
24−9 449 ST3P1		13	—	(6)	口縁部くの字状に外反し、端部わずかに上方に拡張する。 外：体部タテハケ。 内：ナデ。	精良。 黄橙色	
24−10 409 ST3	底部	—	9.8	(2.9)	外：タテハケ。 内：ナデ。	0.5㎜程度の砂粒多く含む。 淡橙色	外面スス付着。
24−11 242 ST3		—	5.2	(8.5)	外：タテ方向のヘラミガキ。 内：ナデ。	0.5㎜程度の白色砂粒多く含む。 淡褐色	
24−12 410 ST3	台部	—	—	(2.6)	台付土器の接合部。 外：ナデ。 内：上面、下面ともナデ。	0.5～2㎜の砂粒含む。 黄橙色	
24−13 254 ST3	高杯	—	—	(6)	エンタシス状の脚柱部。杯部は円盤充填。 外：ヘラミガキの後、一部にヨコ方向のハケ。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂若干含む。 淡褐色	
24−14 248 ST3		—	—	(10)	エンタシス状の脚柱部。屈曲して杯部、脚部へ続く。杯部の円盤充填の剥離痕あり。 外：タテ方向のヘラミガキ。 内：脚部ヘラ削り。絞り目あり。	1.5㎜程度の砂粒含む。 橙褐色	
24−15 250 ST3	器台	—	—	(18)	筒状の脚柱部から端部へひろがる。上下2段にスカシ孔。 外：タテハケの後、平行沈線文。 内：タテ方向のヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒含む。 黄橙色	
24−16 251 ST3		33	—	(5.7)	端部大きく上下に拡張する。 外：端部に鋸歯文。 内：ナデ。	1～3㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
24−17 256 ST3		31	—	(5.4)	端部大きく上下に拡張する。 外：端面に鋸歯文。 内：ナデ。	1～4㎜の砂粒含む。 橙褐色	

24−18 252 ST3	器台	33.4	−	(7.5)	端部大きく上方に拡張する。 外：端面に鋸歯文（鋸歯文内は格子文）。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂粒若干含む。 褐色	
24−19 249 ST3	器台	30	−	(8.5)	端部上下に拡張する。 外：端面に鋸歯文。 内：ナデ。	1～2㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
24−20 391 ST3	器台	−	25.4	(7.6)	ハの字状にひらく脚部。端部は上下に拡張する。 外：風化のため調整不明。 内：ヨコ方向のヘラ削り。端部ナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 褐色	
24−21 390 ST3	器台	−	32	(7)	弓なりにひろがる口縁部。端部上下に拡張する。 外：細かいタテハケ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1㎜の白色砂粒含む。 橙茶色	
25−1 399 ST3黒灰	壺	16.8	−	(7.8)	筒状の頸部から浅いくの字状に外反する口縁部。端部は大きく上方に拡張する。 外：端面に渦巻条のスタンプ文。頸部に3条の平行沈線文。 内：風化のため調整不明。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡褐色	
25−2 400 ST3黒灰	壺	13.8	−	(4.7)	端部に上下に拡張する。 外：端面に鋸歯文。頸部風化のため調整不明。 内：ナデか。	1～2㎜の砂粒多く含む。 淡赤橙色	
25−3 275 ST3黒灰	甕	15.6	−	(3.8)	口縁部くの字状に外反し、端部は上方に拡張する。 外：端面に5条の凹線文。 内：ナデ。	1～2㎜の白色砂粒多く含む。 淡褐色	
25−4 401 ST3黒灰	甕	11.8	−	(4.5)	口縁部緩やかに外反し、端部は上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1.5～2㎜の白色砂粒を含む。 淡黄褐色	
25−5 246 ST3黒灰	器台	−	24	(3.7)	浅いハの字状にひらく脚部。 外：端部付近に強いナデ。 内：ナデか。	1～2㎜の白色砂粒含む。 淡黄橙色	
25−6 245 ST3黒灰	器台	30	−	(3.8)	水平面から下垂する口縁部。 外：水平面は波状文の上に円形浮文。下垂面は5条の平行沈線文の上に円形浮文、沈線間に刻み目文。 内：ナデ。	0.5㎜以下の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
25−7 244 ST3黒灰	壺	13	−	(8)	頸部から緩やかにひろがる口縁部をもつ。端部はやや内側に拡張し面をもつ。 外：頸部タテハケ。頸部下方に2段に刻み目凸帯。口縁部端面に刻み目文。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の白色砂粒含む。 黄橙色	
25−8 247 ST3黒灰	高杯	−	−	(4)	脚柱部。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 黄橙色	
25−9 426 ST3黒灰	器台	−	23	13.9	緩やかなハの字状にひろがる脚部。端部は外側に拡張する。 外：タテハケの後、平行沈線文(上段11条残存、下段13条)。裾部に波状文。裾部拡張部端面ナデ。 内：タテハケの後ナデ。	0.5㎜程度の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
25−10 417 ST4	甕	13.6	−	(6.3)	口縁部くの字状に外反し、端部はわずかに上方に拡張する。 外：タテハケの痕跡あり。 内：風化のため調整不明。	0.5㎜程度の砂粒多く含む。 淡灰褐色	
25−11 505 ST7P3	壺	13	−	(3.5)	口縁部大きく外反し、端部上方に拡張する。 外：端面に浅い3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
25−12 437 ST7P3	蓋	11.6	1.8 (つまみ)	6.5	蓋部は偏平で、縦長いつまみをもつ。 外：ナデ。 内：ヘラ削り。	3㎜以下の砂粒含む。 暗茶褐色	

第6表　貯蔵穴出土遺物一覧表

挿図番号 図面番号 出土位置	器種	法量（単位：㎝） （　）内は残存値 口径	底径	器高	形態・調整（外・内面）	胎土・焼成・色調	備考
27−1 363 TZ1	壺	17.4	−	(4.3)	頸部から口縁部に向かって緩やかに外反し、端部上下に拡張する。 外・内面とも風化のため調整不明。	1～2㎜の白色砂粒多く含む。 明黄橙色	
27−2 362 TZ1	底部	−	9	(3)	外：ナデ。 内：ヘラ削り。	2㎜程度の砂粒含む。 黒茶色	
27−3 361 TZ1	底部	−	6	(4.5)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
27−4 111 TZ1	高杯	10.2	−	(2.7)	浅い皿状の杯部。口縁端部は丸くおさめる。 外：ナデか。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒含む。 黄橙色	
27−5 159 TZ1	高杯	9	16	0.5	杯部は小型の椀状、脚柱部から裾部へは大きくひらく。 外：杯部ナデ。脚部わずかにヘラミガキが残る。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む 黄橙色	
27−6 158 TZ1	器台	20.4	15.4	15.1	脚柱部から緩やかに外反し、端部斜め上方にのばす。裾部はハの字状にひらく。 外：裾部に3方向のスカシ孔。口縁部から脚柱部へヘラミガキ。裾部ナデ。 内：ナデ。	1～2.5㎜の砂粒多く含む。 淡黄橙色	
27−7 160 TZ1	鼓形器台	20.4	19	12.8	器受部と脚台部は大きく発達し、筒部は太く短い。 外：全面ナデ。 内：器受部はヨコ方向のヘラミガキ。脚台部はヘラ削りか。	1.5㎜程度の砂粒含む。 赤褐色	外・内面丹塗り。
27−8 112 TZ2	甕	17.6	−	(4.4)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1.5㎜程度の白色砂粒含む。 黒灰色	
27−9 114 TZ2	高杯	−	18	(1.6)	外：裾端部付近に爪形文を2段に施す。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒若干含む。 黄橙色	
27−10 117 TZ3	甕	14.8	−	(4.4)	口縁部くの字状に外反し、端部は上下に拡張する。 外：端面4条の凹線文。TZ4の土器と同一個体。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の砂粒多く含む。 淡橙色	
27−11 116 TZ3	甕	14	−	(4.4)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡橙色	
27−12 118 TZ3	甕	21.6	−	(3.8)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡黄褐色	
27−13 119 TZ3	甕	32	−	(4.5)	口縁部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～2.5㎜の白色砂粒多く含む。 淡褐色	
27−14 115 TZ3	蓋	7.8	2.8 (つまみ)	(5.3)	外：ナデ。 内：ナデ。	1～2㎜の白色砂粒多く含む。 淡橙色	
27−15 121 TZ4	甕	14.8	−	(6)	複合口縁。 外：端面に8条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜以下の砂粒多く含む。 淡赤橙色	
27−16 120 TZ4	高杯	25.8	−	(4.2)	口縁部大きく外反し、端部は丸くおさめる。 外・内面とも風化により調整不明。	精良。 白黄色	
27−17 155 TZ5	甕	14.8	−	(4)	やや外反する複合口縁をもつ。 外：端面ナデ。 内：口縁部ナデ。頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄色	
27−18 156 TZ5	甕	16.6	−	(5.4)	口縁部緩やかに外反し、端部上方に拡張する。 外：端面に浅い4条の凹線文。頸部タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の砂粒含む。 褐色	外面スス付着。

27−19 157 TZ5	甕	22	−	(6.3)	口縁部緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。器壁薄い。 外：風化のため調整不明。 内：頸部以下ヘラ削りか。	1～1.5㎜の砂粒含む。 淡黄色	外面スス付着。
27−20 154 TZ5	高杯	18.8	−	(9.1)	杯部は浅く、端部は丸くおさめるのみ。短い脚部から裾部へ短くひらく。 外・内面とも風化のため調整不明。	2㎜程度の白色砂粒含む。 黄橙色	
27−21 TZ4	くぼみ石	9.8 (長径)	8.8 (短径)	4.6 (厚さ)	石の中心に長円形のくぼみをもつ（くぼみ長径4㎝、短径2.3㎝）。		
31−1 14 TZ7	甕	11.6	−	(2.1)	口縁部くの字状に外反し、端部下方に拡張する。 外：端面に2条の凹線文。 内：ナデ。	1㎜以下の砂粒含む。 淡橙色	
31−2 15 TZ7		13.8	−	(3)	口縁部くの字状に外反し、端部は拡張せず面をもつ。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 黒褐色	
31−3 12 TZ7		13.6	−	(4)	外・内面とも風化のため調整不明。	2㎜程度の砂粒多く含む。 黄褐色	
31−4 13 TZ7		12.6	−	(8.5)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。体部外面ハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 明赤橙色	
31−5 161 TZ7	壺	12.8	−	(11.4)	体部から逆ハの字状に屈曲してひらく口縁部。端部は下方へ拡張する。 外：タテハケ。頸部に刺突文を巡らし、その直上にヘラ記号。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	1～2㎜の白色砂粒含む。 橙色	
31−6 10 TZ7	甕	15.8	−	(12)	口縁部上方に大きく拡張する。 外：口縁端部ナデ。体部タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～1.5㎜の砂粒含む。 淡灰褐色	
29−1 23 TZ8	壺	13.2	−	(8.0)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に6条の凹線文。ハケの後、ナデ。肩部に列点文 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 黄褐色	
29−2 25 TZ8		15.2	−	(4.8)	口縁部緩やかに外反し、端部上下に拡張する。 外：端面3条の凹線文を施した後、鋸歯文。頸部に2条の沈線。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒含む。 淡橙色	
29−3 29 TZ8	甕	15	−	(3)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡橙色	
29−4 26 TZ8		13.8	−	(3.4)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む 淡褐色	
29−5 36 TZ8		13.8	−	(3.7)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。頸部にスカシ孔あり（1孔残存）。 外：端面に7条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡赤褐色	
29−6 27 TZ8		15.6	−	(3.5)	口縁部緩やかに外反。端部上方に拡張する。 外：端面に7条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡橙色	
29−7 32 TZ8		13	−	(3.8)	口縁部くの字状に外反し、端部上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡橙褐色	
29−8 24 TZ8		13	−	(3.4)	口縁部緩やかにくの字状に外反。端部上下に拡張する。 外：端面に6条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 赤茶色	
29−9 28 TZ8		17.8	−	(2.6)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 淡灰褐色	
29−10 31 TZ8		17.6	−	(3.4)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡橙色	
29−11 30 TZ8		14.2	−	(3.5)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に7条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 橙色	
29−12 162 TZ8		14.4	3.8	15.9	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面に5条の凹線文。体部ハケの後、ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒多く含む。 淡橙色	
29−13 19 TZ8		12	−	(4.2)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒含む 灰色	
29−14 20 TZ8		15	−	(6.3)	口縁部外側上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2㎜の砂粒含む。 橙褐色	口縁部外面スス付着。
29−15 45 TZ8		15.6	−	(9.8)	口縁部くの字状に外反し、端部は外上方に拡張する。 外：端面に2条の凹線文。体部タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	
29−16 41 TZ8	壺	17	−	(6)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～1㎜の白色砂粒多く含む。 暗茶褐色	
29−17 164 TZ8	台付甕	12	7.8	11.5	頸部の屈曲部からくの字状に外反する口縁を持ち、端部に外上方に拡張する。台部は太く短い。頂から裾に向かって大きく開く。 外：口縁端面ナデ。体部、台部ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
29−18 163 TZ8	甕	14.2	2	15.6	口縁端部外側上方に拡張する。 外：端面ナデ。体部下半タテハケ、上半部ヨコハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～1.5㎜の砂粒含む。 白黄色	
29−19 46 TZ8		−	4.4	(9.4)	外：ハケの後、ナデ。 内：放射状にヘラ削り。底部に指頭痕あり。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	15と同一個体か。
29−20 43 TZ8	底部	−	11	(6)	外：ナデ。 内：ナデ。	2～3㎜の砂粒含む。 黄橙色	
29−21 360 TZ8		−	3	(11.5)	外：体部上半は斜め、横方向のハケ。下半部はタテハケ。 内：ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 黒灰色	
29−22 33 TZ8		−	5	(6.7)	外：体部タテハケ。底面ナデ。 内：タテ方向のヘラ削り。	1～5㎜の砂粒含む。 暗褐色	
29−23 359 TZ8					丸底。 外：タテハケ。 内：ヘラ削り。	1～1.5㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	
29−24 21 TZ8	高杯	24.4	−	(4.7)	口縁部大きく外反し、端部は丸くおさめる。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	1㎜程度の砂粒含む。 灰黄褐色	
29−25 22 TZ8		−	−	(5)	外・内面とも風化のため調整不明。	精良。 淡黄褐色	
29−26 37 TZ8		−	10	(5.8)	脚柱部から裾部にかけて緩やかに外反する。裾部に推定5方向にスカシ孔。外：ヘラミガキ。 内：ナデ。絞り目あり。	0.5㎜程度の白色砂粒含む。 白橙色	
29−27 18 TZ8		−	9	(4.3)	裾部に向かって緩やかに外反する。 外：ヘラミガキ。 内：ナデ。絞り目あり。	0.5～1㎜の砂粒含む。 白橙色	

29－28 40 TZ8	高杯	—	—	（5）	外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 赤褐色	外面丹塗り。
29－29 35 TZ8	高杯	—	12.2	（4.7）	脚柱部から裾部にかけやや屈曲してひらく。 外：ハケの後、ヨコ方向のヘラミガキ。 内：ヨコ方向のヘラミガキ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡褐色	外面丹塗り。
29－30 39 TZ8	高杯	—	19	（4）	外：ナデか。裾部に1箇所穿孔あり。 内：裾部にヨコ方向のヘラ削り。	1㎜以下の砂粒含む。 淡黄褐色	
29－31 38 TZ8	高杯	—	14.8	（3.8）	外：ナデ。 内：ナデ。ヘラミガキ痕あり。	0.5㎜程度の白色砂粒含む。 淡橙色	
29－32 TZ8	刀子？	（3.3） （長さ）	（1.3） （幅）	（0.3） （厚さ）			
31－7 148 TZ9	口縁部	16	—	（2.5）	口縁端部下方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：ハケの後、ナデ。	1.5㎜程度の白色砂粒含む。 淡褐色	
31－8 152 TZ9	甕	18	—	（3.5）	口縁部緩やかに外反。端部はほとんど拡張しない。 外：頸部タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り	1～2㎜の砂粒含む。 黒灰色	外面スス付着。
31－9 146 TZ9	甕	13.2	—	（7）	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。体部外面タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡褐色	
31－10 147 TZ9	甕	11	—	（4.5）	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1㎜程度の砂粒含む。 赤褐色	
31－11 151 TZ9	鉢	11.8	—	（3.6）	口縁端部上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5㎜以下の白色砂粒含む。 淡褐色	
31－12 150 TZ9	底部	—	5	（5）	外：タテハケ。 内：ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
31－13 145 TZ9	器台	30	—	（11.8）	筒部から大きく開く口縁部をもち、端部拡張する。筒部中心に復元径2.6㎝のスカシ孔。 外：端面に鋸歯文。筒部ハケの後ナデ。 内：ヨコハケの後ナデ。	1㎜程度の白色砂粒多く含む。 橙色	口縁部外面スス付着。
31－14 9 TZ10	甕	12.6	—	（4.6）	口縁部緩やかに外反し、端部は上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文を施す。体部ハケ。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	1.5～2㎜の砂粒を含む。 橙褐色	口縁部外面スス付着。
31－15 269 TZ10	甕	12.4	—	（3.7）	複合口縁。 外：端面ナデ。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 淡黄色	
31－16 268 TZ10	椀	7.4	2.8	6.9	底部から若干膨らんで口縁部に至る。端部は丸くおさめる。 外：タテハケ。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 黒灰色	外面スス付着。
31－17 270 TZ10	底部	—	5.9	（3.4）	外：体部及び底面にハケ。 内：ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
31－18 274 TZ10	底部	—	5.4	（6.5）	外：粗いハケ。 内：一部に外面のものよりも細かいハケ残存。	0.5㎜程度の砂粒多く含む。 淡橙色	
31－19 271 TZ10	器台？	24	—	（2.3）	外：端部のみ残存。鋸歯文。 内：ナデ。	0.5㎜程度の砂粒含む。 黄橙色	
31－20 124 TZ11	甕	15.2	—	（3.5）	口縁部緩やかに外反し、端部上方に拡張する。 外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 白黄色	内面スス付着。
31－21 122 TZ11	甕	18	—	（4.5）	斜め上方にのびる複合口縁。 外・内面とも風化のため調整不明。	1～1.5㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
31－22 123 TZ11	甕	22.8	—	（3.6）	口縁部くの字状に外反し、端部下方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～1.5㎜の砂粒多く含む。 白褐色	
33－1 305 TZ13	甕	30	—	（2.4）	口縁端部下方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文を残す。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 赤褐色	
33－2 304 TZ13	甕	30	—	（4.5）	口縁部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：風化のため調整不明。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡黄色	
33－3 306 TZ13	底部	—	5	（1.9）	外：ヘラミガキか。 内：ヘラ削り。	1㎜程度の白色砂粒多く含む。 褐色	
33－4 300 TZ14	底部	—	8.2	（4.5）	外：ヘラミガキ。 内：ヘラ削り。	1.5㎜程度の白色砂粒含む。 黄褐色	外面スス付着。
33－5 339 TZ15	壺	—	—	（4.3）	頸部浅いくの字状に屈曲する。 外：頸部から体部にかけてタテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 褐色	外面スス付着。
33－6 338 TZ15	甕	12.8	—	（5.5）	口縁部緩やかに外反する。端部はほとんど拡張しない。 外：端面に2条の凹線文がわずかに視認できる。体部タテハケ。 内：屈曲部よりやや下方にヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡橙色	外面スス付着。
33－7 44 TZ15	甕	15.2	—	（7.5）	口縁部くの字状に外反し、端部下方に拡張する。 外：風化のため調整不明。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	
33－8 49 TZ15	鉢	11.8	—	（4.5）	口縁部くの字状に外反し、端部上下に拡張する。 外：体部タテハケ。 内：頸部直下までヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒含む。 淡黄褐色	
33－9 47 TZ15	甕	14.8	—	（3.7）	複合口縁。 外：端面に5条の凹線文。 内：口縁部ヨコ方向のヘラミガキ。頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒含む 淡橙色	
33－10 51 TZ15	底部	—	6	（6.5）	外：タテハケ。 内：タテ方向のヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡褐色	
33－11 337 TZ15	甕	17	—	（6.9）	口縁部くの字状に外反し、端部外側上方に拡張する。 外：端面ナデ。体部ヘラミガキ。 内：口縁部横方向のヘラミガキ。頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡褐色	外面スス付着。
33－12 341 TZ15	高杯	21	—	（2.1）	ラッパ状に開く形状。端部は丸くおさめる。 外：ヨコ方向のヘラミガキ。 内：ヨコ方向のヘラミガキ。	0.5㎜以下の砂粒含む。 淡黄褐色	
33－13 48 TZ15	高杯	26.6	15.5	18.5	杯部からやや外反気味に直立する口縁部をもち、筒状の脚柱部から屈曲して裾部へ向かう。 外：杯部、裾部タテハケ、脚柱部ヘラミガキ、口縁部の上下2段に渦巻状のスタンプ文。 内：ナデか。	精良。 赤褐色	外・内面丹塗り。
33－14 340 TZ15	高杯	—	15.4	（2.9）	浅いハの字状に開く裾部。裾付近に90°おきに2方向にスカシ孔。復元4方向か。 外・内面とも風化のため調整不明。	0.5㎜程度の砂粒含む。 黄橙色	
33－15 342 TZ15	器台	39.4	—	（4.8）	口縁部上下に拡張する。 外：端面に渦巻状のスタンプ文を2段にわたり施す。筒部に細かいタテハケ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 橙色	

34−1 307 TZ17	椀?	13.8	—	(3.7)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面は浅い凹線文（ナデか）。 内：ナデ。	1～1.5mmの砂粒多く含む。 灰黄褐色	
34−2 207 TZ18	壺	14.2		(10)	筒状にのびる頸部から弓なりに外反する口縁部を持つ。端部上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。頸部ヨコ方向のヘラミガキ。肩部に細かい刺突文。 内：頸部ヨコ方向のヘラミガキ。肩部以下ヘラ削り。	1mm以下の白色砂粒多く含む。 淡黄橙色	
34−3 201 TZ18		14.3	—	(7.5)	口縁端部わずかに上下に拡張する。 外：端面に2条の浅い凹線文。肩部に刻み目文。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2mmの砂粒含む。 赤褐色	外・内面丹塗り。
34−4 214 TZ18		14	—	(9.3)	頸部から緩やかに外反する口縁部。端部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。胴部ヘラミガキ。 内：ヘラミガキ。	1～1.5mmの白色砂粒含む。 淡橙色	
34−5 215 TZ18	甕	15		(5.5)	口縁端部斜め上下に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。体部ハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2mmの砂粒含む。 淡黄橙色	
34−6 208 TZ18		14.8	—	(6.5)	口縁端部斜め上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。体部ヘラミガキ。 内：頸部より若干下方にヘラ削り。	1mm程度の白色砂粒含む。 黒褐色	
34−7 204 TZ18		12.8	—	(5)	口縁部浅いくの字状に外反し、端部斜め下方に拡張する。 外：端面ナデ、黒化のため体部の調整不明。 内：頸部直下までヘラ削り。	1～1.5mmの砂粒多く含む。 橙褐色	
34−8 195 TZ18		12	4	9.1	口縁端部わずかに拡張する。 外：端面ナデ。体部タテハケ。 内：ハケ状のものでナデている。	0.5～1mmの砂粒含む。 淡黄色	
34−9 205 TZ18	鉢	16.8	—	(7)	口縁部下方に拡張する。 外：端面ナデ。体部タテハケ。頸部に細かい刺突文。 内：頸部より若干下方にヘラ削り。	1.5mm程度の白色砂粒含む。 淡黄橙色	
34−10 206 TZ18	甕	15	—	(8)	口縁部ほとんど拡張しない。 外：端面ナデ。体部ハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の白色砂粒含む。 淡褐色	外面全体にスス付着。
34−11 202 TZ18		13.2	—	(6)	口縁端部斜め上下に拡張する。 外：端面はナデ。体部細かいハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の砂粒含む。 淡灰褐色	口縁部外面スス付着。
34−12 218 TZ18		15.8	—	(5)	複合口縁。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の砂粒含む。 淡黄橙色	外面丹塗りの痕跡あり。
34−13 217 TZ18		18.4	—	(5.8)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に2条の凹線文。 内：ナデ。	1mm程度の白色砂粒含む。 黄橙色	
34−14 203 TZ18		15	—	(5.2)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：黒化のため調整不明。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
34−15 219 TZ18	壺	15.4	—	(4)	やや外反ぎみの口縁部。 外：端部に渦巻状のスタンプ文を施す。 内：ナデ。	1mm程度の砂粒含む。 淡黄橙色	
34−16 197 TZ18	蓋	11	4.5 (つまみ)	6.5	外：つまみ部分はタテ方向、傘部分は不定方向のヘラミガキ。 内：ナデ。	1mm程度の白色砂粒含む。 褐色	
34−17 200 TZ18	高杯	14.8	—	(8.5)	杯部浅い椀状にひらく。端部は丸くおさめる。脚部に5方向のスカシ孔。 外：ヘラミガキ。 内：杯端部ナデ。杯部ヘラミガキ。	1mm程度の砂粒若干含む。 黄橙色	外面スス付着。
34−18 212 TZ18		—	—	(8)	脚柱部から上下に緩やかに外反する。下方に上下2段にスカシ孔あり。 外：ヘラミガキ。 内：ナデ。	1mm以下の白色砂粒若干含む。 赤茶褐色	外面丹塗りの痕跡あり。
34−19 220 TZ18		—	—	(6)	スカシ孔あり。 外：ヘラミガキ。 内：ナデ。	精良。 淡黄橙色	
34−20 211 TZ18		—	15.2	(2.6)	浅いハの字状に広がる。タテハケ。上下2段に互い違いに円形のスカシ孔（復元すると8方向）。 外：端部に強いナデ。 内：ナデ。	1mm程度の白色砂粒若干含む。 淡赤褐色	
34−21 210 TZ18		—	23	(6)	脚裾部に広がる途中に一度屈曲してさらに外反する。2段に互い違いにスカシ孔あり。 外：ヘラミガキ。屈曲部分には突帯を巡らす。突帯にはハケによる細かい刻み目文。 内：ナデ。	1mm程度の砂粒若干含む。 黄橙色	
34−22 196 TZ18	器台	—	12.6	(9)	ハの字状に上下に広がる。裾部付近に5方向にスカシ孔。 外：全体タテ方向のヘラミガキ。 内：裾部はヨコ方向のヘラミガキ。其部ナデ。	1mm以下の砂粒含む。 淡橙色	
34−23 199 TZ18		—	12.4	(8.5)	外：受部ナデ。脚部タテ方向のヘラミガキ。裾部ナデ。 内：受部から筒部にかけてナデ。裾部ヘラミガキ。	1mm程度の白色砂粒若干含む。 淡黄橙色	
34−24 198 TZ18	高杯	—	13.2	(5)	ハの字状にひらく。 外：タテ方向のヘラミガキの後、裾部にヨコ方向のヘラミガキ。裾端部上下に拡張。 内：ヘラミガキ。	0.5～1mmの砂粒含む。 淡橙色	
37−1 60 TZ19	壺	—	—	—	外：ハケの後、10～11条の櫛描波状文を2段、その間に4～6条の櫛描直線文を2段に施す。 内：ナデ。	0.5～1mmの白色砂粒含む。 黄橙色	
37−2 59 TZ19	甕	14.6	—	(5)	口縁部緩やかに外反し、端部下方に拡張する。 外：頸部ハケ。 内：頸部直下はヨコ方向のヘラミガキ、以下はヘラ削り。	1mm程度の白色砂粒含む。 淡黄橙色	
37−3 58 TZ19		17.4	—	(3.5)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒含む。 淡赤褐色	内面スス付着。
37−4 54 TZ19		11.6	—	(3.3)	外：口縁部端面に3条の凹線文。 内：黒化のため調整不明。	0.5～1.5mmの砂粒含む。 淡灰褐色	
37−5 334 TZ20	壺	14	—	(2.8)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に凹線文（推定2条）。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒含む。 淡黄色	
37−6 57 TZ19	口縁部	17.6	—	(3.2)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に5条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1.5mmの砂粒含む。 淡黄橙色	
37−7 52 TZ19	甕	15	—	(7.5)	外：口縁部ヨコナデ。体部黒化のため調整不明。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2mmの砂粒多く含む。 淡橙色	
37−8 53 TZ19	底部		5.6	(3.2)	外：タテハケ。 内：ヘラ削りか。	1～2mmの砂粒多く含む。 淡黄色	外面スス付着。
37−9 56 TZ19	甕	19	-	(19.7)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。体部タテハケ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1mmの砂粒含む。 淡黄褐色	体部下半にスス着。
37−10 336 TZ20	高杯	--	—	(2.3)	外：杯底部にわずかにヘラミガキ痕。 内：ナデ。	1mm程度の砂粒含む。 淡黄橙色	
37−11 50 TZ19	底部	—	13	(9)	外：体部ハケか。底面ヘラミガキ。 内：風化のため調整不明。	1～3mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	外面スス付着。
38−1 187 TZ21	壺	11	—	(4)	口縁部くの字状に外反する。 外：端部は強いナデ。 内：ナデ。	0.5～2mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	

38−2 179 TZ21	壺	12.8	—	(3.9)	頸部上方に拡張する。 外：端面に浅い凹線文。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡赤褐色	
38−3 3 TZ21		15.6	—	(10.5)	体部からくの字状に外反し、端部は上方に拡張する。 外：端面に擬凹線文。体部外面ヘラミガキ。肩部付近に刺突文。 内：頸部から体部にかけてナデ、体部ヘラ削り。	1㎜程度の砂粒含む。 黄橙色	
38−4 178 TZ21		19.4	—	(8.7)	直線的に外傾上方にのびる複合口縁。 外：端面はナデ、頸部ナデ。頸部に刺突文。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	
38−5 186 TZ21		14	—	(5)	口縁部緩やかに外反し、端部は強いナデにより拡張する。 外：体部タテハケ。 内：屈曲部付近にハケ。頸部以下ヘラ削り。	0.5～3㎜の砂粒多く含む。 赤褐色	
38−6 189 TZ21		17.2	—	(2.5)	口縁端部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ヘラミガキがわずかにみられる。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 暗茶褐色	
38−7 194 TZ21		20.6	—	(31)	外傾上方にのびる複合口縁。 外：端面に4条の凹線文を施し、屈曲部付近に円形のスタンプ文。頸部ナデ。頸部から体部へ膨らむ屈曲部分に刺突文、その下にS字状のスタンプ文。体部最大径付近はヨコ方向、下半部はタテ方向のヘラミガキ。 内：口縁部ヨコ方向のヘラミガキ。頸部ナデ。体部ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡黄橙色	
38−8 183 TZ21	壺？	14.4	—	(2.8)	口縁端部わずかに上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：ナデ。	0.5㎜程度の砂粒若干含む。 黄橙色	
38−9 2 TZ21	甕	15.2	—	(5.3)	口縁部くの字状に外反する。端部上方に拡張する。 外：端面に6条の凹線文を施す。 内：頸部以下ヘラ削り。	1.5㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	
38−10 188 TZ21		13	—	(3.1)	口縁端部斜め上方に若干拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 淡黄橙色	
38−11 185 TZ21		15.6	—	(5.7)	口縁部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ハケナデ。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 淡黄橙色	
38−12 184 TZ21		25.4	—	(6.3)	口縁部緩やかに外反し、端部はほとんど拡張しない。 外：風化のため調整不明。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
38−13 1 TZ21	鉢	15.8	5.8	7	口縁部斜め上方に屈曲し、端部は丸くおさめる。 外：体部ハケ。 内：放射状にヘラミガキ。	0.5～3㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
38−14 181 TZ21	高杯	14.6	—	(7.7)	脚柱部から緩やかに裾部へ広がる。 外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～2㎜の砂粒含む。 淡黄橙色	
38−15 333 TZ22	甕	17.2	—	(3.8)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
38−16 332 TZ22		20	—	(3.5)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 淡黄橙色	
38−17 TZ23	口縁部	—	—	(3.2)	外：渦巻状のスタンプ文。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 橙色	
38−18 108 TZ23	台部	—	5.4	(3.1)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒含む。 黄橙色	
38−19 107 TZ23	甕	13.8	—	(19)	口縁部くの字状に外反し、端部は拡張せず丸くおさめる。 外：頸部から体部全体にハケ。 内：口縁部にヨコハケ。頸部以下ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	体部外面スス痕。
38−20 109 TZ23	口縁部	22	—	(4.5)	斜め上方にのびる複合口縁。 外：端面に1条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒含む。 白橙色	外面スス付着。
38−21 110 TZ23	甕	17.6	—	(14)	外反する複合口縁。 外：端面はナデ。体部外面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1～2㎜の砂粒多く含む。 黄橙色	
39−1 176 TZ24		12.2	—	(3)	口縁端部わずかに拡張する。 外：口縁部端面に2条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 橙褐色	
39−2 171 TZ24		15	—	(4.6)	口縁端部内傾ぎみに拡張する。 外：端面に2条の凹線文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 黄褐色	
39−3 167 TZ24	壺	21.2	—	(6.9)	頸部から緩やかに外反する口縁部。端部は斜め上下に拡張する。 外：口縁部端面に5条の凹線文。頸部風化のため調整不明。 内：風化のため調整不明。	0.5～1㎜の砂粒含む。 橙褐色	
39−4 177 TZ24	底部	5	—	(2.7)	外：体部タテハケ。底部ナデ。 内：ナデ。	0.5～2.5㎜の砂粒多く含む。 赤橙色	
39−5 173 TZ24		—	6.6	(3.3)	外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
39−6 175 TZ24	蓋	10.	41.9 (つまみ)	2.8	指でつまみ上げた扁平なつまみをもつ。残存部で2箇所に貫通した孔あり。 外：ナデ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1㎜の砂粒多く含む。 淡褐色	
39−7 168 TZ24	器台	—	29	(12.8)	ハの字状に緩やかにひらく。端部は強いナデにより屈曲して外反する。 外：タテハケの後、ヘラ描の沈線を10条施す（残存）。裾最下部にはやや粗いタテハケ。 内：タテ方向のヘラ削りの後、端部付近にヨコ方向のヘラ削り。端部ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
39−8 166 TZ24	高杯	21.2	5.7	13.2	やや深い皿状の杯部。口縁部外反し、端部は丸くおさめる。脚部は短く、裾部にあまり大きくひらかない。 外：口縁部ナデ。それ以外は風化のため調整不明。 内：口縁部ナデ。脚部ヘラ削り。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡橙褐色	口縁部外・内面スス付着。
39−9 165 TZ24		23	—	(4.9)	浅い皿状の杯部。口縁部大きく外反し、端部を水平方向に拡張する。脚部との接合は円盤充填。 外：拡張した口縁端部上面に9条の凹線文。口縁部ナデ。杯部タテハケ。 内：ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 黄橙色	
39−10 TZ24	壺	17	11	55	頸部から弓なりに外反する複合口縁をもち、端部は強いナデにより上下に拡張。体部はやや肩の張った形状。頸部から体部に至る屈曲部分に刻み目のある突帯を貼り付ける。 外：頸部タテ方向のヘラミガキ。体部上半ヨコ方向、下半タテ方向のヘラミガキ。底部ヘラミガキ。 内：頸部、体部上半ヨコ方向のヘラミガキ。下半ナデ。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡茶褐色	体部外面スス痕。
41−1 142 TZ25		16	—	(4.7)	口縁端部わずかに拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡黄色	
41−2 143 TZ25	甕	16.4	—	(2.2)	口縁部くの字状に外反し端部わずかに下方に拡張する。 外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 橙色	
41−3 140 TZ25	高杯	16.2	—	(11)	杯部浅く、口縁部は拡張し、面を持つ。脚部は脚柱部から裾部に向かってなだらかに広がる。杯部と脚部の接合は円盤充填。脚部と裾部にそれぞれ4（復元）、7方向のスカシ孔。 外：杯部ナデ、ヘラミガキ。脚部にヘラ描きの沈線文巡らし、その下に櫛描文施す。 内：杯部ヘラミガキ、脚部ナデ。	0.5～1㎜の砂粒含む。 赤橙色	

41−4 502 TZ26	壺	15	—	(2.6)	長頸壺の口縁部。端部わずかに上方に拡張する。 外：ナデ。 内：ナデ。	1mm程度の砂粒含む。 赤茶色	外・内面丹塗り。
41−5 503 TZ26	甕	15.8	—	(5.2)	口縁部くの字状に外反する。端面ほとんど拡張しない。 外：端面に3条の凹線文。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	1mm程度の砂粒多く含む。 黒灰色	
41−6 501 TZ27		13.8	—	(3)	端部わずかに下方に拡張する。 外：ナデ。 内：ナデ。	1～1.5mmの砂粒含む。 淡黄橙色	
41−7 126 TZ28	壺	18	—	(9.1)	口縁部は頸部から弓なりに外反し、端部上下に拡張。 外：端面に4条の凹線文。頸部タテハケの後、斜め方向にヘラミガキ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 淡黄橙色	
41−8 500 TZ28	鉢	10.6	—	(4)	口縁部くの字状に外反し、端部わずかに拡張する。 外：ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	1mm程度の白色砂粒含む。 黒褐色	
41−9 264 TZ29	壺	13	—	(4.9)	口縁部弓なりに外反し、端部わずかに拡張する。 外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 赤褐色	
41−10 265 TZ29	甕	14	—	(2.9)	口縁部くの字状に外反し、端部わずかに斜め上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 黄橙色	
41−11 262 TZ29	壺	14	—	(5.4)	口縁端部上下に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。頸部ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	口縁部外面スス付着。
41−12 258 TZ29	底部	—	6	(3.6)	外：ナデ。 内：ナデ。指頭痕あり。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 赤褐色	
41−13 263 TZ29	甕	14	—	(7.3)	口縁端部上方に拡張。 外：端面に2条の凹線文を施す。体部ヘラミガキ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 赤茶色	
41−14 257 TZ29		14.6	—	(14.8)	口縁端部斜め上下に拡張する。体部球形に膨らむ。 外：口縁部端面ナデ。体部タテハケ。 内：頸部よりやや下方からヘラ削り。	0.5～2.5mmの砂粒多く含む。 赤茶色	
41−15 260 TZ29	高杯	—	15.2	(4.3)	浅いハの字状に裾部に向かってひろがる。端部は強いナデにより下方に拡張する。 外：ナデか。 内：ヘラ削り。端部ナデ。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 淡褐色	
41−16 261 TZ29		—	17.4	(3.7)	ハの字状に裾部へ向かってひろがる。端部は強いナデにより面をもつ。裾部付近にスカシ孔を2個穿つ。 外：脚部ハケ。端部ナデ。 内：ヘラ削り。	0.5～2mmの砂粒多く含む。 黒灰色	
41−17 259 TZ29	台部	—	4	(2.3)	ハの字状に小さくひらく台部。 外：ナデ。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡黄橙色	
43−1 327 TZ32	壺	12.8	—	(6.6)	口縁部弓なりに外反し、端部拡張せず面をもつ。 外：頸部ハケ。口縁部端面ナデ。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒含む。 黄橙色	
43−2 328 TZ32	甕	8.8	—	(6.7)	口縁端部わずかに拡張する。体部は球形。 外：端面ナデ。頸部ナデ。体部タテ方向のヘラミガキ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～2mmの砂粒多く含む。 淡黄橙色	
43−3 329 TZ32		15	—	(5.3)	口縁部緩やかに外反し、端部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡灰褐色	
43−4 17 TZ32		13.2	—	(5.3)	口縁部くの字状に外反。端部は上方に拡張する。 外：ナデ。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	1～2mmの砂粒含む。 橙褐色	
43−5 326 TZ32	口縁部	13	—	(3.1)	口縁端部斜め上下に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ナデ。	0.5mm程度の砂粒多く含む。 淡褐色	
43−6 331 TZ32	底部	—	6.6	(2.9)	外：ナデ。 内：ナデ。	0.5mm程度の砂粒含む。 淡黄褐色	
43−7 11 TZ32	鉢	11.6	—	(11.7)	口縁部緩やかに外反。端部は上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。体部ハケ。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。指頭痕あり。	0.5～2mmの砂粒含む。 黄橙色	
43−8 7 TZ32		15.4	—	(8)	口縁部緩やかに外反。端部はやや下方に拡張。 外：肩部はハケの後ナデ。　体部最大径付近はヘラミガキ。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	0.5～2mmの砂粒多く含む。 黄橙色	体部外面スス付着。
43−9 5 TZ32	底部	—	4.4	(10.2)	外：タテハケ。 内：ナデか。	1.5～2mmの白色砂粒含む。 淡黄褐色	
43−10 8 TZ32	甕	—	—	(11.5)	外：風化のため調整不明。 内：ヘラ削り。	2mm程度の砂粒含む。 淡黄褐色	
43−11 4 TZ32		37.4	—	(20)	外：頸部付近ハケ後、ヨコ方向のヘラミガキ。体部はタテ方向のヘラミガキ。 内：口縁部から頸部にかけヨコ方向のヘラミガキ。体部はタテ方向のヘラミガキ。	1～2mmの砂粒多く含む。 灰黄橙色	
43−12 325 TZ32	高杯	20	—	(4.5)	口縁端部外側に拡張する。 外：ナデ。口縁拡張部上面に1条の凹線文。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	
43−13 323 TZ33	甕	15	—	(3.8)	口縁部くの字状に外反し、端部上下に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。体部風化のため調整不明。 内：風化のため調整不明。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 黄橙色	
43−14 322 TZ33		14	—	(5.7)	口縁端部斜め上下にわずかに拡張する。 外：端面ナデ。体部風化のため調整不明。 内：頸部よりやや下方にヘラ削り。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡赤褐色	
43−15 319 TZ33	底部	—	6.4	(5.1)	外：細かいタテハケ。 内：ナデ。	0.5～2mmの砂粒含む。 橙褐色	
43−16 320 TZ33		—	7.2	(3.5)	外：タテハケ。 内：ナデ。	0.5～2mmの砂粒多く含む。 暗褐色	
43−17 324 TZ33	高杯	—	14	(4.7)	ハの字状にひろがる脚部。 外：風化のため調整不明。裾部付近ナデ。 内：ヨコ方向のヘラ削り。裾部付近ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡褐色	
43−18 321 TZ33	脚部	—	19	(4.1)	裾端部外側に拡張する。 外：裾部ナデ。脚部ハケ。裾拡張部上面ナデ。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 淡黄褐色	
43−19 514 TZ34	甕	17	—	(3.5)	口縁端部斜め下方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文。 内：ナデ。	1mm程度の砂粒若干含む。 淡黄橙色	
43−20 129 TZ35	壺	14.4	—	(4.3)	頸部から大きくひらく口縁部をもち、端部上方へ大きく拡張する。 外：端面に鋸歯文。 内：ナデ。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 橙褐色	
43−21 130 TZ35		—	—	(5.5)	外：タテハケの後、肩部に刺突文。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5mmの砂粒多く含む。 淡黄橙色	
43−22 131 TZ35	鉢	12	—	(4.7)	口縁部くの字状に外反し、端部上下に拡張する。 外：端面ナデ。 内：ナデ。	0.5～1mmの砂粒多く含む。 灰褐色	

43–23 137 TZ36	底	16	—	(3.5)	内部外傾工形に底をする。 外：研磨ナデ。 内：ナデ。		0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡暗色	
43–24 135 TZ36		16.2	—	(3.4)	口縁部ごわずかに外反し、胴部外形上方に拡張する。 外：ミガキによる筋の凹線文。 内：ナデ。		1～1.5㎜の砂粒含む。 特色	
43–25 134 TZ35		15	—	(3.7)	端部わずかに上下に突帯する。 外：内傾ナデ。 内：横位ハケ→ヘラ削り。		0.5～1.5㎜の砂粒多く。 黄褐色	
43–26 128 TZ35		16	—	(4.5)	口縁内面上方に拡張する。 外：内傾による筋痕文。 内：横位ハケ→ヘラ削り。		0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 黄褐色	
43–27 127 TZ35	高杯	—	—	(7.5)	脚柱状から脚台下条形に開かう。 外：ヘラミガキ。 内：ヘラ削り、横り目あり。		0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡褐橙色	

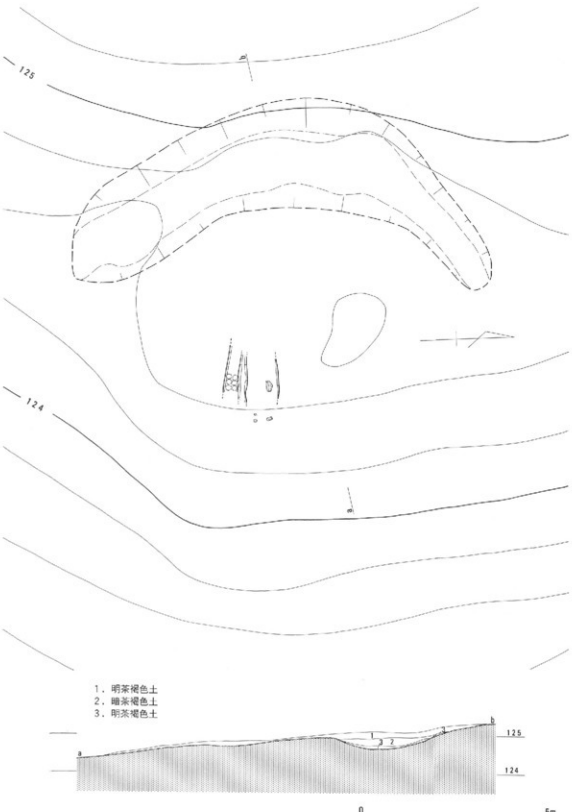
第７表　その他の遺構出土遺物一覧表

挿図番号 図版番号 写真図版	器種	法量（単位：cm） （ ）は現存値 口径	底径	器高	特徴・記載（外・内面）	施土・焼成・色調	備考
44–1 434 IP1	壺	6	2.2 （つまみ）	(4.1)	笠いハの字状にひろく、つまみは先端部欠損。 外：ナデ。 内：粘土のため調整不明。	1～2㎜の砂粒多く含む。 淡橙色	
44–2 438 P2	壺	15	—	(4.6)	口縁部くの字状に外反し、端面斜め上方に拡張する。 外：端面に3条の凹線文、外面タテハケ。 内：ナデ。	精良。 赤茶褐色	
44–3 439 P3	壺	15.8	—	(4.1)	口頸部くの字状に外反し、端部上方に拡張する。 外：端面に4条の凹線文。 内：ナデ。	2㎜以下の砂粒多く含む。 淡灰褐色	
44–4 504 P3		13	—	(4.5)	口縁端上下に拡張する。 外：粗先のため調整不明。 内：頸部以下ヘラ削り。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 淡灰褐色	
44–5 440 P3	底台	—	6	(2.7)	外：ナデ。 内：ナデ。	1㎜以下の砂粒少ない。 淡黄褐色	
44–6 436 P4	壺	15	3 （つまみ）	(7.7)	ハの字状にひらく、つまみは先端部欠損。 外：ナデ。 内：粗先のため調整不明。	1～7㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	
44–7 442 P4	壺	12	—	(3.7)	頸部上方に拡張する。 外：端面ナデ。 内：粗先のため調整不明。	1㎜以下の砂粒多く。 黄褐色	
44–8 441 P5	壺	14		(7.3)	口頸部やや小に外反し、端部上下に拡張する。胴部張い。 外：縦ナデ。体底先のため調整不明。 内：ナデ。	3㎜以下の砂粒多く含む。 黄褐色	
44–9 358 P6		17.4	—	(4.3)	口縁部くの字状に外反し、頸部外面上方に拡張する。 外：縦ナデ。 内：ナデ。	1㎜程度の白色砂粒含む。 淡黄褐色	外面スス付着。
44–10 357 P6	壺台	28	—	(3)	脚裾に向け拡張する。 外：縦ナデ後、ミガキ。 内：ナデ。	1～2㎜の砂粒含む。 淡黄褐色	
44–11 125 P7	鉢	15	4	5.6	口縁は体部から緩やかに外反し、端面を内側上方につまんで丸くおさめる。 外：ヘラミガキ。 内：粗先のため調整不明。	0.5～2㎜の砂粒多く含む。 淡黄褐色	外面スス付着。
44–12 64 SK1	壺	14	—	(5.8)	頸部から下ゆるやかに外反し、口縁端部下方に拡張する。 外：縦ナデ後4条の凹線文を施し、同形の粘土を張り付ける。胴部タテハケの後、6条の凹線文。 内：ナデ。	0.5㎜程度の砂粒多く含む。 淡赤褐色	
44–13 67 SK1		—	9	(4.3)	外・内面とも風化のため調整不明。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 黄褐色	底面付近にスス付着。
44–14 66 SK1	底部	—	9	(4.5)	外：タテ方向のヘラミガキ。 内：ナデ。底部痕あり。	0.5㎜程度の砂粒含む。 黒色	外面スス付着。
44–15 65 SK1		—	10.2	(3.1)	外：斜め方向のハケ。 内：ナデ。胴部痕あり。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 淡黄褐色	外・内面スス付着。
44–16 63 SK1		—	10	(9.4)	外：ヘラミガキ。 内：不規方向のハケの後、当おさえ（指頭痕あり）。	0.5～1.5㎜の砂粒含む。 淡茶褐色	外面スス付着。
44–17 69 SK1	壺	—	—	(3.6)	頸部は肩部から強弱して緩やかに外反しながら口縁部にいたる。 外：横ハケ後4条の凹線文。胴部タテハケ。 内：風化のため調整不明。	0.5～1.5㎜の砂粒多く含む。 黄白色	
44–18 62 SK1	底部	—	10.5	(15)	外：ヘラミガキ。 内：風化のため調整不明。	1～2㎜の砂粒多く含む。 淡灰褐色	外面スス付着。
44–19 512 SK2	壺	—	—	(5.7)	壺の体形上半部。 外：タタキハケの後、胴裾の変状文、頸部文を交互に施す。 内：ナデ。指頭痕あり。	1㎜程度の砂粒若干含む。 黄褐色	
44–20 古墳周溝 アミ付土	小台？	—	—	—	ヘラ描の文様を施す。	1㎜以度の砂粒含む。 黄褐色	
44–21 古墳周溝 アミ付土	不明	1.9 （長さ）	1.7 （幅）	3.3 （厚さ）	先端部を欠く。 サヌカイト製。		

2．古墳時代

（1）古墳（第45～47図、図版25・26・41・44）

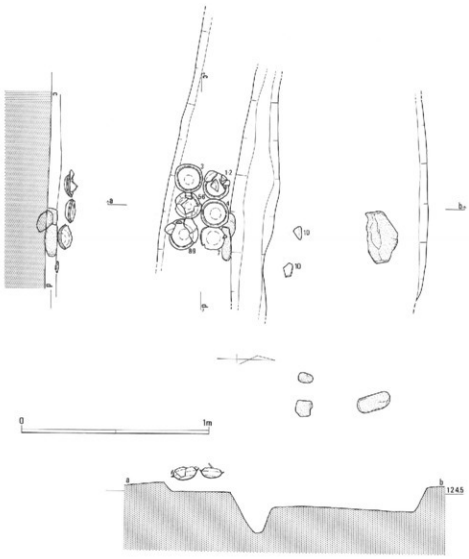
（墳丘）（第45図）



第45図　二宮岡東古墳墳丘測量図（S＝1：100）

調査前の段階では、古墳の存在は知られておらず、墳丘もほとんど確認できていなかった。精査の結果、尾根線に直交する形で土層の異なる箇所があり、当初は弥生時代の段状遺構と考え、ここにトレンチを入れた。その結果、断面が溝状を呈するため段状遺構では無く、出土遺物などから古墳の周溝である事がわかった。周溝は断面が緩やかなU字形で、最大幅３ｍ、深さ0.3ｍを測り、ほぼ山側のみ半円形に巡っている。この周溝内の南側からやや大きめの石が数個まとまって出土し、その周囲からも須恵器片が出土している。これら石の見られるのはこの部分のみであり、石の性格については不明である。周溝の埋土は、３層で上層（第45図１）から須恵器や鉄滓が出土している。ただこの層は、土層図を見る限りでは、周溝の上層と言うよりは古墳の上部をほぼ覆っているものである。古墳は本来盛土があつてもう少し高さがあったと考えられるので、この上層は２次的に動いて堆積しているものである。そのためこの層がら出土した鉄滓は本墳に伴う可能性は低い。また、その他の層（同２）からは須恵器片の他、弥生土器片が少量出土している。本墳は削平のため盛土はほとんど残っていない。

以上、周溝部分から墳丘を復元すると、本墳は直径10ｍ程の円墳と考えられるが、墳丘のほとんどが削平されている。そのため高さは現状で0.5ｍ程である。確認した古墳はこの１基だけである。



第46図　埋葬施設平・立面図（Ｓ＝１：20）

（埋葬施設）（第46図）

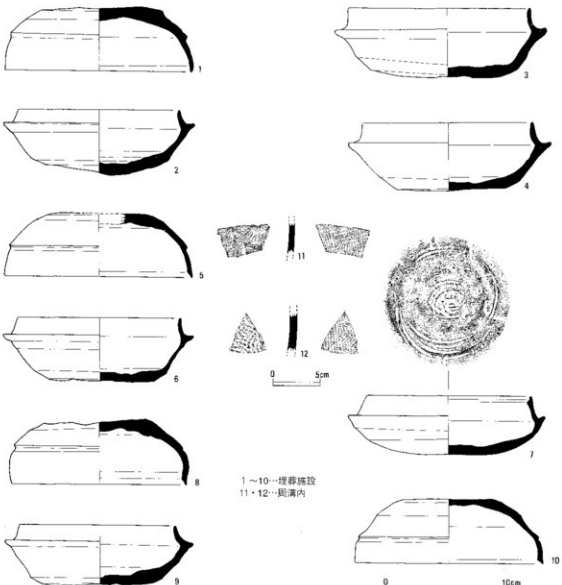
埋葬施設の一部が墳丘の中心からやや南よりに存在する。遺構の検出段階ですでに須恵器の一部が露出していた。また、周囲には弥生時代の貯蔵穴が多数存在し、それを先に検出して掘り下げたために、この埋葬施設の東西両端小口側が不明瞭となっている。かろうじて検出したのは長方形状の掘り方の中心部分で、現状で長さ1.3m、幅1.4m、深さ0.15mを測る。内部には須恵器の他、石が複数存在する。特に須恵器よりの南側に2個、やや離れた北側に1個大きめの石があり、この石の周が0.7m程あいている。埋土はほぼ1層で棺痕跡は確認していないが、この部分に木棺がおさめられていたものと推測される。その他東側にも石が3個存在するが、やや浮いた状態であり動いている可能性が大きい。また棺部分の床面南よりには主軸に平行する形で幅20～25cm程の溝がある。この溝は深さ20cm、断面はV字形で比較的しっかりとした溝であるが、両小口部分の形態が明瞭でないため、全容は不明である。これが排水施設であった可能性もある。埋葬施設の主軸を推測すればほぼ東西方向である。この棺内と推測される部分からの出土遺物は皆無である。掘り方内の南側、棺外と推測される部分で須恵器がまとまって副葬されている。これらはいずれも床面からは浮いた状態であるため、棺埋葬後ある程度周囲が埋められた段階で副葬されたものと推測される。上部が削平されているため詳細は不明だが、現状では杯の蓋と身がセットとなり3個ずつ2列、計6セットが整然と置かれていたようである。この須恵器は検出時にすでに露出していたため、盗がすでになくなっているものもあると推測される。セット関係がわかるのは3はセット（第47図1・2、5・6、8・9）のみである。蓋と身がセットになっているものの身の中には残留物は見られなかった。また、10の蓋は破片となって出土したため、動いているものと考えられ、これら3セット以外の蓋であった可能性が大きい。埋葬施設の状況、特に深さが15cm程しかない事から考えても、墳丘はかなり削平されているものと考えられる。また、本埋葬施設が中央南よりにある事から、他の埋葬施設が北側に存在していた可能性は十分考えられる。

（出土遺物）（第47図）

出土遺物として、埋葬施設内から須恵器、周溝内から須恵器と鉄滓が出土している。この内鉄滓については前述のごとく、2次的に動いている可能性が大きく、本墳に伴うものかは判断できない。出土遺物の内須恵器については第47図に図示している。

1～10は埋葬施設内、11・12は周溝内の出土で、杯と甕の胴部片がある。杯蓋（1・5・8・10）は口径13.8～14.8cm、器高5.0～5.2cmで口縁端部内面に段をもつ。身（2～4・6・7・9）は口径12～13.2cm、器高4.6～5.5cmで、口縁端部内面に段をもつもの（7）ともたないもの（2～4、6・9）とがある。7の内面にはタタキの当て具の痕跡がかなり広範囲に残る。蓋・身とも外面の調整は回転ヘラケズリによるが天井部や底部が平らに整形されているものがほとんどである。これはヘラで切り離した後、反転して天井部や底部の外周のみ回転ヘラケズリで整形しているためである。そのため身の底部中央にヘラで切り離した際の痕跡が残っているものもある。7は内部に当て具痕が見られ、底部の形態がやや丸みを帯びていて、他とは異なっており、底部はやや丁寧に作られているようである。

11・12は甕の胴部片で外面には平行タタキが見られ、11の内面はナデている。尚、須恵器の詳細は観察表を参照していただきたい。ちなみに鉄滓は総重量1.7kgあり、表面観察から製錬滓であろう。後述する北斜面出土の鉄滓に酷似している。



第47図　二宮岡東古墳出土遺物実測図（1～10…S＝1：3、11・12…S＝1：4）

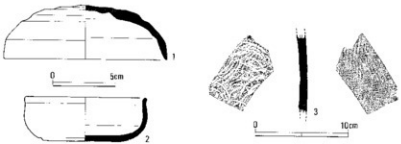
（2）その他の遺物（第48図）

古墳時代と思われるその他の遺物を第48図に図示している。いずれも須恵器である。

1は杯蓋で古墳の東斜面、弥生時代の住居跡2の上層から出土している。位置的には古墳の遺物が流れて来ている可能性が考えられる。破片からの復元で口径13cm、器高4.3cmで古墳の杯蓋と比べると口縁部外面の天井部との境に稜をもたないなど、形態がやや異なっている。外面はヘラ切り後未調整でその他はヨコナデである。

2はやや歪んでいる杯身で口径9.6cm、器高3.5cmを測り、口縁端部はやや外反し丸くおさめる。底部はヘラ切り後ナデており平らに仕上げている。また、これは蓋の可能性もある。

3は甕の胴部片で外面に平行タタキの上に横方向のナデがハケの様に施され、内面には同心円の当て具痕が見られる。



第48図　その他の出土遺物実測図（1・2…S＝1：3、3…S＝1：4）

第8表　古墳時代の遺物一覧表

挿図番号 出土位置	種類	法量（単位：cm）（ ）内は残存値 口径	底径	器高	形態・調整（外・内面）	施土・色調	備考
47－1 古墳	須恵器 杯蓋	14.8	－	5.1	天井部との境に棱をもち、口縁内は丸い。 外:天井部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒多量に含む。 青灰色	ヘラケズリのロクロ回転右。
47－2 古墳	須恵器 杯蓋	12.8	－	5.2	口縁は内紙して立ち上がり、端部は丸い。 外:底部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒多量に含む。 青灰色	〃 右、突形。
47－3 古墳	須恵器 杯蓋	13	－	5.5	口縁は垂直に立ち上がり、端部は丸い。 外:底部回転ヘラケズリ、他は、ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒多量に含む。 淡青灰色	〃 左、は浅形。
47－4 古墳	須恵器 杯蓋	13.2	－	5.5	口縁は垂直に立ち上がり、端部は丸い。 外:底部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	3mm程の砂粒多量に含む。 青灰色	〃 左、は浅形、やや重む。
47－5 古墳	須恵器 杯蓋	14.8	－	5.0	天井部との境に棱をもち、口縁端部は丸をもつ。 外:天井部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒多量に含む。 淡青灰色	〃 右7、右3分の1欠損。
47－6 古墳	須恵器 杯蓋	12.8	－	5.1	口縁は垂直に立ち上がり、端部は丸い。 外:底部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	3mm程の砂粒多量に含む。 淡青灰色	〃 右、は浅形。
47－7 古墳	須恵器 杯蓋	13.0	－	4.6	口縁は内紙して立ち上がり、端部は丸をもつ。 外:底部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	1.5mm程の砂粒含む。 淡青灰色	〃 右、一部欠損、内面にクタキ当て痕跡。
47－8 古墳	須恵器 杯蓋	13.8	－	5.2	天井部との境に棱をもち、口縁端部は丸をもつ。 外:天井部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	3mm程の砂粒多量に含む。 淡青灰色	〃 右、口縁2分の1欠損。
47－9 古墳	須恵器 杯蓋	12.0	－	4.9	口縁は内紙して立ち上がり、端部は丸い。 外:底部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒多量に含む。 淡青灰色	〃 右、一部欠損。
47－10 古墳	須恵器 杯蓋	14.8	－	5.0	天井部との境に棱をもち、口縁端部は丸をもつ。 外:天井部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	3mm程の砂粒多量に含む。 青灰色	〃 左、4分の3欠損。
47－11 古墳	須恵器 壺	－	－	－	外:格子目タタキ後ナデ。 内:当て痕跡をナデ消す。	2mm程の砂粒含む。 乳青灰色	
47－12 古墳	須恵器 壺	－	－	－	外:格子目タタキ。 内:向心円タタキ当て具痕。	0.5mm程の砂粒含む。 青灰色	
48－1 遊蹟	須恵器 杯蓋	(13.0)	－	4.3	天井部との境に棱はもたず、口縁端部は丸い。 外:天井部ヘラ切り後未調整、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	1mm程の砂粒含む。 乳青灰色	4分の3欠損。
48－2 遊蹟	須恵器 杯蓋	9.8	－	3.5	底部はやらぐに縁は垂直に立ち上がる。 外:底部ヘラ切り後ナデ、他はヨコナデ。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 青灰色	3分の2欠損。 大きく重む。
48－3 遊蹟	須恵器 壺	－	－	－	外:平行タタキ後ヨコハケ。 内:向心円タタキ当て具痕。	1mm程の砂粒含む。 淡青灰色	

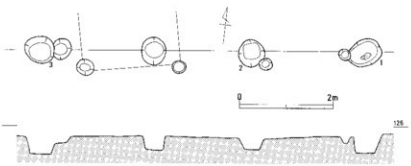
3．古代～近世

（1）柵列

柵列1（ＳＡ1、第49・51図、図版8・42）

4個の柱穴がほぼ等間隔に並んでおり、対応する柱穴がないので建物とはならず、柵列などと考えられる。柱穴はすべて円形で直径は50～64㎝、深さは22～39㎝、柱間は2.2～2.5ｍである。東端の柱穴1から石の他土器片（第51図1）が出土している。柱穴2からは弥生土器片、柱穴3からは弥生土器片と炭が少量出土している。主軸方向はＮ－83°－Ｅでほぼ東西方向である。

出土遺物の内1は勝間田焼の椀の破片で、底部には糸切りの痕跡が残る。



第49図　柵列1平・断面図（Ｓ＝1：80）

（2）段状遺構

段状遺構1（ＳＴ1、第20・51図、図版14・42・44）

弥生時代の段状遺構（ＳＴ2）に重複して存在する。東端は明瞭でないが現状でＬ字形をし、全長16ｍ、幅4ｍ、深さ0.4ｍを測り、斜面をカットして平らな部分を作りだしている。埋土はほぼ2層で、上層（第20図1）は後世の耕作土の一部であろう。この段状遺構に伴う柱穴は6個（同ｋ－1）あり、ほぼ一直線に並んでいる。柱は直径20～30㎝前後、深さ30㎝前後、柱間は1.5～2ｍである。出土遺物は埋土（同2）から須恵器、備前焼片と鉄滓が2点ある。その内の一部を図示している。第51図2～5がそれである。

2は須恵器の甕の口縁部、3～5は備前焼で3・4はすり鉢で内部におろし目が見られる。5は壺の底部である。鉄滓が出土しているがこれに関連する遺構は発見されていない。鉄滓は表面観察から製錬滓と思われる。

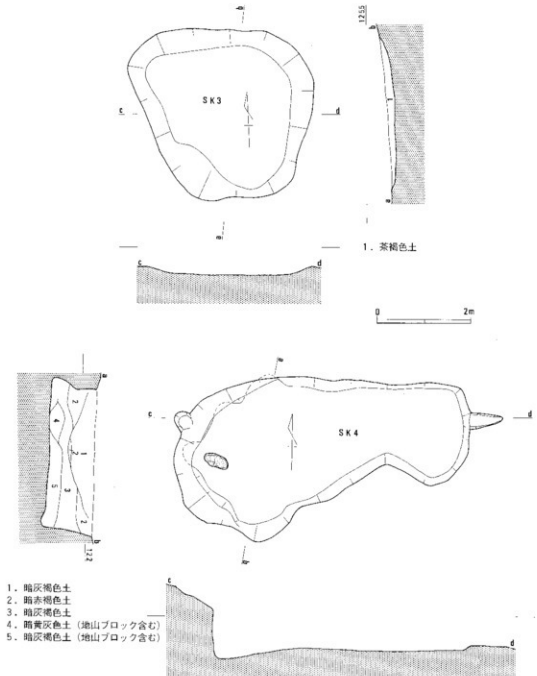
（3）土坑

土坑3（ＳＫ3、第50・51図、図版28・44）

台形状をした浅い土坑で当初は方形の住居跡と考えていたが、土層を残して掘り下げた結果、内部には柱穴も無く住居ではないものと考えられる。ただ住居の製作途中の可能性もあるが、現状では用途については不明である。長辺4ｍ、短辺2ｍ、幅3.5ｍ、深さ最大で16㎝を測り、掘り込みは緩やかで床面はほぼ平らに作られている。埋土は1層で、内部からは鉄製品が2点（第51図21・22）出土している。21は鞭状の鉄器で長さ10㎝、断面が方形で刃先は両刃である。22は断面が方形の鉄釘で先が曲がっている事から、使用されていたものである。

土坑4（ＳＫ4、第50・51図、図版29・42）

不整形のかなり大きめの土坑で長さ6.4ｍ、幅1.7～3.1ｍ、西側で深さは最大1.5ｍを測り、断面は山



第50図　土坑３・４平・断面図（S＝1：80）

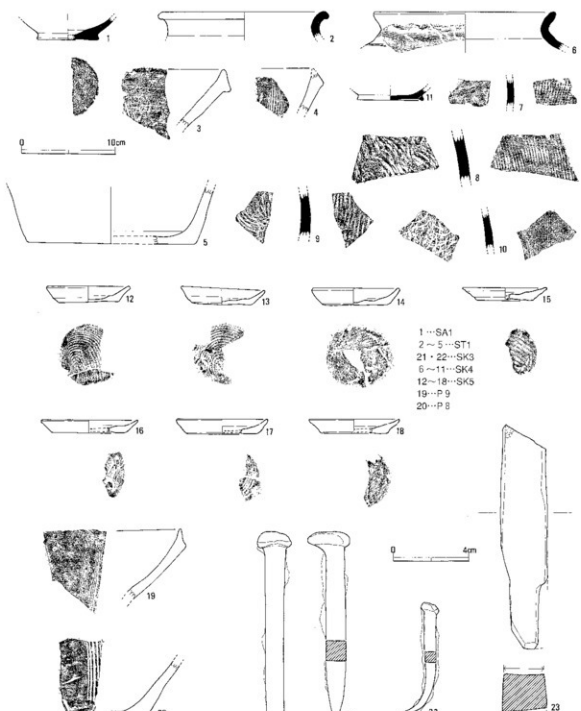
側ではややえぐれている箇所もある。埋土は、５層で自然堆積と言うよりはやや複雑な堆積をしており、２～５層まで堆積した段階でやや掘り込まれ、その後の１は自然堆積であろう。内部にはかなり大きめの石が１個やや浮いた状態であり、須恵器の破片が少量出土している。ここの床面の地山はやや粘土質である事、平面形が不整形な形態である事などから、これら粘土質の土を採掘した穴の可能性もある。出土した土器片は第51図（６～11）に図示している。いずれも須恵器と考えられる。

６～10は甕で、６の外面にはハケによる波状文が上下２段に巡っており、その上部にはハケ状工具の面を水平に圧しあてたものが巡っている。７の内面にはタタキの当て具痕をナデ消している。10は外面もハケ状工具でタタキの痕跡をナデ消している。11は高台付きの製品である。

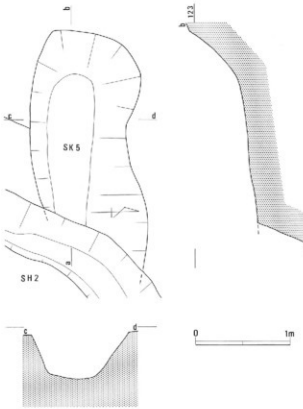
土坑5（ＳＫ５、第51・52図、図版42）

弥生時代の住居跡２と重複する土坑である。住居の掘り下げ段階でこの土坑の存在に気付いたため、東小口部分が不明となっている。掘り方は長方形で、現状で長さ2.5ｍ、幅1.1ｍを測る。床面はほぼ平らで深さは0.5ｍである。内部から土師器が数点出土し、その内７点を図示（第51図12～18）している。図示した以外にも破片が数点ある。土坑の形状からお墓であった可能性もある。

12～18はいずれも土師器の小皿で口径8.6～8.8㎝、高さ1.6～1.9㎝で、底部には糸切りの痕跡が見られる。14のと18の底部はかなり摩滅しているため明瞭でない。



第51図　出土遺物実測図（１～20…Ｓ＝１：４、21～23…Ｓ＝１：２）



第52図　土坑５平・断面図（Ｓ＝１：40）

その他の遺構として柱穴９から陶器片（19）、柱穴８から陶器片（20）と砥石（23）が出土している。19・20は備前焼のすり鉢で内部におろし目が見られる。23は断面が台形状の砥石で上下２面に使用痕がある。

（４）墓（第53～55図、図版27・28・43・44）

近世以降の墓と考えられるものを９基検出し、ほぼ西側地域に集中する。ただこの中には副葬品がないものもあり、この地域が最近まで墓地として使用されていた事から現代の墓であったものも含まれている可能性もある。現代の墓壙も調査区には多数確認されたが、これについては調査の対象から外している。一応埋土の土質などから、近世墓と同一時期と解釈しているもののみ載せている。

近世墓は円形の掘り方が５基、方形の掘り方が３基、楕円形１基である。また、内部に石があるもの６基、副葬品が出土したもの３基である。

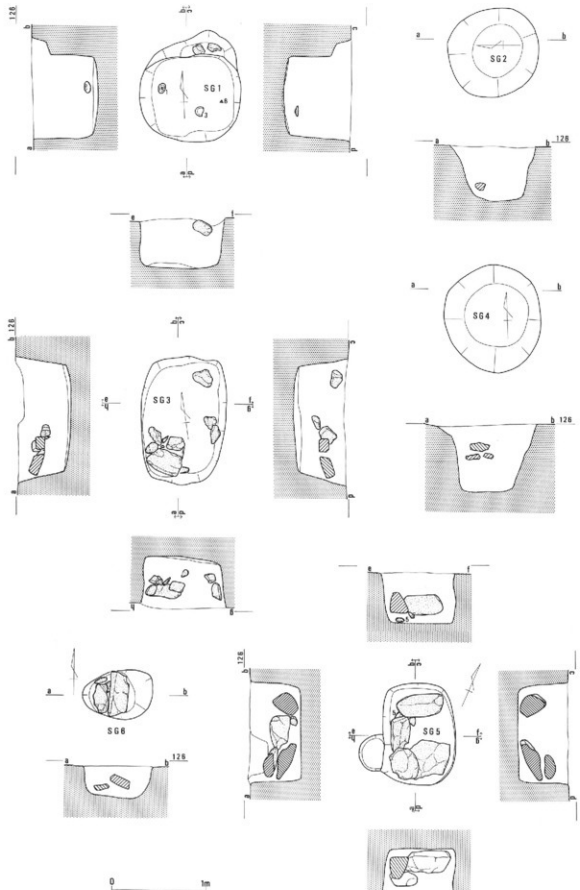
近世墓１（ＳＧ１、第53・55図）

隅丸方形に近い掘り方で、一辺0.94×1.1ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は１層で棺痕跡は見られない。副葬品として陶器２点（第55図１・２）、磁器１点（同３）、鉄製品１点（６）があり、いずれもやや浮いた状態で離れて出土している。

１は肥前陶器の皿、２は肥前陶器の坏、３は染め付けの皿である。１は高台をわずかに削り出し、２の底部には糸切りの痕跡があり、３は青色の釉で模様を描いている。６は鉄製の燭台と考えられ、円形の薄い鉄板の中央に穴をあけ、そこに断面長方形の先をつけ、裏側で三方折り曲げて止めている。

近世墓２（ＳＧ２、第53・55図）

円形の掘り方で直径0.98ｍ、深さ0.58ｍを測る。埋土は１層であり棺痕跡は見られない。副葬品とし



第53図　近世墓1～6平・断・立面図（S＝1：40）

陶器１点（４）出土している。

４は肥前陶器の皿で高台を削り出している。

近世墓３（ＳＧ３、第53図）

隅丸方形の掘り方で、長辺1.35ｍ、短辺0.9ｍ、深さ0.55ｍを測る。内部からかなり多くの石が検出された。石は北小口で１点、東側壁で２点、南小口で８点でいずれもやや浮いた状態である。そのためこれら石の性格については明瞭でないが、墓であるとすると特に南小口の石は棺を入れた後に落ち込んだものと推測される。副葬品は皆無である。

近世墓４（ＳＧ４、第53図）

円形の掘り方で直径1.05×1.15ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は１層であるが棺痕跡は見られない。内部の石は墓標のような大きいものではない。副葬品は皆無である。

近世墓５（ＳＧ５、第53・55図）

隅丸方形の掘り方で、長辺1.08ｍ、短辺0.77ｍ、深さ0.53ｍを測る。内部には大きめの石４個がコの字形に配置されている。この石囲みの内側は40㎝四方である事からここに埋葬されたと考えると、大人の土葬はやや無理である。そのため火葬にして入れた可能性が考えられる。副葬品とし北側のコーナー部分の石の下から陶器が１点（５）ある。

５は肥前陶器の皿である。高台は比較的しっかりと削り出している。

近世墓６（ＳＧ６、第53図）

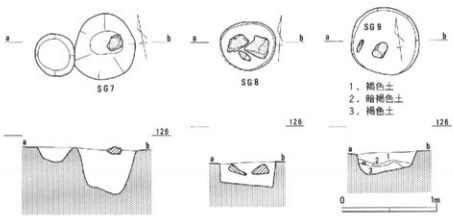
墓でない可能性が大きいが、不整形の楕円形掘り方で、長径0.73ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.35ｍを測る。内部にはかなり大きめの石２点と、小さめの石２点が隙間に入れられている。これら石はかなり落ち込んでいるため、墓標的なものが落ち込んだ可能性が考えられる。副葬品は皆無である。

近世墓７（ＳＧ７、第54図）

円形の掘り方で、直径0.65×0.7ｍ、深さ0.45ｍを測る。隣接する柱穴は別の時期のものである。埋土は１層で棺痕跡は見られない。上部に石が１点あり、その状況から墓標的なものと考えられる。副葬品は皆無である。

近世墓８（ＳＧ８、第54図）

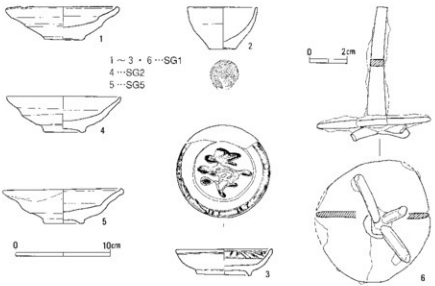
円形の掘り方で、直径0.5×0.6ｍ、深さ0.27ｍを測る。内部にはやや浮いた状態の石が３点ある。深さがさほど無いため墓ではない可能性もある。副葬品は皆無である。



第54図　近世墓７～９平・断面図（Ｓ＝１：40）

近世墓９（ＳＧ９、第54図）

円形の掘り方で、直径0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は３層であるがやや不自然な堆積である。内部には石が２点ある。副葬品は皆無である。



第55図　出土遺物実測図（１～５…Ｓ＝１：４、４・６…Ｓ＝１：２）

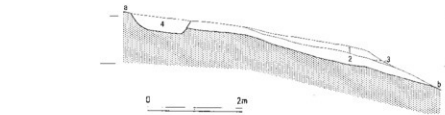
（５）その他の遺構・遺物（第56・57図、図版42～44）

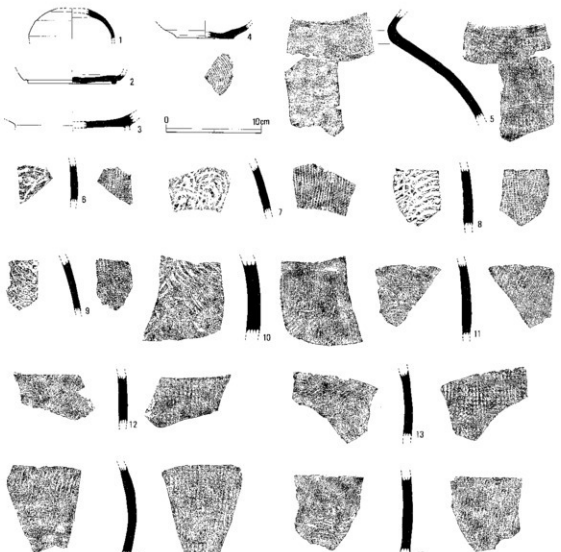
北斜面（第56図）

調査区の北側斜面の弥生時代の段状遺構３（ＳＴ３）に重複し、さらに東側一帯のかなり広範囲から須恵器、勝間田焼片と鉄滓が出土している。特に鉄滓が出土しているため精査したものの、明瞭な遺構は検出されなかった。この斜面部の土層を第56図に載せている。併せて段状遺構３の土層（第22図ａ－ｂ、ｃ－ｄ）も参照していただきたい。基本的には上下の２層で、下層（第56図２）は弥生時代の土器を含むもので、上層（同１）は鉄滓や須恵器を含むものである。上層１を取った段階で遺構の検出を試みたが、なだらかな傾斜で作業面などの整形面は見られない。そのためこの層はこれら遺物の廃棄層と考えられる。ただ上層３は赤褐色の土で一部分しか見られないが２の上面を平らに整形しているようにも見える。そのためすでに流失していて、ある程度造成された平坦面が存在していたのかもしれない。また、この斜面の高所も精査したが、炉跡などの検出や鉄滓や炭などの出土はほとんど無い。木遺跡に隣接する南側斜面部の調査（国道179号建設に伴う）で炉跡（鍛冶が４基）が見つかっている。そのため、今回は検出していないが、製鉄関連の遺構が周辺地域にあった事は十分考えられる。

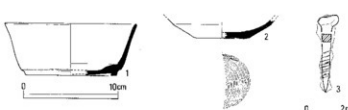
出土遺物の内図示できるものは第56図に載せている。１～３、５～15は須恵器で４は勝間田焼である。１は杯蓋、２・３は高台付きで２は杯身、３は壺などの底部、４は勝間田焼の椀、５～15は甕の破片である。５は頸部付近であるが小片のため断面のみである。甕片は外面に平行タタキが見られその上をハケ状工具で横方向にナデているものがほとんどであるが、11はハケの状痕のみが明瞭に見られる。内面にはタタキの当て具の痕跡が見られるものと、ナデ消してハケの条痕が明瞭なものとがある。鉄滓はかなり広範囲から出土し総重量2.7kgあり、その中には炉壁部分と推測できる破片もある。鉄滓は表面観察から鍛鉄滓と考えられる。

その他、建物などにならない柱穴や遺構に伴わない遺物として第57図に３点載せている。１・２は遺構に伴わず、３は柱穴10から出土している。１は須恵器の杯身で、小片だが口縁から底部までそろ





第56図　北斜面土層図（S＝1：80）及び出土遺物実測図（S＝1：4）



第57図　その他の出土遺物実測図（1・2…S＝1：4、3…S＝1：2）

っているので復元して載せている。しっかりとした高台がつく。2は勝間田焼の椀で底部には糸切りの痕跡が残っている。3は断面が方形の鉄釘で表面に木質が残っている事から使用されていたものである。

第9表　古代～近世出土遺物一覧表

挿図番号 出土位置	器種	法量（単位：cm） （　）内は残存値 口径	底径	器高	形態・調整（外・内面）	胎土・色調	備考
51－1 SA1	勝実土師器 椀	－	(6.6)	(2.4)	平高台状の底部。 外:ヨコナデ,底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	1mm程の砂粒含む。 乳黄灰色	底部2分の1欠損。
51－2 ST1	須恵器 壺	(16.6)	－	(2.7)	口縁は緩やかに外反し,頸部は丸い。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒含む。 淡青灰色	
51－3 ST1	備前焼 すり鉢	－	－	－	口縁端部は上方と下方につまむ。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ,おろし目。	1mm程の砂粒含む。 暗赤茶色	
51－4 ST1	備前焼 すり鉢	－	－	－	口縁端部は上方につまむ。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ,おろし目。	1mm程の砂粒含む。 暗赤茶色	
51－5 ST1	備前焼 壺	－	(17.8)	(6.1)	ほぼ平らな底部。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗赤茶色	
51－6 SK4	須恵器 椀	(19.0)	－	(4.0)	口縁部はくの字に外反し,頸部は丸い。 外:タタキ後ヨコハケ(波状文)。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳黄灰色	
51－7 SK4	須恵器 壺	－	－	－	外:平行タタキ後ナデ。 内:ナデ。	0.1mm程の砂粒含む。 淡青灰色	
51－8 SK4	須恵器 壺	－	－	－	外:平行タタキ後ナデ。 内:同心円タタキ当て具痕。	0.1mm程の砂粒含む。 乳黄灰色	
51－9 SK4	須恵器 椀	－	－	－	外:平行タタキ。 内:同心円タタキ当て具痕。	0.1mm程の砂粒含む。 淡青灰色	
51－10 SK4	須恵器 壺	－	－	－	外:タタキ後タテハケ。 内:同心円タタキ当て具痕。	1mm程の砂粒含む。 淡青灰色	
51－11 SK4	須恵器	－	7	(1.4)	貼りつけの高台がつく。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳黄灰色	底部2分の1欠損。
51－12 SK5	土師器 小皿	8.8	6.4	1.7	外:ヨコナデ,底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳赤褐色	口縁2分の1欠損。
51－13 SK5	土師器 小皿	8.9	8.3	2.0	外:ヨコナデ,底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳赤褐色	口縁3分の1欠損。
51－14 SK5	土師器 小皿	8.3	6.5	1.9	外:ヨコナデ,底部摩滅のため不明。 内:ヨコナデ。	1.5mm程の砂粒含む。 淡赤褐色	
51－15 SK5	土師器 小皿	(8.9)	(6.0)	1.4	外:ヨコナデ,底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳赤褐色	
51－16 SK5	土師器 小皿	(10.2)	(7.6)	1.4	外:ヨコナデ,底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 淡赤褐色	
51－17 SK5	土師器 小皿	(9.5)	(7.1)	1.6	外:ヨコナデ,底部回転糸切り 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳赤褐色	
51－18 SK5	土師器 小皿	(9.4)	(6.8)	1.5	外:ヨコナデ,底部摩滅のため不明。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳赤褐色	
51－19 P9	備前焼 すり鉢	－	－	－	外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ,おろし目。	0.5mm程の砂粒含む。 暗赤茶色	
51－20 P8	備前焼 すり鉢	－	－	－	外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ,おろし目。	1.5mm程の砂粒含む。 暗赤茶色	
51－21 SK3	鉄製品 鉄鑿	10 (全長)		1 (厚さ)	上部は平らにつくり,刃は両刃である。		
51－22 SK3	鉄製品 鉄釘	6.1 (全長)		0.6 (厚さ)	先端が曲がる。		
51－23 P8	石製品 砥石	11.8 (全長)		1.8～2 (厚さ)	一部欠損し,断面は台形で上下2面に使用痕。		両岩製。

55－1 SG1	陶器 皿	11.9	4.0	3.5	外:ヨコナデ、底部に高台をつくりだす。 内:ヨコナデ。	橘良。 暗灰白色	唐津、砂目。
55－2 SG1	陶器 外	7.2	2.9	4.5	外:ヨコナデ、底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	橘良。 暗緑灰色	唐津。
55－3 SG1	陶器 皿	10.0	5.7	2.8	外:ヨコナデ、底部の高台貼りつけ。 内:ヨコナデ。	橘良。 暗平緑灰色 文様被覆色	底部には釉がない。 内部に絵を描く。
55－4 SG2	陶器 皿	11.9	4.2	3.9	外:ヨコナデ、底部に高台をつくりだす。 内:ヨコナデ。	橘良。 暗灰白色	唐津、鉄土目。
55－5 SG5	陶器 皿	12.4	4.3	3.8	外:ヨコナデ、底部に高台をつくりだす。 内:ヨコナデ。	橘良。 暗緑灰色	唐津、砂目。
55－6 SG1	鉄製品 鋸分		6.0 (底径)	6.5 (高さ)	円形の鉄板の中央に穴をあけ、そこに先をつけ底で三方に折り曲げる。		
56－1 北斜面	須恵器 杯蓋	—	—	(3.2)	天井部は丸く、口縁部は欠損。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	1.5mm程の砂粒含む。 青灰色	
56－2 北斜面	須恵器 杯身	—	(9.4)	(1.1)	分形状の高台がつく。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	1mm程の砂粒含む。 乳青灰色	
56－3 北斜面	須恵器 底部	—	—	(1.6)	高台が欠損する底部。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	0.5mm程の砂粒含む。 乳青灰色	
56－4 北斜面	鉄関田焼 椀	—	(6.0)	(1.6)	やや中央のへこむ底部。 外:ヨコナデ、底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	1.5mm程の砂粒含む。 暗灰白色	
56－5 北斜面	須恵器 壁	—	—	(11.3)	外:タタキ後ナデ。 内:ナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
56－6 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ヨコナデ。 内:同心円タタキ当て異痕。	0.1mm程の砂粒含む。 乳灰色	
56－7 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ヨコナデ。 内:同心円タタキ当て異痕。	0.5mm程の砂粒含む。 乳灰色	
56－8 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ヨコナデ。 内:同心円タタキ当て異痕。	1mm程の砂粒含む。 濃灰色	
56－9 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ヨコナデ。 内:同心円タタキ当て異痕。	1.5mm程の砂粒含む。 青灰色	
56－10 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ナデ。 内:同心円タタキ当て異痕。	1.5mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
56－11 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:タタキ後ナデ。 内:ナデ。	1mm程の砂粒含む。 乳青灰色	
56－12 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ナデ。 内:ナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
56－13 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:格子目タタキ後ナデ。 内:ナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
56－14 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:格子目タタキ後ナデ。 内:ナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
56－15 北斜面	須恵器 壁	—	—	—	外:平行タタキ後ヨコハケ。 内:タテハケ状のナデ。	1mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
57－1 遊離	須恵器 杯身	(13.8)	(9.6)	5.5	台形状の高台、口縁は開きぎみに立ち上がる。 外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。	2mm程の砂粒含む。 暗青灰色	
57－2 遊離	鉄関田焼 椀	—	(5.6)	(2.0)	中央がややくぼんだ底部。 外:ヨコナデ、底部回転糸切り。 内:ヨコナデ。	0.1mm程の砂粒含む。 乳青灰色	
57－3 P10	鉄製品 鉄釘	4.0 (長さ)		0.5 (厚さ)	木質が残る。		

Ⅳ　まとめ

今回の調査では弥生時代の集落を中心とし、古墳、近世墓など、限られた調査面積の中で幅広い時期の遺構、遺物がみられた。以下、時代ごとに成果を記したい。

1．弥生時代

出土土器の年代について（第58・59図）

美作地方の土器の編年については、これまで遺跡ごとに行われてきたものが多く、弥生時代全般にわたって編年されたものはないのが現状である。今回の調査によって出土した土器についても、弥生時代中期のものは少数あるが、大半が後期に集中しており、体系的な編年をすることはできない。後期の土器編年については津山市大田十二社遺跡のものがあり（註1）、竪穴住居や貯蔵穴からの出土遺物をもとに後期を5期に分けた編年が行われている。また、山陽地方の土器編年については、高橋護、正岡睦夫などによって行われており（註2a・b）、特に後期に関しては、倉敷市上東遺跡の出土遺物をもとに行われた編年（註3）などが多用されている。一部細分化されているが、先の二者も後期についてはこの編年を基準としているようである。山陽地方と山陰地方の後期の出土土器との併行関係を示したものについては藤田憲司の論考があり（註4）、岡地方の影響下にある岡山県北部の土器についても編年を試みている。この編年は現在のところ美作地方の土器編年の基準となることが多い。

今回二宮岡東遺跡から出土した弥生時代後期の土器は貯蔵穴からの一括資料が豊富であり、基本的な器種ごとに編年が可能であると判断したものである。分類をするにあたっては、先の正岡編年や藤田編年を参考にしており、分類に当たっての基準となるポイントは大きく変わらないものであるが、一括性を重要視したため若干のずれが生じている部分もある。ここでは従来の編年を参考にした上で後期の弥生土器が大きく4期に分けられると考えた。なお、二宮岡東遺跡では弥生時代中期後葉のものと思われる土器も出土しているが、全体の形状の分かるものがほとんどなく、今回の編年からは除くこととした。

第1期：弥生時代後期前葉

貯蔵穴24、25、29、32出土土器を基準とする。壺は数量が少なく、完形のものは7のみである。頸部は緩やかに外反しながらD口縁部に向かい、口縁部はナデにより大きく上方へ拡張させている。7の壺は鏡野町菊間H頸遺跡で出土した土器棺に類似例がある（註5）。長頸壺はいずれも頸部から外反気味に口縁部へひらく。拡張した口縁端部には凹線文を施す。1のように口縁部を拡張させないものもある。甕のD口縁端部は斜めに拡張するもので占められ、端面には凹線文を施す。凹線文ではなく、ナデによって仕上げる場合もある。内面は頸部よりややや下方までヘラ削りを施すものもあるが、全体的な調合として頸部直下までの方が多い。高杯には2つのタイプがある。1つはやや角度をもって口縁部に向かい、上端で小さく屈曲して外反するもの（16・17）で、脚部は緩やかにひらく。もう一つは杯部が浅く、杯部の中位ほどのところで屈曲して大きく口縁部が外反するもので（14）、拡張した口縁部の上面に沈線が施されている。14にみられるD口縁部の拡張は、時代が下るにつれて大きくなるものと考えられているが、共伴遺物から判断してこの時期に含めることとする。杯部と脚部の接合は円盤充填法が用いられている。器台は18のようにタテハケの後に半行沈線文を施し、内面はヘラ削りをするものがある。これは中期的な様相を色濃く残すものである。なお、この段階ではスタンプ文施文土器はみられない。

他の編年に照らし合わせると、山陽地方の正岡編年ではⅤ－1、Ⅴ－2様式両方にまたがるくらいの幅があると考えられる。岡山県北部の藤田編年ではⅠ期に比定されると思われる。後者に関しては、

若干Ⅱ期に含まれるものもあるかもしれない。

第２期：弥生時代後期中葉

貯蔵穴15、18の出土土器を基準資料とする。長頸壺はいずれも口頸部のみだが、頸部がやや弓なりに外反するもの(19)と、まっすぐにのびて口縁部で急に外反するもの(20)とがある。外面には丁寧なヘラミガキがみられる。甕は口縁端部を内傾気味に拡張させるものと、直立させるものとがある。端面には凹線文を施すが、ナデのみのものも多数ある。内面のヘラミガキはほとんど頸部直下まで行っている。高杯はｘ字形の脚部をもつもの（34）と筒状の脚柱部から浅いハの字状に裾部がひらくもの（35）がある。装飾的なもの（33）は、山陽地方に一般的なタイプのものであるが、津山市内でも出土例は多い。高杯はこの段階で杯部と脚部が別づくりのものがみられるようになり、円盤充填法を用いたものと共伴する。また、この段階になってスタンプ文施文土器がみられるようになる。器台は鋸歯文を施す一般的な形式のものの他、筒状を呈する36のような例もある。

この段階のものは藤田編年のⅡ期に近いものと考えられる。

第３期：弥生時代後期後葉

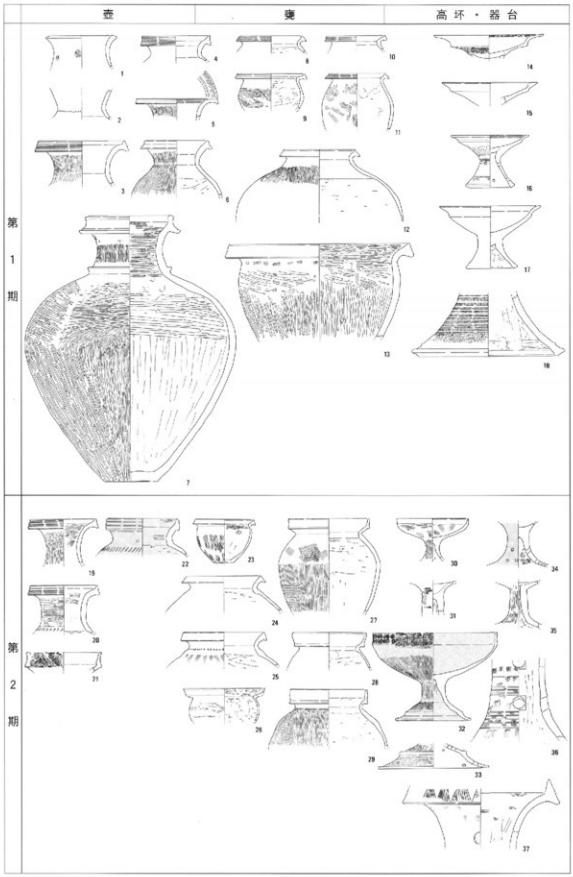
貯蔵穴１～５、35の出土土器を基準資料とする。壺は頸部が直線的に伸びるものと、ややすぼまりながらのびるものの２者がある。甕は口縁端部を上方に拡張させ端面に凹線文を施すものがほとんどであるが、外側にひらき気味にのびるものも一定量みられるのが特徴である。内面のヘラ削りは頸部直下まで行う。高杯は浅い杯部をもち、口縁部に向かって大きく外反するもの（47）と、小型の椀状の杯部をもち、大きくひらく脚部をもつもの（49）とがある。脚部と杯部の境目が角張っている。後者の形式のものは、岡山県苫田郡鏡野町薬師前遺跡第２号土坑出土遺物などに類例をみることができる（註６）。器台は大型のものはみられず、ここであげるのは貯蔵穴１出土のもの（50、51）のみである。鼓形器台は器高が高く、古い様相を呈している。50の器台は他地域の影響を受けているものと思われる。市内では二宮遺跡袋状土坑№218、大田十二社遺跡PE50出土のものに類例をみることができる。

この時期は、美作の土器全体に他地域の土器の手法を取り入れる傾向があり、とりわけ日本海沿岸地域の影響が大きいという印象を受ける。そのため山陽地方の土器編年とは齟齬を来すと思われ、併行関係を見いだすのは難しい。

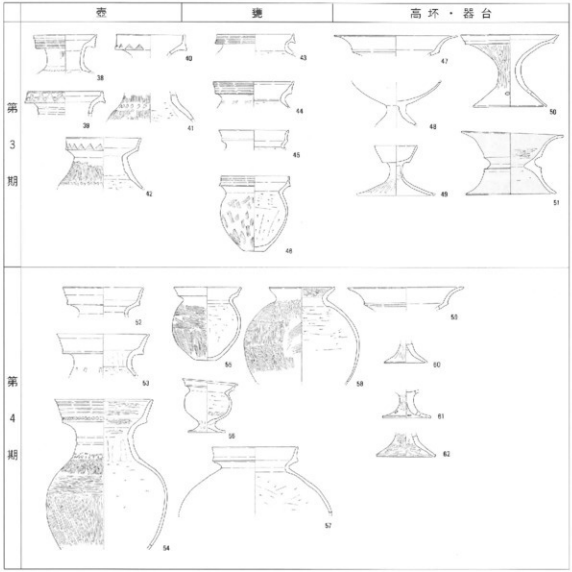
第４期：弥生時代終末期

基準とする資料は少なく、貯蔵穴８、21の一部、23などをあげる。壺の頸部は口縁部に向かってハの字状にすぼまるものが多く、それに対して大きく外傾する口縁部をもつのが特徴である。肩部には刺突文やスタンプ文を施文している。甕の複合口縁も外反するものがほとんどで、底部は丸底化が始まる。また、58のように口縁端部を拡張せずに丸くおさめ、体部が球形を呈するものもある。高杯は杯部の浅い形式のもの（59）がある。外反する口縁部は端部を丸くおさめ、前段階よりも外反の度合いは低くなる。脚部は全体的に短くなり、裾部へ向かって弓なりに広がるもの、脚柱部から屈曲して裾部へ向かうものの両方がある。器台についてはこの時期のものはみられず、前段階と比べて減少するものと考えられる。

以上、二宮岡東遺跡出土の土器をもとに、弥生時代後期の土器を大きく４つの時期に分類した。この分類は限られた資料をもとにして行ったため、ややおおざっぱである点は否めない。また、貯蔵穴の一括性を重視したため、他の編年と改めて比較すると二宮岡東遺跡の編年では１型式内におさまっているものが、２型式にまたがると解釈できる点もあった。しかし貯蔵穴がまさに貯蔵穴として使用



第58図　二宮岡東遺跡土器編年図（1）（S＝1：8）



第59図　二宮岡東遺跡土器編年図（2）（S＝1：8）

	挿図番号	出土地		挿図番号	出土地		挿図番号	出土地		挿図番号	出土地
1	43— 1	TZ32	17	39— 8	TZ24	33	34—21	TZ18	49	27— 5	TZ 1
2	15— 1	SH 2	18	39— 7	TZ24	34	34—18	TZ18	50	27— 6	TZ 1
3	41— 7	TZ28	19	34— 4	TZ18	35	24—14	ST 3	51	27— 7	TZ 1
4	41—11	TZ29	20	34— 2	TZ18	36	24—15	ST 3	52	29—16	TZ 8
5	15— 2	SH 2	21	34—15	TZ18	37	31—13	TZ 9	53	38— 4	TZ21
6	31— 5	TZ 7	22	34— 3	TZ18	38	29— 1	TZ 8	54	38— 7	TZ21
7	39—10	TZ24	23	34— 8	TZ18	39	29— 2	TZ 8	55	29—18	TZ 8
8	13— 4	SH 1	24	33— 7	TZ15	40	43—20	TZ35	56	29—17	TZ 8
9	41—13	TZ29	25	34— 9	TZ18	41	43—21	TZ35	57	38—21	TZ23
10	39— 1	TZ24	26	33—11	TZ15	42	38— 3	TZ21	58	38—19	TZ23
11	43— 7	TZ32	27	37— 9	TZ19	43	43—26	TZ35	59	29—24	TZ 8
12	41—14	TZ29	28	37— 7	TZ19	44	27—18	TZ 1	60	29—27	TZ 8
13	43—11	TZ32	29	31— 6	TZ 7	45	27—17	TZ 1	61	29—26	TZ 8
14	39— 9	TZ24	30	34—17	TZ18	46	29—12	TZ 8	62	29—29	TZ 8
15	43—12	TZ32	31	24—13	ST 3	47	29—24	TZ 8			
16	41— 3	TZ25	32	33—13	TZ15	48	27—20	TZ 5			

※挿図番号については、第1図の2の場合、1—2と表す。

第10表　各土器の挿図・出土地対照表

され始め、やがてその役割を果たして廃棄に向かうまでの期間はそれほど長いものではなく、比較的短期間であったと考えるため、1つの型式の中におさめたものである。

弥生時代集落の変遷と構造（第60図）

今回の調査でみつかった弥生時代の遺構としては、建物、竪穴住居、段状遺構、貯蔵穴などがある。これらのものを、遺構が存在した時期をみていくことにより、この丘陵地における集落のあり方をみていくことにする。また、集落の構造をみていくためには過去に行われた一宮遺跡「岡東」地区の調査成果も合わせてみていく必要がある（註7）。今回は一宮遺跡全体の調査をカバーしていないが、その中で「岡東地区」は今回調査した部分の南側に位置し、同一丘陵上に存在することもあって切り離して考えることはできないと考える。そこでこの地区の調査のうち、弥生時代に属するものと考えられる遺構をとりあげ、今回の調査と併せて考察していく。遺構の番号については過去の調査分については報告書に記載されたそのままの番号を使用する。

一宮遺跡に集落が形成されるのは弥生時代中期後葉からである。時期の特定については、後期については先に行った土器の編年観に基づいており、中期のものについては概ね同時期のものと考えられるので、1段階のものと考えた。以下、時期ごとに変遷をみていく。

第1段階：弥生時代中期後半

確実なものとして掘立柱建物1・3・4、段状遺構4、竪穴住居119・122があげられる。また、遺物は出土していないが、柱の棟方向や埋土の状況などからその他の建物も中期のものと判断してよいと思われる。ここでは建物方向を考慮して建物5・7を含めるにとどめておく。119は5～6軒程度の方形の竪穴住居が削平されたものと報告されており、一部後期前葉の土器もみられることから、中期から後期にかけて継続的に存在していたようである。122についても同様に南半分を削平された隅円方形の竪穴住居と報告されている。竪穴住居と段状遺構の明確な識別方法は分からないが、両者とも今回の調査で検出した段状遺構にむしろ近いものかもしれない。また、北斜面の段状遺構3においてもわずかではあるが中期中葉の土器が出土しており、これらは廃棄されたものである可能性が高い。

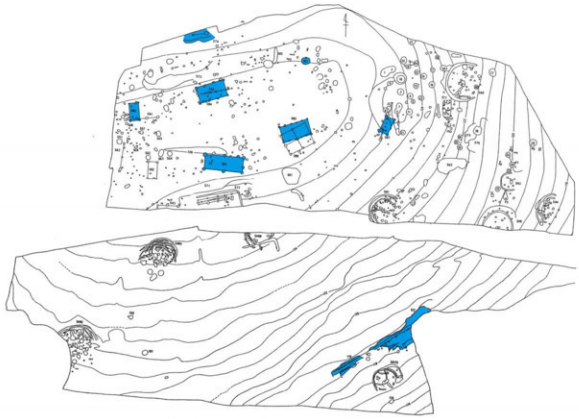
ここで注目したいのは、掘立柱建物が推定5棟存在していたのに対し、この時期に属する円形の竪穴住居が丘陵上または斜面に1つもないことである。西側の調査区外に存在する可能性もあるため確実にはいえないが、中期においてはこの丘陵上が居住地域としては機能していなかったのかもしれない。

第2段階：弥生時代後期前葉

後期になると丘陵上に多くの竪穴住居が出現する。東斜面には竪穴住居1～4、南斜面には竪穴住居82、83などがみられ、それに伴う貯蔵穴もつくられ始める。竪穴住居1・4・82・83などについては次の段階まで建て替え・拡張をしながら継続して存在すると考えられる。前段階との大きな違いとしては、それまで丘陵上にみられた建物がなくなり、それに変わるように丘陵の東斜面に貯蔵穴がつくられはじめている点があげられる。また、この時期には丘陵上に竪穴住居が最も多くみられ、集落が最盛期を迎えているといえる。集落の立地をみると丘陵上には施設が全くみられず、斜面にのみつくられている。

第3段階：弥生時代後期中葉

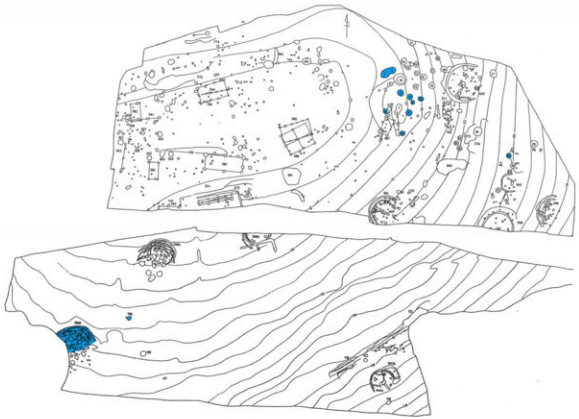
前段階に引き続き居住地域としてのあり方をみせている。丘陵東斜面の竪穴住居1・4などは引き



第１段階　弥生時代中期後葉

第２段階　弥生時代後期前葉

第３段階　弥生時代後期中葉



第４段階　弥生時代後期後葉～終末期

第60図　二宮岡東遺跡弥生時代集落変遷図（S＝1：800）

続き同位置に存在し、新たに竪穴住居５がつくられる。南斜面に竪穴住居83、北斜面に段状遺構３がみられる。段状遺構３には大型の器台や装飾的な土器が多数廃棄されたような状況で出土しており、この時期に祭祀が行われていたことを想像させる。貯蔵穴は前段階では東斜面の標高120～122ｍのところに集中していたのが、北側の123～124ｍのところに位置を変えて群集している。前段階と比べ、同時期の竪穴住居の数に対する貯蔵穴の数が多くなっている。

第４段階：弥生時代後期後葉～終末期

竪穴住居は東斜面にはみられなくなり、南斜面の82に限られる。貯蔵穴は群集する場所が若干南へ移動しているが、数の増減はあまりない。調査区北東隅に位置する貯蔵穴の多くはこの時期のものと思われる。竪穴住居数に対する貯蔵穴数が前段階よりもさらに多くなっている。

終末期になると　集落はその規模を縮小させる。竪穴住居の確実なものとしては住居82の最も新しい段階のものがみられ、北東部の貯蔵穴も数個程度になる。また、南斜面の貯蔵穴100も、一部後期前半の土器が混在しているものの概ねこの時期のものが中心であるといえよう。この段階以降は丘陵上に集落を営むことが廃止されており、古墳が築かれるまではこの丘陵上に集落はつくられなかったものと思われる。

弥生時代における二宮岡東の丘陵上では、中期、後期それぞれの集落のあり方が大きく異なっている。すなわち、中期は大型の掘立柱建物を中心とした建物群や段状遺構がつくられるのに対し、後期は竪穴住居と貯蔵穴を中心とした居住地域であったという違いがみられるのである。中期の遺構は建物群および南東端の住居（段状遺構？）に限られている。建物群は大型の掘立柱建物（建物１）が中心的な施設として存在し、同一丘陵上に４～５棟はほぼ同時期に建てられている。この建物が食料を備蓄するための倉庫であるとすると、南東端の住居だけでなく、ある程度の規模をもつ同時期の住居群が別に存在していたことが推測される。北斜面に存在する段状遺構４などは竪穴住居の一部分とも考えられるが、他の住居が北斜面にはない以上、その可能性は低い。

後期は竪穴住居と貯蔵穴がある程度均等な形で存在している。このことをもう少し詳しく検討するため、竪穴住居と貯蔵穴との関係について考える。南斜面の竪穴住居（SH82・83）については、住居内に多数の貯蔵穴が検出されており、住居ごとに貯蔵穴をつくっていたことが分かる。また、同じ南斜面には貯蔵穴100・101などもあり、南斜面の住居については各住居に対応する貯蔵穴が存在していたことが推測される。従ってこの丘陵上の貯蔵穴と竪穴住居との関係を考える場合、概ね東斜面の住居には東斜面の貯蔵穴が、南斜面の住居には南斜面の貯蔵穴がそれぞれ使用されていたと考えられる。今回の調査でみつかった貯蔵穴の総数は35であり、そのうち後期前葉のものが９基、中葉11基、後葉～終末期９基である（註８）。これに対し、竪穴住居の数は建て替えのものの時期が細分化できないが、各時期に存在したと思われる住居数をあげると、後期前葉６軒、中葉５軒、後葉～終末期１軒である（註９）。

このようにみると、後期後葉から終末期にかけては遺構の数が急激に減少していることが分かる。特に丘陵東斜面にはほとんど遺構がなくなり、わずかに数基の貯蔵穴内の土器にその痕跡をみるのみである。岡東地区の西の丘陵にあたる岡の亀地区では、終末期（編年では４期）の貯蔵穴が16個まとまってみつかっている（註７）。同時期の竪穴住居は確認されていないが、ちょうど岡東地区の集落が終焉を迎える時期と一致しており、この丘陵に集落が移動したことが推測される。

津山市荒神峪遺跡では、時期不明のものもあるが後期前葉から中葉にかけての竪穴住居と貯蔵穴が

混在しており、住居ごとに貯蔵穴が存在していたかのようである（註10）。これに対し約80基の貯蔵穴群が検出された大田十二社遺跡では、後期全般にわたって竪穴住居及び貯蔵穴群があり、各時期ごとに住居群と貯蔵穴群とがそれぞれにまとまって存在するという別方をみせている。このように考えると、各住居に貯蔵穴が付随するものと、竪穴住居群に対して、貯蔵穴群を構成するものという２つの構造が浮かび上がってくる（註11）。二宮岡東遺跡の場合、竪穴住居と貯蔵穴がすべて東斜面に集中しているが、時期的な変遷をみると後者の大田十二社タイプにあてはまると思われ、個別でなく共同的な貯蔵物の管理が行われていたと考えられる。中期後葉に掘立柱建物が存在していた丘陵頂部が後期以降空白域となっているのは、この地が集落共同の領域となり、集落において祭祀を行う場としても機能していたことが考えられる。北斜面に位置する段状遺構３に中期から後期中葉にかけての土器が多数みられ、特に後期中葉の大型器台の出土が目立つのも、それを傍証するものであろう。

掘立柱建物群

調査で確認できた掘立柱建物は合計７棟ある。このうち時期不明の建物２、６を除くと、５棟の建物が弥生時代中期後半の段階に集中していることが分かった。これらの建物の規模をみると（第10表）、建物２・３・７が桁行３ｍ前後、梁間２ｍ前後で小型、建物４、５が桁行６ｍ前後、梁間3.5ｍ前後で中型、建物１が大型と分類できる。中でも建物１については柱材の規模が直径30cm前後のものに復元でき、これは津山市内で確認された掘立柱建物の中でも最大の部類に位置づけられ、他の建物とは一線を画しているように思われる。

津山市内においてこれまで確認された弥生時代中期後葉の掘立柱建物は第11表のとおりであり（註12）、時期の特定できないものなどを含めるとさらに増えるものと思われる。桁行・梁間の規模や柱穴の大きさなどの点からみれば、押入西遺跡・建物Ⅱに次ぐ規模である。この中で、別所谷遺跡は集落のほぼ全容が把握でき、この時期の集落構造を知る手がかりになる。第61図は別所谷遺跡と二宮岡東遺跡の建物規模を比較したものである。このグラフからは、両者ともに突出した規模をもつ掘立柱建物が１棟みられ、その他に中型、小型の建物群がそれぞれ複数棟存在するという共通した集落構造が見てとれる。このような現象は兵庫県下においてもみられるようである。岸本道昭氏は兵庫県龍野市南山高尾遺跡で検出された大型の掘立柱建物をはじめとして兵庫県下のその他の掘立柱建物について規模を調べ、その結果、中期の掘立柱建物は小型のＡ類と大型のＢ類、そして近畿圏に存在する超大型のＣ類とに分類されるものとした（註13ａ・ｂ）。さらに集落のあり方として、Ａ型の建物のみで構成される小集落、Ａ類・Ｂ類で構成される集落、Ａ・Ｂ・Ｃ型の建物すべてを備えた拠点的大集落まで３つの類型を想定している。二宮岡東遺跡の中期集落はこの場合２番目の集落にあてはまると言える。

建物１はその規模や集落の中心的な存在である点を考えると棟持柱をもつものであってもよいが、柱穴はみつからなかった。近年、独立棟持柱をもつ建物を神殿と考える意見があり、それについての是非を問う議論が盛んに行われている。神殿と判断できる基準は、独立棟柱の有無や建物の規模、集落内における位置づけなど様々な視点からとらえる必

番号	桁行 (m)	梁間 (m)	柱間 (間)×(間)	方向 (Nからの角度)
ＳＢ１	7.9	3.1	１×２	Ｎ−65°−Ｗ
ＳＢ２	3.7	2.0	１×１	Ｎ−２°−Ｅ
ＳＢ３	3.7	2.0	１×１	Ｎ−７°−Ｗ
ＳＢ４	5.9	3.4	２×３	Ｎ−73°−Ｅ
ＳＢ５	6.4	3.3	１×５	Ｎ−73°−Ｅ
ＳＢ６	6.1	4.7	２×２	Ｎ−61°−Ｅ
ＳＢ７	3.5	1.8	１×１	Ｎ−25°−Ｅ

第11表　掘立柱建物の規模と方向

遺跡	遺構	桁×梁（間）	桁行全長（m）	梁間全長（m）
東蔵坊	3号建物址	1×1	7.0	3.8
深田河内	建物址1	4×1	6.9	2.8
別所谷	建物址1	1×1	2.7	2.3
	建物址2	4×2	5.4	2.7
	建物址3	5×1	6.4	2.2
	建物址4	1×1	3.0	2.4
	建物址5	1×1	3.4	2.3
	建物址6	1×1	3.6	3.2
	建物址7	1×1	3.4	2.6
	建物址8	1×1	2.9	2.8
	建物址9	3×1	8.0	4.0
一貫西	建物址1	3×2	6.6	3.4
	建物址2	4×1	11.7	3.2
沼E	建物I	1×2	5.0	2.5
	建物II	2×4	7.0	3.5
押入西	建物I	1×1	3.5	2.0
	建物II	1×3	8.4	3.8
	建物III	1×1	3.5	2.5
大田茶屋	建物25	1×1	4.6	2.6
	建物26	1×1	2.5	2.0
	建物27	1×1	4.1	2.4
	建物32	1×1	4.2	2.3
	建物33	1×1	3.7	2.3
	建物34	1×1	4.3	1.7
	建物35	1×1	3.4	1.9
	建物36	1×1	3.1	1.7
西吉田	建物址1	2×1	8.0	2.0
	建物址2	1×1	4.5	2.5
	建物址3	2×1	3.9	1.5

第12表　津山市内弥生時代・中期掘立柱建物一覧表

要があるが、建物1について言えば、神殿とするほど突出した存在とは考えにくい。共同の貯蔵庫あるいは集落に居住する人々が集う建物のようなものと考えられる。

第61図　掘立柱建物の規模

貯蔵穴の構造

今回の調査で検出した貯蔵穴は時期の特定できない貯蔵穴30が竪穴住居2の屋内に存在していた可能性があったことを除けば、その他はすべて屋外に存在していたものと思われる。

貯蔵穴の上屋構造については、これまで様々な可能性があげられている。久世町旦山遺跡では、貯蔵穴の底面に小ピットがいくつかあり、上屋を支えるための柱の存在を推定している（註14）。今回の調査では、貯蔵穴2の底面にピットが計6個みられるが、すべて袋部の奥まった部分にあり、垂直方向に柱を立てるのは不可能である。そのため、上屋を建てるための柱に関係したピットであるかどうかは疑問である。上屋構造の復元の根拠となるのがこの貯蔵穴内や貯蔵穴の上部周辺に存在するピットに限定される以上、これ以上の推測は難しい。また、同じ貯蔵用の倉庫と考えられる掘立柱建物が中期に存在しているにも関わらず、後期にはつくられなくなることについても疑問である。九州では、貯蔵用の施設が掘立柱建物から袋状の土坑に変化するという状況がみられるようであるが、それに比べると全く逆の現象である（註15）。貯蔵するものが異なるのか、掘立柱建物が貯蔵用の倉庫ではなく、別の機能を果たしていたのかは不明だが、中期に存在していた建物群がなくなり、後期になって竪穴住居が次々につくられる様子は中期から後期にかけて集落のあり方が大きく変容していたことを伺わせる。

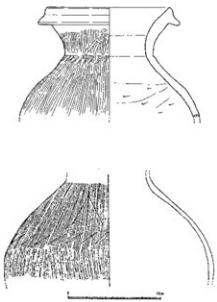
貯蔵穴の使用期間についてもまだまだ不明な点が多い。今回検出した貯蔵穴出土の土器をみても、2期にまたがるものも多数ある。また、過去の調査で検出した貯蔵穴100については後期前葉～後葉にかけての土器が出土している。これは貯蔵穴が使用され始めてから、貯蔵穴としての役割を失い、ごみ穴として使用され、それが徐々に埋まっていく期間を示しているのであろう。大田十二社遺跡ではまさに貯蔵穴として使用していたものがそのまま埋まったかのような状況のものもあり（註16）、この貯蔵穴から出土した土器には時期幅はみられないことから、実際に使用された期間はそれほど長いも

のではなかったものと考える（註17）。同時期の貯蔵穴がある程度のまとまりをもって存在するのも、それを示していると言えよう。

スタンプ文・記号のある土器

貯蔵穴内から出土した弥生土器の特徴の１つに、記号やスタンプ文を施したものが目立つことがあげられる。スタンプ文は型押しによって施された文様のことであり、畿内や吉備、山陰地方を中心に広く分布している。文様形態については早くから注目されており、多くの研究史がある（註18）。近年では山陰地方において出土例が増加しており、鳥取県では県内のスタンプ文施文土器の集成が行われている（註19）。美作地方においてもスタンプ文施文土器は数多く出土しており、津山市内についてはすでに集成がなされている（註20）。最近では有本遺跡から鳥を表現したスタンプ文が施文された壺棺がみつかっており、スタンプ文を施文した土器の出土数は増加傾向にある。今回の調査では段状遺構および貯蔵穴から出土しており、把握した限りでは合計８点みられる。その内訳は段状遺構３黒灰色土内から３点、貯蔵穴15から２点、貯蔵穴18、21、23からそれぞれ１点ずつである。文様を細かくみると、陰刻渦文（いわゆる渦巻状のもの）が貯蔵穴21出土の壺以外のものすべてに施されている。陰刻渦文の中でも渦の外側が飛び出しているものと、飛び出さずに円形を呈するものとがみられ、それらを上下２段並列に、あるいは上下左い違いに施文している。貯蔵穴21出土の壺に施文されたスタンプ文は竹管文およびＳ字状渦文である。Ｓ字状渦文は津山市内の遺跡で数多くみられ、その形状から遺跡ごとに分類が行われている。この分類に照らすと、貯蔵穴21のものはＡ－２類に近い（註20）。器種別にみると、壺の口縁部に施文されたものがほとんどの割合を占め、貯蔵穴15のみ高杯、器台のLI縁部にそれぞれ施文されている。

スタンプ文は文様形態が特殊であることから、祭祀用の土器に施文されるものとして認識されている。二宮岡東遺跡出土のものについてみると、３点のスタンプ文施文土器が出土している段状遺構３では器台が数多く出土しており、これらとの関連性を考慮するとやはり祭祀に用いられたと考えるのが自然であろう。貯蔵穴出土のものについても、祭祀に使用されたものが廃棄されたと推測できる。貯蔵穴15出土の高杯が外面・内面の両方に丹塗りをし、その上からスタンプ文を施文していることは、貯蔵穴に廃棄された土器が単なる日常生活用の土器のみではないことを示すものと思われる。



第62図　記号が描かれた土器
上：二宮岡東遺跡　貯蔵穴７
下：門前池遺跡　　12号住居跡上部
（註22文献から引用）

また、ヘラ描きで線刻を施した壺が貯蔵穴７より１点のみ出土している。これは土器に表現された「記号」であると考えられる。「記号」の描かれた土器は畿内を中心として弥生時代前期からみられ、後期になって一気に増加する。その種類も豊富で、直線のもの、曲線のもの、両方を組み合わせたものなどといった視点から、これまでにも分類が行われている（註21）。

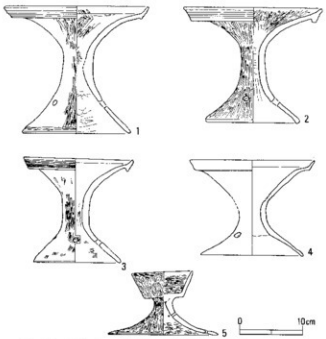
貯蔵穴７出土の土器に描かれたものについてみると、斜め下方にそれぞれ方向を変えて３本の線を描き、最後にそ

の３本の上端を結ぶような形で横方向に１本の短い線を引いている（第62図上）。この記号には意味があったのであろうか。この記号と全く同様のものはこれまで見る限りなく、その意味で解釈が困難である。最も類似しているものとしては、これまで「矢印」記号あるいは「三叉形」記号と呼ばれているものがある（註23・24）。この形のものは土器に描かれた記号の中でも早い段階で出現しており、奈良県唐古・鍵遺跡出土の弥生時代前期の壺に描かれたものをはじめとして、以降後期まで継続的にみられる。岡山県内では赤磐郡山陽町門前池遺跡において壺の肩部に描かれたものがある（第62図下・註22）。この矢印形記号の解釈としては、これまでにも様々な説が出されている。春成秀爾氏によれば、この記号は鳥の脚を表現したもので、弥生人の頭の中に描いた鳥のイメージとして二叉が重要であったものとしている（註23）。また、橋本裕行氏は東日本の絵画土器及び記号の描かれた土器について集成・考察を行い、絵画土器に描かれたシャーマンの指先が３本に分かれていることから、矢印形記号はある種のまじないを行う際の記号の１つとして用いられたと推定する（註24）。二宮岡東遺跡出土の壺に描かれた記号は３本の線だけでなく、最後に１本横方向に短い線を引いている。また、いわゆる「三叉形」と言われるものに比べ、やや太めの線で刻まれている点も疑問が残る。これらの点から判断して、記号の解釈について現時点で断言することはできない。しかし、鹿や人の具体的な絵画とともにこの種の記号が使用されていることや、他の記号に先駆けて前期から継続的にみられることからも、この矢印形の記号が単なる抽象的な記号ではなく、何かのシンボルであり、単独でも意味を持つものであった可能性は高い。そしてこの記号が描かれた土器は丘陵上で行われる集団祭祀に用いられた土器の１つとして不可欠なものであったと考えられる。

他地域の影響を受けた弥生土器について

美作地方の弥生土器の特徴として、吉備や山陰の土器の影響を大きく受けていることは先に述べた。美作地方における「山陰系」土器の様相については中山俊紀が考察しており（註25）、この中ではその出現形態を、①搬入品②忠実形③変換形④変容形の４形態に分類することにより整理しようと試みている。今回の調査によって出土した弥生土器にも他地域の影響を受けたものは多くみられ、その中でも特に貯蔵穴１出土の土器はそれがまとまって出土したものとして重要と思われる。

貯蔵穴１出土の土器の中で、完形に復元できたものは合計３点ある（第27図５～７）。５の高杯は杯部が小さく、大きくひらく脚部をもついわゆる低脚高杯で、杯部が椀状ではなく角張っているのが大きな特徴である。この形状は北陸の弥生終末期にみられるものであり（第63図５、註26）、山陰では長瀬高浜遺跡に類例がある（註27）。低脚高杯は畿内でもよくみられるが、杯部の底部付近が椀状に丸くなっている点で異なる。これも北陸の土器の影響を受けている可能性が高い。６の器台はやや拡張したＬ1縁部をもち、脚柱部に向かって急激にすぼまった後に脚部は直線的にひらく。脚部の中央にはしばしば小さいスカシ孔がみられる。北陸・丹後地方を中心に多くみられ、その他に但馬などでも一定量の出土があることから、日本海沿岸地域に特有の器形のものであると考えられる（第63図、註28）。この器台のさらに装飾的なものとして、器台の上にスカシ孔のある器台をさらに載せたような形状のものがある。これは一般的に「装飾器台」と呼ばれ、北陸は加賀・越前を分布の中心とし、丹後は３番目に出土の多い地域とされている（註29）。この装飾器台の分布と、貯蔵穴１出土の器台の分布域とは共通するところが多い。美作や山陰においてこれまでに装飾器台は出土していないことから、装飾器台は一定地域に限定してみられる特殊な上器であると考えられ、貯蔵穴１の器台は装飾器台よりも



第63図　貯蔵穴1出土土器に類似する土器（S＝1：6）
（各報告書から引用、一部改変）
1．西大路土居遺跡（鳥取市）　2．大岡遺跡（兵庫県氷上郡氷上町）
3．通入遺跡（京都府舞鶴市）　4．大田十二柱遺跡（岡山県津山市）
5．鉢田遺跡（石川県金沢市）

さらに広範囲に流布するタイプの器台としてとらえることができよう。この器台は近年山陰でも出土例が増加しているが（第63図1）、出土頻度から判断すればやはり山陰よりもやや東に分布の中心がありそうである。また、7の鼓形器台は頸部の幅はやや広く、大田十二社4期に比定されている貯蔵穴F29出土の鼓形器台に類似している。また、古見林遺法面から一括して出土した土器（註30）の中にも、若干新しい様相のものが含まれるものの、同時期のものと思われる鼓形器台が出土している。

これらの状況から、貯蔵穴1出土の土器は日本海沿岸地域からの強い影響を受けたものであるということがわかる。また、北陸や丹後の影響下にある器台は山陰にも出土しており、この地域を介して伝わった器形である可能性が高い。ただし但馬など兵庫県北西部地域にも多くみられることも事実であり、無視することはできない。今回は土器の胎土分析など、科学的な方面での考察はできなかったため、搬入品の状況について述べることはできなかった。しかし、このように他地域の影響を受けた土器が一つの遺構から出土するという現象は、集落の構成員の出自や人の移動などの問題を考える上で大きな手がかりとなるものであり、今後も注目していきたい。

2．古墳時代

古墳時代の遺構として今回の調査で検出した古墳は1基（二宮岡東古墳）で、出土遺物は須恵器のみである。前回の国道179号線建設に伴う調査（註7）でも古墳の検出はない。古墳は墳丘の大半が削平されていたが、周溝が確認でき、直径10m程の円墳である。また、かろうじて埋葬施設の一部を確認する事ができた。おそらく木棺直葬と考えられる。内部に須恵器が副葬されているので、これらから時期を検討し、副葬形態の特徴について若干考えてみたい。

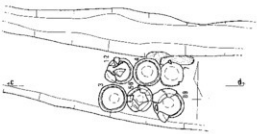
出土した須恵器は杯と甕である。この内杯は完形品を含め10点ある。蓋の口径は13.8～14.8cm、身の口径は12～13.2cmである。周辺の同様な須恵器をもつ古墳としては、大開古墳群（第64図3、註31）があり、円墳4基（直径8.5～13m）で構成され、埋葬施設はすべて木棺である。内部から須恵器、鉄器（鉄斧、鉄鏃、刀子、鎌）、周溝内から鉄滓が出土している。これらの内、須恵器が比較的多く出土している3・4号墳の須恵器杯と口径、器高について比べると、蓋・身とも良く似た値域に分布する。そのためこれらと同形と考えられる。ただ、杯身の口縁の立ち上がり具合を比較するとやや異なっているようである。そのため器高に対する口縁部の立ち上がりの割合（口縁の立ち上がりの高さを器高で割る）を求めると、大開4号墳は0.33～0.5の範囲で平均すると0.4、本例は0.26～0.41で平均すると

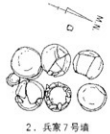
0.33となる。つまり平均では本例の方が立ち上がり具合が少ないと言える。特に4号墳には0.4を越え、器高の半分近い立ち上がりをもつものの一群があり、これは本例には無く、類例を求めると津山市門の山12・14号墳（註32）など周辺地域に見られるものである。これについては、比較的地域色の強い器形と考え、周辺地域で焼かれているものと考えている。この両者の違いを時期的なものとしてとらえるか、同時期で工人の差としてとらえるかは、これの窯が発見されていないため即断はできない。

以上の特徴を須恵器編年にあてはめると、陶邑編年（註33）ではMT15型式からTK10型式の範疇でとらえられる。両型式の違いはLI径はほぼ同じだが、身で言えば器高がMT15型式の方がTK10型式より若干高く、また先の器高に対するLI縁部高の割合を求めると、MT15型式は0.4を越えるものがあり、逆にTK10型式は0.3前後でおさまるようである。つまり新しくなるにつれて口縁の立ち上がりが低くなり器高に対する割合も小さくなる。そのため大期4号墳など0.4を越える一群は、全体のプロポーションは異なるが、MT15型式に類似しており、やや古い特徴としてとらえる事が可能となる。以上から、本例には0.4を越えるものは1例しか無く、ほとんどが0.3前後である事から、TK10型式の範疇とする事ができる。この型式は美作地方の須恵器編年ではV期（註32）である。

次に須恵器の副葬状態について若干検討する。本例は須恵器の杯をセットにし3個ずつ2列に並べている（第64図1）。検出時にセットとなっていたのは3セットのみであるが、削平などを考えると、すべてセットになっていた可能性もある。このような六を基本とする須恵器の副葬形態については、楠元哲夫氏の研究（註34）があり、これらを「六文銭」祭式と呼び、奈良県内兵家古墳群（同2・3、註35）などの類例から5世紀の後半には見られ、6世紀前半にはほぼ定型化する須恵器祭式とし、これら祭式の形態は墳丘裾部→墓壙上→墓壙内へと変遷するが、棺内に納められる事は無い。これに従ってみると、まさに本例は墓壙内の棺外に置かれたものとなる。これは被葬者個人の最後の1食分の食事を供えたもので、その意図は現世での食事を拒み、冥界での食事をするよう促す事にあったとされる。今回の例は身の中に何も見られなかったので、供物などが入っていたかは定かではないが、完形品でセットになっているものが多かった事から、中に何かが入っていた可能性は大きい。このような観点から美作地方の古墳を再検討すると、須恵器祭式と思われる例がいくつかある。津山市長畝山北11号墳（註36）は墳丘裾部から須恵器（杯・蓋）や鉄鉾が出土しているが、数は少なく点在するため埋葬施設が存在していた可能性と墓前祭祀の可能性を指摘している。また、同4号墳（同4、註37）の主体は墓壙内の棺外小口側に須恵器（杯・壺）などが六を基本としていないが複数置かれている。長畝山北古墳群中には、墓壙内の棺外小口側に須恵器が複数置かれている例が多く見られる。これら古墳の時期はTK23～TK47型式で、5世紀末から6世紀初頭の古墳群である。河辺上原1号墳第2主体（同5、註38）も墓壙内の棺外小口側に須恵器（杯・壺）と土師器を置いている。杯はセットとなっており5セットある。時期はMT15型式である。門の山14号墳（同6、註32）の主体は墓壙内棺外小口側に須恵器（杯）の蓋4点、身5点を置き、その内セットで置かれているのは1セットのみでその他の蓋はほとんどが反対を向いている。また、鏡野町槙之本峪古墳（同7、註5）は、棺外に杯が4セット置かれているが、セット関係で置かれていたのは2セットのみで他の蓋は逆を向いている。門の山14号墳と槙之本峪古墳の例はセットになっているものは少なく、もしかすると供物は中にいれておらず、楠元氏の言う死穢の再来を拒む行為の一つであったのかもしれない。この古墳はMT15～TK10型式である。

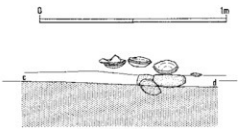
以上から、六を基本としているものは少ないが、美作地方においても、5世紀末から6世紀前半にか



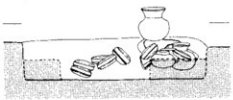


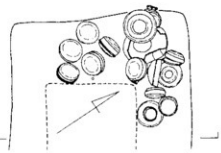
2．兵家7号墳

3．兵家2号墳

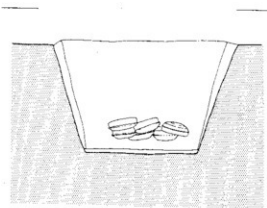


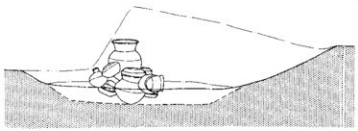
1．二宮岡東古墳

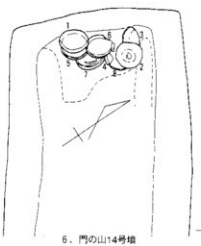




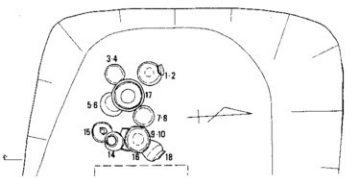
4．長畝山北4号墳



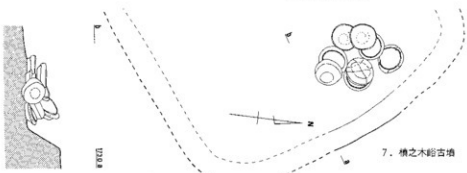




6．門の山14号墳



5．河辺上原1号墳



7．横之木前古墳

第64図 須恵器の副葬形態
（S＝1：20、各報告書からの引用、一部改変）

けて墳丘裾部から墓壙内へとこれら須恵器祭式が変遷している可能性が考えられるが、例えば小原古墳群（註39）や大畑古墳群（註40）などこれら須恵器祭式が認められない古墳群もあり、その他の埋葬施設（竪穴式石槨など）でも同様な事が言えるのか、他の副葬品との関係はどうなのか整理しなければならない問題点も多い。これについては再度検討したい。

3．古代～近世

調査区の北斜面で鉄滓と須恵器、勝間田焼が出土している。これらはほぼ同一の土層からの出土である事から、これら須恵器などが鉄滓の所属時期と推測できる。須恵器はいずれも細片が多いが、古墳時代以降と考えられる甕片の他、高台のつく杯身がありこれは古代の範疇である。また上限は勝間田焼があり、底部の破片しか出土していないので明瞭でないが、椀の編年（註41）では上限は13世紀前半ごろまでとされる。ただ、この期間が鉄滓の所属期間とは到底考えられないので、土器片の量からして、少なくとも古墳時代以降古代までの間と考えておきたい。また、共伴する鉄滓は分析をしていないため詳細は不明だが、表面観察から製錬滓と考えられる。これらの中には炉壁を思わせる破片もある。前回の調査で出土している鉄滓は分析され、鍛冶滓である（註42）。

柵列1から出土した勝間田焼の椀は、底部の形態から先の編年のⅡ－1期頃、12世紀の中頃と推測され、段状遺構1の備前焼はⅣ期（註43）頃で15世紀前半頃の所産である。また、土坑5は上師器の小皿のみであるため、時期決定は難しいが、勝間田焼と共伴する事例が多い事から、先の勝間田焼の存続時期の中でとらえられる。

また、近世以降と考えられる墓が9基ある。調査区の頂部は最近まで墓地であり、今回の開発に伴い墓地は移転した。しかし、下部構造までは移転していないので、今回の調査でこれら近代以降の墓の下部構造も検出している。近代以降の墓の中には年代がわかるものもあり、調査対象から外したため今回の報告書には掲載していないが、この墓の中でおもしろいものは、昭和39年の墓の中に寛永通寶が六道銭として副葬されている点である。このように時代がはるかに違ったものを副葬する風習があるため、この銭貨のみで時代を決めるのはかなり慎重を要する。ただ今回の例はその他の副葬品として着物や入れ歯など当時のものが一緒に副葬されていたので時代を間違える事はない。また、今回近世墓として載せた9基は、これら近代以降の墓とは明らかに掘り方の形態、埋土などが異なっていた。今回の近世墓からの副葬品としては銭貨は無く、陶器や磁器、燭台があるのみで、それも出土したのは3基のみである。これら陶器はいずれも肥前陶器と考えられ、その特徴から17世紀頃（註44）の製品である。そのため、これら墓も17世紀以降のものと考えられる。

（註1）中山俊紀1981『大田十二社遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集）津山市教育委員会
（註2a）高橋護1980「弥生土器－山陽－」『考古学ジャーナル』№173・175・179・181　ニューサイエンス社
（註2b）正岡睦夫1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社
（註3）柳瀬昭彦ほか1977『川入・上束』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16）岡山県教育委員会
（註4）藤田憲司1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号
（註5）立石盛詞1999『葡萄田頭遺跡　槙之木峪古墳』（鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第4集）岡山県苫田郡鏡野町教育委員会　また、立石氏の御好意により実見させていただいた。
（註6）立石盛詞1999『薬師前遺跡』（鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第5集）岡山県苫田郡鏡野町教育委員会
（註7）高畑知功ほか1979『二宮遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28）岡山県教育委員会
（註8）基本的に貯蔵穴から出土する土器については時期幅が短いものと考えているが、出土土器を観察すると、2時期に分けられるものがみられる。そのため、同じ貯蔵穴を重複して数えている場合がある。これは過去の調査で検出された貯蔵穴でもみられた現象であり、貯蔵穴の使用期間などを考える上で重要である。
（註9）南斜面に位置するSH88がこの時期である可能性が高いが、正確な時期は不明である。貯蔵穴の数から判断しても、住居が1軒のみということは考えにくいが、集落の規模が縮小の方向に向かっているのは確実である。
（註10）小郷利幸1999『荒神峪遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集）津山市教育委員会

(註11) 岡山市津寺遺跡では、弥生時代の集落が大きく3群（A群、B群、C群）に分かれており、その中でA群は貯蔵穴(報告書では袋状土壙としている)の集中的な管理が想定されているのに対し、B群、C群では竪穴住居と貯蔵穴が対応する様相を呈しているとされている。このうちA群、B群はともに中期後葉から後期前葉に集落の中心的な形成時期があり、同時期であっても管理体制の相違があることを示しているといえる。(亀山行雄1997『津寺遺跡4』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116)岡山県教育委員会から)

(註12) 表に掲載した遺跡の文献は次のとおり。
安川豊史編1981『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集) 津山市教育委員会
行田裕美編1988『深田河内遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集) 津山市教育委員会
行田裕美編1994『別所谷遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集) 津山市教育委員会
行田裕美編1990『一貫西遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集) 津山市教育委員会
中山俊紀編1981『沼E遺跡Ⅱ』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集) 津山市教育委員会
柳瀬昭彦ほか1974「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会
岡本寛久ほか1998「大田茶屋遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129』岡山県教育委員会
行田裕美編1985『西吉田遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集) 津山市教育委員会

(註13a) 岸本道昭ほか1997『南山古墳群　南山高屋遺跡』(龍野市文化財調査報告17) 龍野市教育委員会

(註13b) 岸本道昭1998「掘立柱建物からみた弥生時代集落と首長－兵庫県と周辺の事例から－」『考古学研究』第44巻第4号

(註14) 福田正継・浅倉秀昭編1999『旦山遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』　岡山県教育委員会

(註15) 逆の現象とはいっても、貯蔵の形態が掘立柱建物から貯蔵穴と変化したという訳ではない。両者が同時期に併存する場合もある。

(註16) 大田十二社遺跡袋状貯蔵穴PE55などが該当する。

(註17) 岡山市津寺遺跡で検出された貯蔵穴では湧水があるため、長期保存には適さず、根茎類などの短期保存に用いることを推定しており、1基の貯蔵穴の使用期間は長くても1年以内で機能を終えるものとしている。(大橋雅也ほか1995『津寺遺跡2』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98) 岡山県教育委員会から。)

(註18) 名越勉・甲斐忠彦1972「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』第57巻第4号

(註19) 湯村功ほか1997『天萬土居前遺跡』(鳥取県教育文化財団調査報告書53) (財) 鳥取県教育文化財団

(註20) 野上恭子1994「津山のスタンプ文」『年報　津山弥生の里』第1号　津山市教育委員会

(註21) 記号の分類は藤田三郎によって詳細に行われており、縦線や斜線などの描き方を基準に10の形に分け、その構成の仕方によってさらに詳細な分類がなされている。
藤田三郎1982「弥生時代の記号文」『同志社大学考古学シリーズⅠ　考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会

(註22) 枝川陽ほか1975『門前池遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9) 岡山県教育委員会

(註23) 春成秀爾1991「絵画から記号へ－弥生時代における農耕儀礼の盛衰－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立歴史民俗博物館

(註24) 橋本裕行1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』第八　吉川弘文館

(註25) 中山俊紀1985「岡山県北部におけるいわゆる「山陰系」土器の様相」『第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録』第18回埋蔵文化財研究会事務局

(註26) 伊藤雅文編1991『畝田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

(註27a) 湯村功ほか1996「鳥取県内出土の外来系土器について」『天萬土居前遺跡』(鳥取県教育文化財団調査報告書53) (財) 鳥取県教育文化財団　この中では長瀬高浜遺跡竪穴住居58出土の土器について、「畿内系」としている。

(註27b) 西村彰滋ほか1981『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(鳥取県教育文化財団報告書8) (財) 鳥取県教育文化財団

(註28) 第63図に使用した文献は次のとおり。(4は前掲註1。5は前掲註26)
谷口恭子・藤本隆之編1993『西大路土居遺跡』(財) 鳥取市教育福祉振興会
山田清朝編1995『犬岡遺跡』(兵庫県埋蔵文化財調査報告　第147冊) 兵庫県教育委員会
筒井崇史ほか1998「浦入遺跡」『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

(註29) 岸岡貴英1991「京都府出土の装飾器台について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集－創立10周年－ (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

(註30) 平岡正宏1999「吉見林道法面採集の土器」『年報　津山弥生の里』第6号　津山市教育委員会

(註31) 平岡正宏1994『大開古墳群・大開遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集) 津山市教育委員会

(註32) 小郷利幸1992『門の山古墳群』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集) 津山市教育委員会

(註33) 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

(註34) 楠元哲夫1992「六文銭－古墳における須恵器祭式成立の意義と背景－」『同志社大学考古学シリーズⅤ考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会

(註35) 伊藤勇輔他1978「兵家古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37集』奈良県立橿原考古学研究所

(註36) 行田裕美・小郷利幸1996『長畝山北11号墳』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集) 津山市教育委員会

(註37) 行田裕美・木村祐子1992『長畝山北古墳群』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集) 津山市教育委員会

(註38) 小郷利幸1994『河辺上原遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集) 河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会

(註39) 行田裕美・小郷利幸・木村祐子1991『小原遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集) 津山市土地開発公社・津山市教育委員会

(註40) 行田裕美・小郷利幸1993『大畑遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集) 津山市土地開発公社・津山市教育委員会

(註41) 平岡正宏1993「美作の古代末から中世の土器-勝間田焼椀を中心として－」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会

(註42) 大澤正己1982「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬滓、鍛冶滓の検討」『稼山遺跡群Ⅳ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会

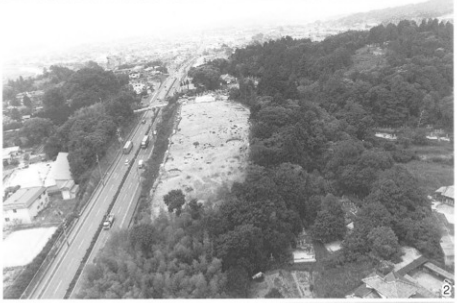
(註43) 間壁忠彦1990「備前焼」『考古学ライブラリー60』ニュー・サイエンス社

(註44) 大橋康二1989「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』ニュー・サイエンス社

図　　版

発掘作業員の皆さん

1．二宮岡東遺跡
遠景（南から）

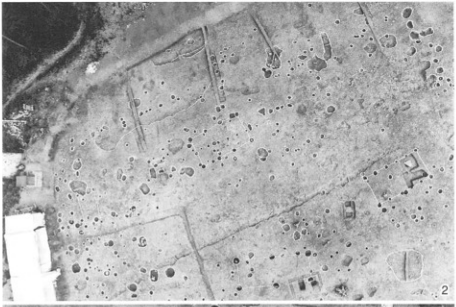


2．同上
（東から）

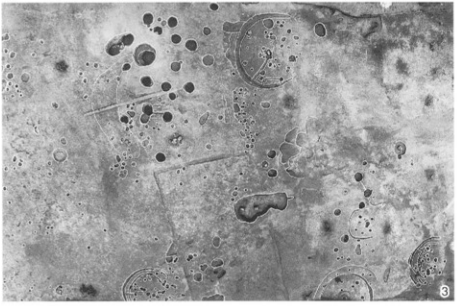
3．同上
（西から）

図版 2

1．二宮岡東遺跡
全景



2．同上
（西側）

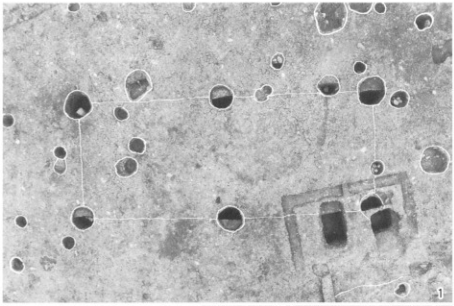


3．同上
（東側）

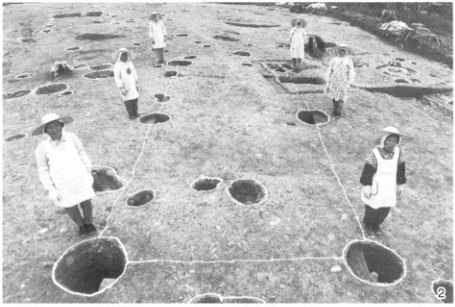
1．調査前
（東から）

2．表土剥ぎ

3．表土剥ぎ



1．建物 1



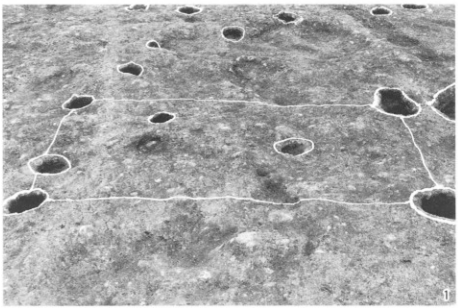
2．同上

3．同上
柱穴 2 土層

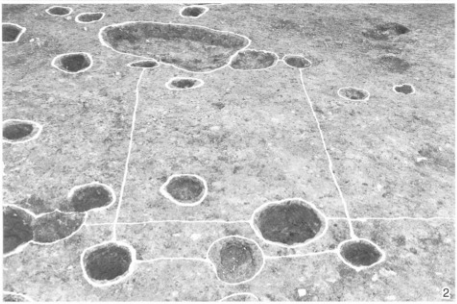
1．建物1
柱穴5土層

2．同上
柱穴1

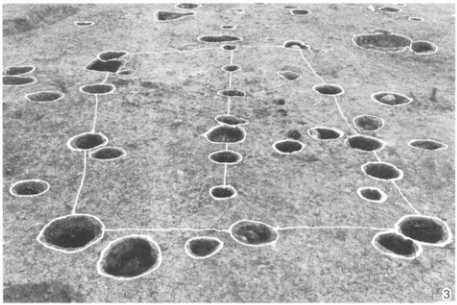
3．同上
柱穴5



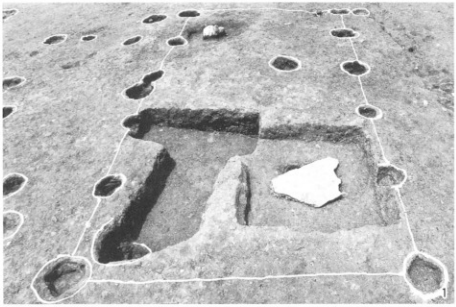
1．建物 2



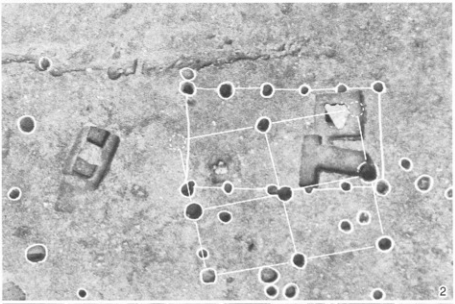
2．建物 3



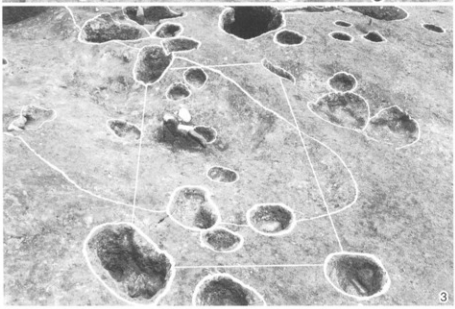
3．建物 4
柵列 4



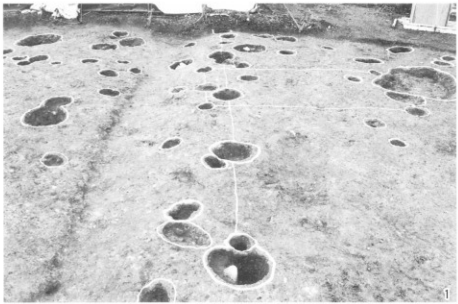
1．建物 5



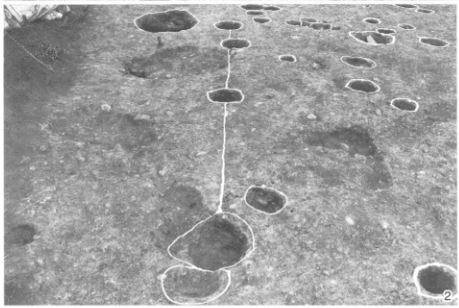
2．建物 5・6



3．建物 7

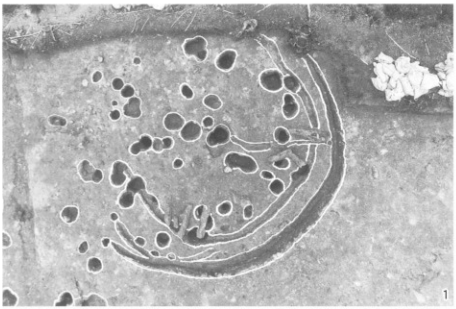


1．柵列 1



2．柵列 2

3．柵列 3

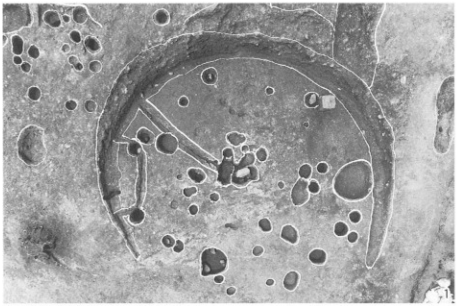


1．竪穴住居 1

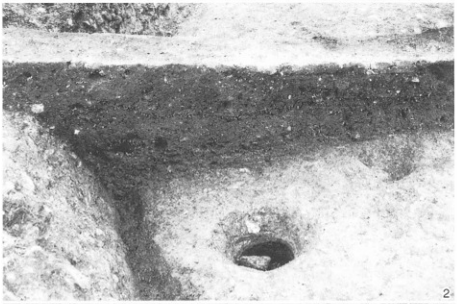
2．同上
調査風景

3．竪穴住居 1

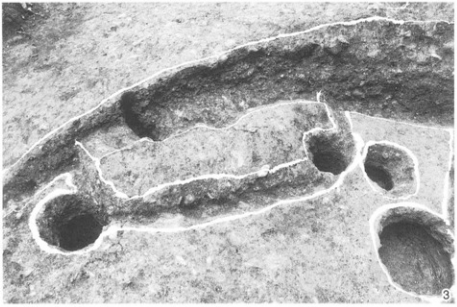
図版10



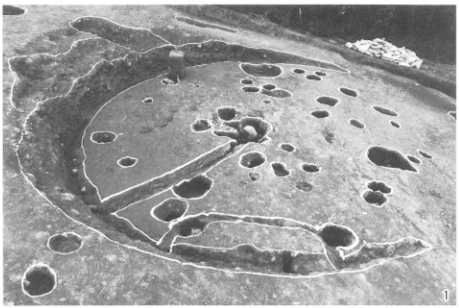
1．竪穴住居２



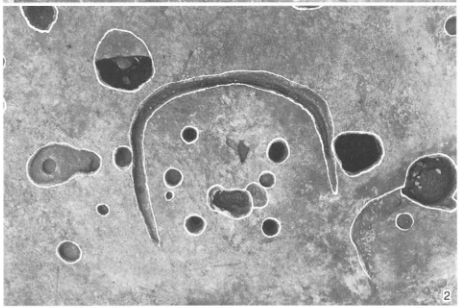
2．同上
土層



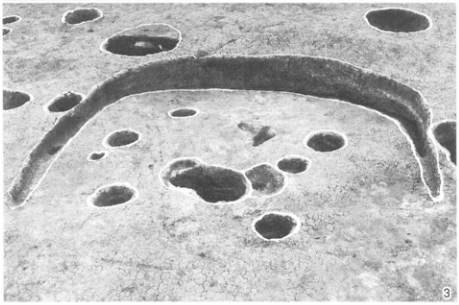
3．同上
入口部分？



1．竪穴住居２

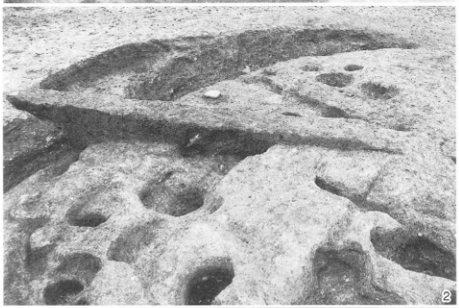


2．竪穴住居３



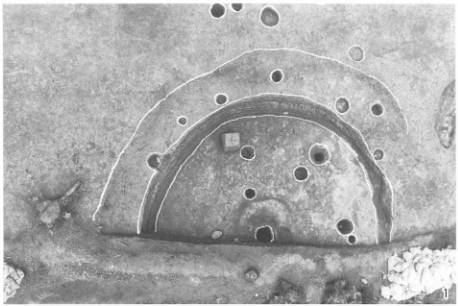
3．周上

1．竪穴住居4



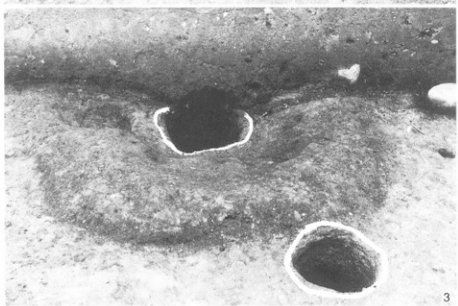
2．同上
土層

3．竪穴住居4

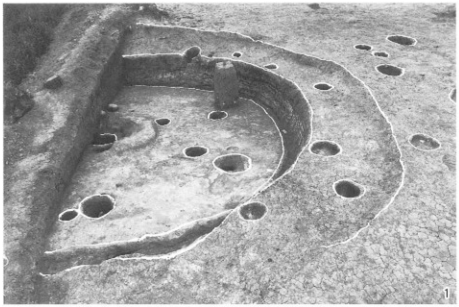


1．竪穴住居5

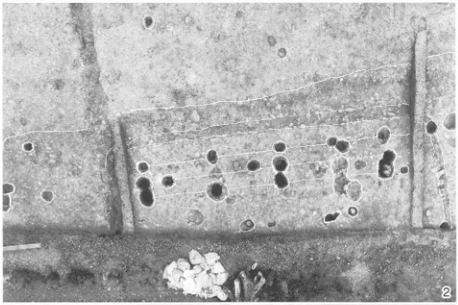
2．同上
土層



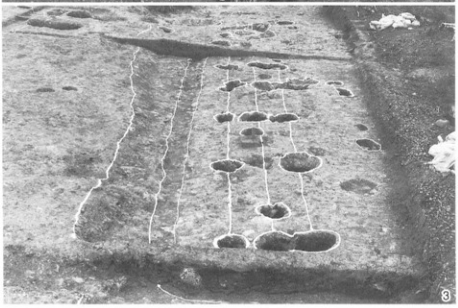
3．同上
中央穴



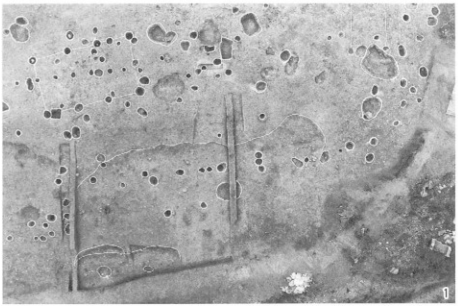
1．竪穴住居５



2．段状遺構１・２

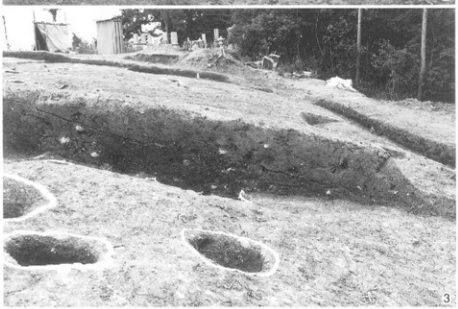


3．同上



1．段状遺構３・４

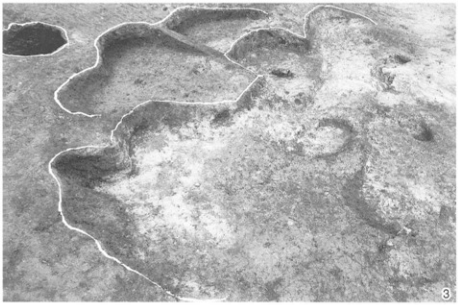
2．同上
調査風景



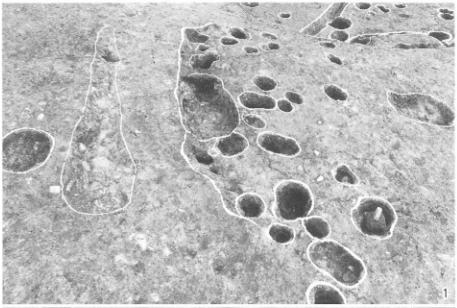
3．段状遺構３
土層

1．段状遺構３

2．段状遺構４

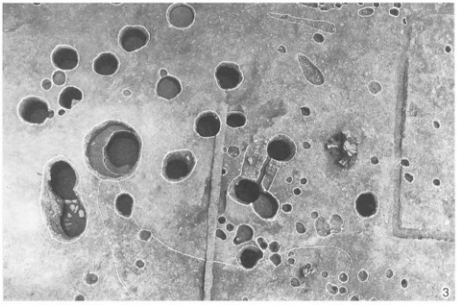


3．段状遺構５・６
貯蔵穴28



1．段状遺構 7

2．段状遺構 8



3．貯蔵穴群